

---

# プレス【breath】

徳次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブレス【breath】

### 【Zコード】

Z6253C

### 【作者名】

徳次郎

### 【あらすじ】

彼女は生きる為に週に一度死ぬ。みお澪の友人から聞いたその言葉はいつたいどういう意味なのか。北原省吾が一目惚れした隣駅の高校に通う南澤澪みなみさわみお。明るい彼女が時折見せる果敢なげな横顔にいつたいどんな秘密があるのか 省吾を密かに想うクラスメイトの愛香は父親の勤める病院で奇妙な噂を耳にするが……

## 【プロローグ】（前書き）

タイトルの「ブレス」は呼吸や吐息、息使いの意味です。僅かなサイエンスフィクション（SF）も取り入れた恋愛ですが、あくまで現代小説です。

## 【プロローグ】

漆黒の闇に輝く無数の青白い光は、呼び起されたタナトスが見せる最後の絶景。

今は白昼のはずなのに夜空の星が見える。

満天の星が瞬く姿なんて、東京では見えるはず無いのに……  
ブレスは沈黙し、あまりの静寂に微かな耳鳴りがする。  
不自然なほどに静けさ……

それは鼓動が消えたから。

自分の鼓動が聞こえないと言つ事は、この瞬間は生きていないと言つ事なのだ。

生きていないと言つ事は、死んでいるに違いない。

1分20秒……彼は確かにそう言つた。

脈を打たない身体はあつという間に体温を失い、魂は凍える。  
まるで氷の世界にいるようだ。

ここは本当は南極なのかもしれない。それとも北極?  
だから満天の星空の向こうには、ライムグリーンから淡いバイオレットにグラデーションを描くオーロラの輝きも見えるのだ。  
1分20秒間のオーロラを見あげて、鼓動すら聞こえない生と死の狭間に佇む魂は、まるで永遠だ。

心臓の鼓動を示すモニターの波形は何処までも真っ直ぐな線を描いて、单调な途切れのない長音だけを発している。

青白い無影灯の光が照らし出す診察台の上には白い少女が横たわり、胸元を露にしていた。周囲には必要最低限の機器類が機能的に配置されている。

男は腕に嵌めた口レックスのクロノグラフで正確に時間を読み取る。

「よし」

除細動器

心肺蘇生装置の電圧を上げると、キュイイイイイと唸りを上げて液晶モニターの数値が上がる。一般救命に使用される携帯用のものではなく、病院に装備されているドクター用のものだ。再び時計を見ると、滑らかに振動して走る針は1分20秒に差し掛かかろうとしていた。

右手を心臓の下部へ、左手は右乳房の上、的確に位置を定めると両方の電極パッドをじっきに白い肌へ押し当てる。

バチンッ。

一瞬の放電に空気が震え、横たわる少女の身体が微かに跳ね上がり。

しかし心拍計に動きはない。

静寂の中に、心停止を示す途切れの無い長音がただ響いている。男は顔色一つ変えずに再び器機に電力をチャージして、チラリと時計に目を配る。

心停止から1分30秒が経過していた。

電圧がチャージされる機器の唸る音が微かに響くと、モニターにオンラインのサインが点灯する。再度、白い肌に電極パッドを軽く当てる。バチンッ。

放電する音と共に再び少女の身体が跳ね上がると、心拍計が歯切れの良い音をたてて波動を蘇えらせた。

「よし……」

男は微かに浮いた額の汗を、両腕で拭つた。



## 【1】通学電車

庭木がバサバサと不気味な音をたて、空き缶は通りを激しく転げまわり、窓を叩く雨音があまりにつみつけて、なかなか寝つく事が出来なかつた。

電線を抜けた風きり音が、恐竜の唸り声のように響きわたり、風圧で時折ボッと音を出して窓ガラスが歪む。

大型の台風が東京を直撃しているのだ。

どうにも落ち着いて眠りに入り込めないから、結局一度消したテレビを再び点けて布団に入る。夜通し流れるニュース番組も、外から聞こえる騒音よりはましだ。

それでも台風は、無事明け方には通過したようで、朝起きると湿った風が少々強かつたが、空は青々と晴れ上がりつて庭木に鳥の囀りが聞こえていた。

台風一過は過ぎ去る夏の日々を、爽やかに、そして果敢なげに見送る。

北原省吾(きたはら じゅうご)はベッドから起きてキッキンへ行くと、インスタントコーヒーを作つてトースターにパンを放り込み、窓を少し開けた。

一瞬、ビュウという音がして、心地よい風が舞い込んでくる。

通りを行く小学生の戯れる声が聞こえてきた。毎朝妙に早い時間にここを通る子供たちだ。

携帯電話を左手で開きメールをチェックすると、橋木裕也からメールが入つていた。それと、一昨日池袋のカラオケ館で知り合つたミナとケイコ。

どれもたいした用件ではない。暇な合間に送つて來たのだろう。

だいたい、朝一にメールを送る気がしれない。起きがけでもう誰かに相手をしてもらいたいのか？ 省吾はその辺の感覚は今時ではないのかもしない。

冷めている。という訳でもない。ただ、母親と一人暮らしの長い

彼は、小学校高学年頃から朝起きると一人で、学校へ行くまで誰とも言葉を交わさないのが普通だ。

そんな習慣の長かった省吾には、携帯を持った途端に朝一で誰から声がかかるとも、直ぐに返信する気力が生まれない。

だから、修学旅行などで友人達と一緒に迎える朝は、密かに苦痛でもあった。

まあ、メールは何時でも返信できるし言葉を発する必要も無いので、来る分には苦にはならないが。

トーストを齧つてコーヒーを飲んでひと息つくと、とりあえずメールに返信する。

左手で携帯のキーを操作する彼の仕草は、友人の裕也に言わせる

と『奇妙』なのだそうだが……

適当に言葉を打ち込んで送信ボタンを押す。何でもいいから返信しておけば、それで縁は繋がるのだ。

制服に着替えて鞄を肩に掛けた省吾は、玄関のドアを開けた瞬間それが強風で外に持つていかれ、一瞬「うわっ」と声を上げる。何だか思っていた以上に風は強かった。

外に出た途端にキャラメルブラウンにカラーリングした髪の毛は、一方方向に煽られて頭皮が引っ張られる。

玄関を出てリビングとは反対側に位置する和室の縁側に目が留まつた。そこに置いてあつた赤いポリバケツが無くなっている。

昨日までは確かにあつたから、おそらく台風の風で何処かへ飛んでいったのだろう。

自転車、大変そうだな……省吾はそう思いながら物置の陰からATBを取り出す。駅までの方角は、向かい風だつた。

いくらペダルを踏み込んでもなかなか進まない自転車でようやく駅に着くと、階段を上がりながら髪の毛に何度も手グシを入れる。ファイバーWAXを着けた髪の毛は、風に煽られた形状を維持しようとするのだ。

慌しい朝の喧騒の中を縫うように、足早に改札を抜けてホームに

降りる為の階段を下る。すると、女子高生が何だか階段の途中でたむろしていた。

他の通行人には少々邪魔になるが、彼女達にはそんな事は関係ないのだろう。

何だか解らないが、その横を通りてホームに出ると、直ぐ田の前にいた娘のスカートが強風に煽られて大胆に捲れ上がった。慌てて押さえるが間に合わない。

その向こうでは一人組みの、同じく女子高生がスカートを押さえながら奇声を発していた。

…… どうか。こうなるからさつきの連中は四方が囲われた階段の所に集まっていたのだ。

早起きはしていないが、なんだか三文ほど得した気分で省吾はそんな事を思った。

彼は何食わぬ顔でその場を通り過ぎると、いつもの立ち位置へ向う。三両田の一番前のドアと、毎朝乗り込む場所が決まっているのだ。

降りる駅で階段に近いからなのだが、一両田の一番後ろのドアが本来一番近くに当たる。ただ、混雑に巻き込まれるのが嫌で、少しだけずらしているのだが。

直ぐに電車がホームへ入つて来て、目の前で開いたドアから省吾は車内へ乗り込んだ。

大河に流されるように毎日がなんとなく過ぎてゆく中で、ずいぶん前からその場所に乗るのがちょっとびり楽しい。

朝の登校という、一日でもっとも憂鬱なひと時が僅かに癒される。省吾は朝の下り電車で学校へ向う為、車内は上りほど混み合っていない。

どこから乗つてくるかは知らないが、その娘は同じ車両のひとつ隣のドア近辺に何時も立つ。

省吾の高校は一駅目だが、彼女の学校はその先、隣駅にある女子高だという事は知っている。

夏服は水色のブラウスにグリーンのターランチェックのスカートだが、冬服のキャメル色のブレザーはかなり目立つ。

黒い髪は三つ編みのお下げにしている所をみると、意外に校則が厳しいのだろうか。時折友達らしき娘と一緒にだが、その娘も真っ黒な髪の毛を肩の上で揃えた地味な、といふかやつぱり清楚な印象を受ける。

少し距離が在る為、彼女達の話し声はほとんど聞き取れない。

始業式の日に見た彼女の友達は少し日焼けしていたが、彼女自身は変わらず白い肌のままだった。

それは、残暑の陽差が差し込む車内で、微かに乱反射するほどの白だった。

本来省吾はもう一本遅いギリギリの電車で学校へ通っていたが、春の豪雨で電車が遅れていた時にたまたま一本早いはずの車両に乗つた。

そこで彼女を見かけたのだ。

「田惚れ……そんなものが本当にあるとは思わなかつた。  
もう一度逢いたかつた。」

翌日、彼は確かめるように一本早い電車に乗ると、やつぱり彼女はその車両にいた。

夏休みに彼女の家を探索しようとも思つたが、なかなか帰りの電車で一緒になる事がない為、彼女がどの駅から乗つてくるのか判らない。この沿線に住んでいるとも限らないのだ。

そういうしている内に試験休みに入つてしまい、この夏休み明け、彼女と再び会えるかどうかが不安でもあり楽しみでもあつた。

しかし今週初めの始業式、彼女は夏休み前と同じ電車で同じドアの近くにいた。

彼は一駅だけの約十二分間、窓の外を眺めるよう佇むその娘を見て過ごすと、何時もの駅を降りて学校へ向つた。

「ショウ、ミナちゃんとかからメール来たか？」

教室へ入るなり橋木裕也が声をかけて来た。

親しい仲間は省吾の事をショウと呼ぶ。裕也は電車とバスを使って登校しているが、バスの時間の関係で省吾と同じ路線電車を利用するにも関わらず、彼よりも大分早い時間に学校へ着く。

登校時間だけ見れば、かなりの優等生だ。

「ああ、今朝来てたな」

省吾は一番後ろに在る自分の机に鞄を置いて椅子を引いた。女子を挟んだ窓際の一番後ろの席に裕也はいる。椅子を後ろに傾けながら省吾に話しかけていた。

「おっしゃあ、今日当たりづクロで待ち合わせつての、どう」

「ええ、俺はいいよ

「何でだよ」

「いや、別に。ていうか、めんどくせえ

「何だよそれ

裕也が落胆した顔を見せた時、教室の扉が開いて先生が入つて來たので二人の話は一端区切られた。

省吾にしてみれば、電車で毎朝に会つ彼女に何とか近づきたい。そう思うと、他の娘にわざわざ会いに出かける気が起きないのだ。この前はたまたまカラオケ館の建物の中で知り合つたから裕也と一緒に声をかけたが、わざわざ出向くような事ではない。

「あんたたち、またナンパしてたの？」

省吾の前の席にいた神崎愛香が振り返つて、小声で言った。

夏の旅行で焼けた肌は、まるでヒサ口で焼いたようにほんのり小麦色でキレイだし、頬にかかったストレートの茶色い髪の毛は、他の誰よりも艶やかだ。

ホームルームは、どうでもいい連絡事項が担任教師の口から勝手に発せられて教室に流れている。

「また。って、なんだよ。率先して声をかけるのは裕也だぜ。俺は何時も巻き添えをくうんだ」

省吾も机に前のめりになつて小声で返した。

「ハイハイ」

愛香は肩をすくめると長い睫毛を瞬きさせて小さく失笑して、前に向き直った。

「昼休み、裕也は食い下がらなかつた。

「なあ、行こうぜショウ」

「お前一人で行けよ。ミナとケイ」「のどつちかは決まつてゐるんだろ」「最初はやつぱ合同でさあ。さつきメールで話したら、彼女らがそう言つてたんだよ」

「しょうがねえな。俺、適当なところでフケるからな」

押し負けた省吾が肩をすくめると、裕也は無言で笑みを浮かべ、ガツツポーズをとつた。

「どうしたの、陽子」

「頭痛がさあ」

「あたし、クスリ持つてるからあげるよ。薬局のより強いから半分だけ飲みな」

愛香がそう言つて陽子に粉薬を渡す。

二人のやり取りを遠目に見ていた省吾は

「何で愛香のやつ、市販じゃないクスリなんて持つてるんだ?」

「ああ、アイツの親父は大学病院の何とか部長でさ。その関連だろ」  
省吾は以前から愛香とは知り合つたが、親しくなつたのは三年になつてクラスが一緒になつてからだ。それに比べ裕也は去年も同じクラスだつた。

神崎愛香の父親は、彼が言つとおり都内の大学病院で外科部長をしている。

「でも、関係者だからつてクスリ持ち出せるのか?」

「知らないよ。俺に聞くな」

省吾と裕也の話し声を聞いた愛香は一人に近づいて来ると

「あんた達にもクスリ分けてあげようか?」

そう言ってから、クスッと笑つて「ああ、脳に効く薬はまだないんだった」

「つるせえな」

省吾はそう言つて、窓の外に視線を向ける。

「裕也はエロいのが治るクスリ?」

「そんなのねえだろ」

「あ、でも欲情を抑えるのはあるらしいよ。アメリカで性犯罪者に使うんだって」

「誰が性犯罪者なんだよ。俺のは抑えなくていいんだよ」

裕也はポンツと省吾の机の上に飛び乗るように腰掛けた。

「でも、頭痛とかあつたら言つてね。保健室のよりは効くからさ」

「そんなクスリ持ち出していいのか?」

省吾は自分の席から愛香を見上げた。

彼女は整つた眉をピクリと動かして

「だつて、ただの鎮痛剤よ。それにちゃんと処方せんとして手続きしてから平氣よ」

省吾と裕也は思わず顔を見合せた。

その処方せん自体が違法なのでは? 何気にそう思った二人だが、

口には出さなかつた。

## 【2】人助け

放課後、省吾は裕也に付き合つて池袋まで足を伸ばさなければならぬ。何となく気乗りしない彼の足取りは重かつた。

「なんだよショウ。二人共まあまあ可愛かっただろ」

「そうだけど……」

別に女の子と遊びたくないわけじゃない。

ただ何となく、電車に乗つて自分の家を通り越してまで、そう親しくも無い娘に会いに行くのが面倒なのだ。

ホームに入つて来た電車に乗り込む省吾の足が、途中で止まつた。車内に彼女がいる。毎朝会うお下げのあの娘だ。

彼女の視線が一瞬省吾を捉えた。

そのコンマ何秒かの中で、彼は彼女に笑いかけるか迷い、彼女の視線の意味を探つた。

しかし、再び彼女の視線は窓の外に向けられて、省吾と裕也は反対側のドアの前に立つ。

帰りはほとんど彼女を見かける事は無く、久しぶりに一緒の電車に乗り合わせた。

「なんだよ、どうした？ ショウ？」

落ち着かない省吾を裕也が察した。

「あ？ ああ、なんでもない」

省吾はそう言って、彼女を視界に捕らえておく為に立ち位置をさり気なく変えた。

……ちゅうどいい、これで彼女の降りる駅が判るつてもんだ。

「でもつて、この前一樹がよ……」

省吾は止め処ない裕也の話に、適度に笑つて適当に相づちを打つ。視界の隅で捕られた彼女が気になつた。

降りる駅を見逃してなるものかと、半ば必死だった。

左側に立つてゐるといふ事は、おそらく上り電車で左に降りる駅

なのだらうと察しあつた。

午後の上り電車というのもたいして混んではないが、各駅で降りる学生と同じ分量の学生が再び乗り込んで来るので、車内の人的密度は何時まで立つても変わらない。

やたら大声で喋る女子高生が乗り込んで来たかと思うと、次の駅で降りていった。

練馬を過ぎた所で、省吾は多少の不安を感じた。

……彼女はこのまま池袋まで行くのでは……同じ沿線に住んでいないかも知れないと思うと、彼女の姿がやけに遠くに感じる。

江古田の駅に電車が着いた時、彼女の体が動いた。

停車の振動に身体が振られたわけではない。足を半歩踏み出したのを省吾は確かに捕らえていた。

しかしその瞬間、ふつと彼女の身体は不安定に揺らいで、そのまま崩れ落ちた。

「あつ」

何も気付いていない裕也を横目に省吾は思わず彼女に駆け寄った。

「おい、ショウ。なんだ？」

裕也は突然慌てて動き出した省吾の姿を目で追う。

周囲にも人はいたが、一瞬何が起こったのか判らずただ呆然と見ている人がほとんどで、振り返ってその状況を見た裕也もまた、その中の一人だったのだ。

「お、おい。大丈夫か？」

抱き起こす省吾の腕をたどたどしく、何かにすがりつくように彼女は力なく掴んだ。抱えた肩が思いの外細くて、力を入れたら壊れてしまいそうに思えた。

彼女は目を強く閉じて何かを堪えている感じだ。  
貧血だらうか……こんな感じで倒れた女子の姿を、以前学校で見た事がある。

「とにかく一端降りよう」

発車合図のメロディーを聞いた省吾は、足腰に力を入れると思い

切つて彼女を両手で抱き上げて江古田のホームへ降りた。

「すみません、女の子が倒れたんですけど」

一緒に降りた裕也が、近くにいた駅員に駆け寄り声をかける。

足取りに揺れる彼女の顔を省吾がチラリと見た時、微かに開いた睫毛の奥で潤んだ瞳が一瞬見えたが、それは何かを捉える間も無く再び閉じる睫毛の中に消えた。

苦しそうな吐息が、僅かに聞こえる。

とりあえず駅員室へ運んで、長椅子に彼女を横たわらせた。

「救急車呼んだ方がいいのかな？」

「意識はあるみたいだよな」

若い駅員が不安げに小声でそんな話をしている。

「おい、お前知ってる娘なのか？」

裕也は省吾の行動を不審に思つて彼の身体をつついた。真っ先に彼女に駆け寄つて、躊躇することなく抱き上げたからだ。

「いや、ああ……見た事はある。朝の電車でよく会つんだ」

「何処に住んでるんだ？」

「そこまでは知らない」

「なんだよ。役にたたないなあ」

「だから、朝に電車で会うだけで、話した事は無いんだよ」

省吾と裕也は、どうしたものかと息をついて、長椅子に横たわる彼女を見下ろした。

とりあえず濡れタオルを額に乗せたのは、最初に声をかけた若い駅員だ。

「あれ、彼女。また倒れちゃったの？」

後から年配の駅員が現れた。真っ黒な太い眉毛とぎょろりとした大きな目が印象的で、太っているほどではないが、何故か制服の腹の部分が異常に張り出てボタンがキツそうだ。

「加治木さん、この娘知ってるんですか？」

若い駅員が訊く。

「ああ。彼女、南澤病院の娘だよ。前にも何度か倒れた事があるん

だ

「そんなにショッちゅう倒れるんですか？」

省吾は思わず口を挟んだ。

「いや、 そんなに頻繁ではないが……ん？ キミらは？」

省吾と裕也の二人を見た加治木が、 怪訝な笑みを浮かべて太い眉を動かした。

「あつ、 彼らがこの娘を運ぶのを手伝ってくれたんですね」  
若い駅員が言った。

本当は運んだのは省吾で、 それを手伝ったのが、 若い駅員なのが……

「病院は、 近いんですか？」 省吾が続けて訊く。

「ああ、 住宅街を抜けた大通り沿いだし、 自宅はこの先の住宅街にある。 とにかく連絡しよう」

加治木は電話を手に取ると、 とりあえず南澤病院へ電話をした。省吾と裕也はその様子を見ながら、 初めて入った駅員室を見回す。事務机が並び、 壁際の戸棚にはビックシリとファイルが入っている。時間に厳格な職場のせいか、 あちこちに時計が置いてあった。

「彼女は知り合いかい？」

電話を切った加治木が省吾に訊いた。

「あ、 いえ。 電車でたまに見かける程度でよくは」

省吾は曖昧にぼかして答えた。 何時も見ている娘だとは言えない。彼女の事は何も知らないのだ。

「じゃあ、 後は我々が責任をもってご両親に引き渡すから、 キミらは帰つていよいよ。 ご苦労さんだったね。 協力を感謝しますよ」

加治木は目じりにシワをよせると大きな目を細めて笑顔を振り撒いた。

「彼女、 何か病気なんですか？」

省吾は駅員室を出る間際に振り返つて、 加治木に訊いた。

「私もよくは判らないんだ。 とりあえず今の状態は命に別状はないらしい。 直ぐにお兄さんが迎えに来るそうだ」

省吾はなんだか後ろ髪を引かれる思いで駅員室を出ると、名残惜しそうにドアの窓から奥で横たわる少女を見たが、裕也に促されてゆっくりとホームへ戻った。

「ヤバイ、約束の時間過ぎてるぞ！」

裕也がホームの時計に目をやって呟いた。

二人はさつきバイブレーションしていた携帯を取り出して、ほぼ同時に開く。

『他に遊ぶ奴見つけたから。Bye』

素つ気無いメールが二人の携帯に入っていた。

### 【3】思案

「ちきしょ、昨日は惜しい事したよ」  
翌朝一番で顔を合わせた裕也が未練がましく呟いた。  
「仕方ないだろ。人命救助だ」  
「そんな事言って、お前彼女の事ずっと見てたり」  
「そんな事ねえよ」  
「彼女狙ってるのか？あれって確か南高の制服だよな」  
「いや、狙うとか、そんなんじゃねえけど」  
「ウソつけ。お前、ああいう清楚な娘タイプだわ」  
國星だつた。高校に入つて直ぐから付き合いのある裕也には、省吾の好みは判るのだ。  
「でもよ、確かに可愛かったな。何だか夏も全然遊んでないつぐらい白かつたよ。彼女」  
裕也はそう言って教室の窓に寄りかかつた。  
「誰が全然遊んでないの？」  
ほんのり小麦色の肌をした愛香が声をかけて來た。  
「いや、愛香には関係ないよ。男同士の話さ」  
裕也はわざと彼女を突き放すような言い方をして、意地悪そつこ笑つた。  
「そう言えば、彼女の家開業医だつて言つてたな」  
「だれだれ、開業医つて。お金持ちじゃん」  
裕也がポツリと言つた言葉に、愛香は益々食いついてきた。  
「お前ん所だつて医者だろ」  
省吾が言つた。  
「ダメよ。うちのお父さんは所詮月給取りだもん。開業医には及ばないわ」  
「へえ、そうなの？」  
裕也が逆に興味を示す。

「だつて開業医つて言えば自営業よ。保険適用分が国からガツポリ入るじゃない」

愛香は裕也の隣の窓に寄りかかると

「まあ、何かあつたら潰れるのもあつという間だけど  
そう言つて悪戯っぽく笑う。

裕也は省吾を見て逆玉狙いか？ と言わんばかりの意味深な笑みを見せた。省吾はそれを受けて、無言で否定の視線を返す。

愛香はそんな二人を交互に見ると  
「で、誰の家が開業医なの？」

省吾はあの娘の事が気になつていたが、あえて江古田へ出向くような事はしなかつた。

きっと大きな家だろうから見つける事は可能かもしけないが、いざとなると何だかストーカーまがいで気が引ける。

あれから一日が過ぎたが、あの娘はまだ朝の電車で見かけない。  
そう言えば、以前にも何度か彼女を見かけなかつた事があるが、  
その時が倒れた時なのだろうか……

省吾は電車を待つ駅のホームでそんな事をばんやりと考えていた。  
裕也はリーダーの補習を夏休みにサボつたので、今日から一週間居残りらしい。

愛香はあれでも吹奏楽部でフルートなどを吹いている。三年生は夏で終わる部活もあるが、吹奏楽部は秋のコンクールまで二年生も参加するのだ。

ホームに入つて来た電車を呆然と見ていた省吾は、窓から覗く車内の情景に鼓動が高鳴る。

……彼女だ。朝はいなかつたのに。

彼女も省吾を見てハツと顔を強張らせた。

彼女は自分を知つているのだろうか……思わず抱き上げてしまつた自分を……

グンシと音を立てて車両のドアが一斉に開いた。

省吾はゆっくりと車内に足を踏み入れる。

心臓の鼓動が早鐘のように打つていた。気を失いかけていた彼女を抱き上げたのだ。

考えればそれはあまりにも大胆な行為。今思えば彼女の顔が至近距離にあつた。

彼女の身体の重さを思い出した。初めて抱き上げた女性の身体は骨格が細く予想以上に軽くて、全身に力を込めた自分は拍子抜けした。

「あ、あの……」

気がつくと彼女は省吾のすぐ傍まで来て、上目使いに彼を見上げている。

「えつ、はい？」

省吾は慌てて言葉を返す。

「あの……この前、江古田の駅で……」

その先の言葉は消えていたが、それだけで彼女が自分を認識していたのだと充分に判つた。

「あつ、うん。俺だつて、判つてた？」

「ええ、薄つすらと顔と制服が……」

彼女は少々俯いた顔を上げると

「それに、何時も朝会いますよね」

そう言って小さく微笑んだ。

どうやらほんと毎朝会う省吾を彼女も認識していたようだが、それを意識していたかどうかは解らない。

逆玉……開業医イコール金持ちの娘……何故だかそんな余計な事ばかりが頭を過つて、省吾は思わず頭を振つた。

「あ、あたし、みなみさわみお南澤澪」

「あ、俺……北原省吾」

自分で自分のフルネームを言つるのは妙にくすぐったい気がした。おそらく彼女もそうだったのだろうか。お互いにちょっぴり頬を

紅潮をせて、笑顔を交わした。

「この間はありがと。ちゃんとお礼言わなくちゃいけって思つて……」

「いや、いいよ。お礼だなんて」

何となくギクシャクした会話が飛び交う。

その後、簡単な雑談だけで、すぐに省吾が降りる駅に着いてしまつた。

「俺、厚揚げが好きなんだよね」……どうしてそんなくだらない事を言つたのか、省吾は電車を降りてから、車内から小さく手を振る澪の白い笑顔を見ながら酷く後悔した。

もつと氣のきいたカツコイイセリフがどうして出でこないのか……

そんな省吾のくだらない話題にも彼女は、「なんか渋すぎ」と笑つた。

「あ、でもあたし、どら焼き好き。コンビニとかでもよく買っちゃうから、友達に『澪は未来の国から来たんだろ』って笑われるの」

彼女は省吾につられる様にそんな事を話した。

会話自体は楽しかった。しかし……他に訊く事があるだろう。話すことがあるだろう……省吾は自分の口下手加減に呆れた。

彼女は何処か身体が悪いのだろうか。

時々倒れるなんて、何だか心の中に灰色の不安が過る。

しかし省吾はこうも考えた。

下手に身体の具合の事を訊いたりして、滅茶苦茶ヘビーな病気だったらシャレにならない。そう言つ事は訊かなくて良かつたのかもしない。

そうだ、今度会つた時も、体調の話はしない方がいいだろう。

もつと親しくなれたとしたら、それは自然に判る事かもしれない。

省吾は自分なりの答を胸の中で呴くと、駐輪場から取り出したATBに乗つて軽やかにペダルを踏んだ。

僅かな不安とは裏腹に、何だか妙にペダルが軽くてギヤを2段あげた。



## 【4】寄せる想い・1

鉢植えのポトスに霧吹きで水を吹き付けると、窓から差し込む陽差に散乱した水の粒子がきらきらと反射して光の輪を描く。

晴れ渡る碧空そらに白色にかすれた雲が薄つすらと浮かんでいる朝、省吾は少しそわそわした落ち着かない気持ちでトーストを頬張る。何だか判らないモノが喉に痞つかえている様な感じがして、上手く飲み込めない。

気を紛らわしたくて、普段は滅多にやらない窓際の観葉植物に水を与えてみたりする。

昨夜は学校帰りの興奮が続いて、ぜんぜん寝付けなかつた。まさか彼女と話が出来るとは思いもしなかつた。

助けた時はその後の見返りなんてもちろん考えていなかつたし、意識の薄れた彼女が自分を認識しているとも思わなかつた。

省吾は昨日の帰りの電車の中、十二分ほど之間諷と話しただけなのに、興奮が何時までも冷めなかつた。そして、今朝は新たな緊張が全身を取り巻いて筋肉や関節をギクシャクさせる。

これから再び彼女に会うのだ。いや、絶対ではないが、確信はある。

彼は玄関の鍵を締めると、ATBに跨つて駅へ急いだ。

照り付ける陽差は暑いが、少し乾いた風が頬を撫で上げて心地いい。

駅のホームへ降りると、電車の影が遠くに見えた。既に心臓の鼓動がうねる様に高鳴つて、膝に力が入らない。

……裕也と一緒に、誰に声をかけてもこんな事はない。もちろん、ヘラヘラと喋りの技を披露するのはもっぱら裕也の役目だが、クラスの娘と話しても全然何も感じないのに……

自分が思いを寄せていた娘だからこんなに緊張するのだろうか。

省吾はそう思いながら駅のアナウンスを聞いて、ゴクリと唾を飲む

とその場で一度だけ屈伸をする。

聞き慣れた騒音を風に響かせながら、ホームへ滑り込んできた車両の動きがピタリと止まる。

……いた。省吾は窓の外から素早く彼女の姿を見つけたが、見えていない振りをする。

彼が車内に入ると、澪が遠慮気味に胸の前で手を振って笑った。彼女は何時もの立ち位置ではなく、省吾が乗り込むドアの横にいた。省吾はさり気なく……自分ではそうしたつもりでいる。とにかく彼女の隣に立つて吊革に手を伸ばした。

「おはよ」  
「おはよ」  
澪が彼を見上げて笑った。昨日の帰りに初めて話をしたとは思えないよくな、自然な笑みだ。

省吾はそれとは対照的な少しきこちない笑顔で、直ぐに返す。

「今朝ドライヤーから煙が出てね、マジやばかった」

澪は直ぐに喋りだした。何かを話さなくては、といつ気持ちはあるのかもしれない。

「もう、微妙に半乾きでさ」

そう言って、自分のお下げの先を指で掴んで揺らすと、蒼リンクゴのよくな穂のかな甘い香りが省吾に届いた。

約十二分間……それは、他愛もない話をするにはあまりも短い。話したい事があまりにもありすぎて、しかも頭の中で準備していた話題も切り出せず、結局彼女の話を聞くだけで終わってしまう。

「じゃあね」

駅へ降りた省吾に、澪は明るく手を振る。

周囲の視線に少し照れながら省吾も軽く手を上げて返すと、彼女の乗った車両が完全にホームを出たのを見てから、階段に向った。

……何でもっと話せないんだろう。一駅なんてあつといふ間で短すぎる。

彼女が帰りに何時の電車に乗るのかも訊けなかつた。

部活はやつてこるのか？いや、身体が少々悪いならば運動部ではないだろ。

それにしても、帰りの待ち合わせくらい出来ない自分が情けない。こんな事を何度も繰り返しても、彼女との関係に進展があるとは思えない。

そして省吾はふと気付いた。

携帯番号とメールアド……それさえ聞き出せば何時でも会話できるではないか。電車の中以外で会える約束も出来る。

しかし彼女に携帯番号なんて訊けるのか？

省吾は学校に着くまでの間にひたすら思考を巡らせて、途中コンビニに寄つて飲み物を買おうと思つたのにすっかり通り過ぎてしまつた。

昇降口で靴を履き替えてこると後ろから声が聞こえた。

「見いちゃたあ」

省吾が振り返ると愛香が立つていて。整つた眉と長い睫毛が笑つていた。

「な、なんでお前、今登校なんだよ」

同じ路線を使う彼女が今ここにいると言つた事は、同じ電車に乗つていたのは明らかだ。

愛香はたいがい吹奏楽部の朝練があるので、普段は省吾よりもずっと早い時間に学校へ来ている。

「うん。今日は朝練休みでさ。もうすぐ秋のコンクールだから」

愛香はそう言つと再び悪戯っぽい笑みを浮かべて

「ねえねえ、あの娘誰？」

「あの娘つて？」

省吾はしらばっくれたように視線を他に向けて上履きを履くと、自分の靴箱に履いてきたナイキを押し込んだ。

「じゃあねえ」

愛香は澪の清楚な笑顔と手を振る小さな動作を真似て見せた。

しかし、この学校の校則が全く厳しくないせいで、茶色い髪とこ

つそり着けているマスカラが全く清楚なイメージには映らない。

「なんだよそれ」

省吾がぶつきら棒に言つて歩き出すと、愛香は慌てて自分の脱いだローファーを靴箱に放り込んで、彼を追つた。

「ちょっとお

愛香は小走りに省吾に並んで

「あの娘、南高でしょ。ちょっときびしくない?」

「なんだよ、きびしこって」

「だって、あそこの偏差値、うちのちうの倍だよ」

省吾は思わず立ち止まつた。優秀な女子高とは聞いていたが、そこまでとは思わなかつた。

いや、実際倍というのは、あくまで平均値を比べた場合であつてもちひんこの学校で成績優秀な愛香よりも低い偏差値の生徒が、南高にもいるだろつ。

「そんなの関係ないだろ」

省吾が再び廊下を歩き出すと愛香も歩き出す。

「最初はみんなそう思うのよねえ。愛さえあればあ、とか」

彼女は顎を突き出して天井を見上げると「ねえ、何処までいったの?」

「なんだよ、何処までって?」

「もう付き合つちゃつてるの? それか、もつと進んだ関係なわけ?

?」

愛香は興味深々で省吾の顔を覗きこむ。

「いいだろ。どうだつて」

「あつ、こりやあ知り合つたばかり。つて感じ?」

「つるせいな

「ま、せいぜい撃沈されないようにね」

教室の前まで来た時、彼女は省吾の肩をポンッと叩いて開いたままのドアを先に入つて行つた。



## 【5】寄せる想い・2

下り電車が入ってくる音と共に、プラットホームの屋根からバサバサと複数の鳥の羽ばたく音が聞こえた。

……どうして鳩は駅の上に集まるのだろう。

省吾はホームの屋根越しに空を見上げながら電車を待っている。

『学園』と付く駅名通り、この駅を使う学生は多彩だ。

彼の学校の女子は全体にプリーツの入ったグレーに紺色のチェックのスカートを履く。男子は無地のグレーのスラックスだ。

それとは違うベージュのバーバリー・チェックのスカートを履く制服や、紺色の裾口に赤線の帯が入ったスカート。白いワイシャツに紺色のスラックス。

駅の反対側にも二つ高校が在るのだ。

ごく僅かに見るセーラー服は、おそらく私立中学のものだろう。あとは、何か理由があつてこの駅で乗降する見知らぬ制服をポツリポツリと見かける。隣駅との微妙な距離にも、たしか学校は在るはずだ。

登校時間はサラリーマンやOLの数と半々くらいだが、下校時間は圧倒的に学生の姿がホームを埋め尽くす。

彼は到着した電車には乗らなかつた。

澪の姿が無いから。

そう、省吾は澪が乗つて来る電車を駅のホームでひたすら待つているのだ。

学校が終わつて即行で駅へ來たが、もう五本も到着した電車をスルーしている。

澪が乗つていたらさり気なく偶然を裝つて乗り込むつもりでいたが、彼女の姿はいつこうに見えない。

到着した電車をスルーしている間に、同じ学校の友人や顔見知りに「どうしたんだ?」と何度も声を掛けられて、その度に省吾は

「ちょっとな」と答えて彼らを見送った。

……さり気なく何時ごろに何時も帰るのか訊いて置くべきだった。しかし、そんな言葉が彼女の前では出でこない。

つい全く関係ない話題に走ってしまった。十一分といつ短い時間を有効に使つことなんて、今の省吾には出来なかつた。

陽差は大きく西へ傾いて、線路脇の立て看板の影が長く伸びていた。

とにかく次の電車には乗つてしまおう。待つても無駄だ。そう思つた時、後から声がした。

「よう、ショウ。まだこんな所にいたのか？」

裕也が階段を下りて来た。今週いっぱい居残りしている、今日の分の補習が終わつたのだ。

「補習終わつたのか？」

「なんか、疲れたよ」

裕也はそう言つて鉄柱にもたれ掛かると、途中のコンビニで買つたコーラのキャップを開けた。

「何だよ。どうか寄つてたのか？」

彼は、この時間にまだホームにいる省吾を不思議に思つた。

「ああ、ちょっとな」

その時ちょうど電車がホームに入つて来たのを見て、裕也は飲みかけのコーラのキャップを閉める。

無駄だと思いながらも、省吾の視線は条件反射のように車両の中にあつた。

しかし、停車寸前の車両の中に待ちわびた姿を見る。澪だ。

「あつ」

声を出したのは隣にいた裕也だつた。この前電車で倒れた娘……

そんな思いから声が出たのだろう。

澪も少し驚いた顔をしている。省吾に会うはずのない時間だと判

つていたのだろうか。

とりあえず電車に乗り込んだ省吾が軽く手をあげると澪も笑顔で応えた。

「あっ、何だ。俺の知らない間に前ら……」

一人が交わす、少しきこちない馴れ合いを見た裕也は、そう言って省吾と澪の両方に視線を動かした。

「こいつ、友達の裕也。この前江古田では一緒にいたんだけど」

省吾は澪に裕也を紹介した。

「ここにちは。もう一人誰かの影は見たんだけど……」

彼女は笑って裕也を見上げた。視線を合わせた裕也は肩をすくめて

「なんだよ、俺は影だけか」

そんな裕也を横目に省吾は

「ずいぶん遅い帰りなんだね」と、さり気なく切り出す。

「うん。運動会の実行委員になっちゃって。もう、最悪」

澪の視線は直ぐに省吾へ戻ってくる。

「じゃあ、しばらく遅いんだ」

「そんな事無いよ。毎日あるわけでもないから」

省吾は「じゃあ、明日は?」と訊こうと思った。どうせ、明日の朝会つても訊けるタイミングは無いかもしない。

しかし、ちょうど裕也が

「いいねえ。女子高の運動会があ

会話に割り込んできた。

「でも、一般観覧は無しよ」

「なんだ、残念。なあ、ショウ」

「えつ、あ、ああ」

省吾は思わず苦笑して裕也を見た。

一つ目の駅で省吾、その次の駅で裕也は降りる。しかし、省吾は自分が降りる駅に着いてもその素振りを見せなかつた。

自分が降りた後、ほんの一駅でも澪と裕也が一人きりになる事が不安だったのだ。別に裕也が澪にちょっとかいを出すとも思えないが、

彼の事だ。あつという間に自分より和氣藹々《わきあいあい》の雰囲気を作ってしまうような気がして、それが我慢できなかつた。

「なんだよショウ。降りないのか？」

省吾の素振りを見て裕也が言つた。

「あ、ああ」

省吾は曖昧に返事をする。

「あつ、何だよ。お前らこれから出かけるのか？」

「ち、違うよ。そんなんじゃないけど」

省吾は慌てて否定しながら、澪を見る。

彼女は目をパチパチと瞬きさせながら、二人の会話する姿を見ていた。

「でもさあ、ショウがまさか南高の娘をねえ」

裕也がそう言つて、片手を網棚にかけた。彼は身長が179センチと以外に長身だ。170センチと言つている省吾は本当は168センチしかないので、網棚に手を掛けるのは少々辛い。

少して再び電車が減速すると、裕也が降りる駅に着いた。

「じゃあな」

裕也は拳を省吾に突き出して、「上手くやれよ」と言わんばかりに後ろ向きでドアから降りて行つた。

ガクンッと揺れて、再び電車が走り出す。

駅のホームが遠のいて、電柱が窓の外をピュンピュンと通過していく。空は緋色に変わり、遠くの景色はほの暗く霞んでいた。コンビニの看板は既に淡い電光を燈している。

省吾は窓に映つた澪の横顔をマジマジと見つめた。

長い前髪は七・三に分けてヘアピンで留めている。必要以上にピンを使つてているのは流行なのか、彼女たちなりのセセやかなファッショングなのだろうか。

二人きりになつた途端、少々気まずい空気が漂つたが、澪は何時もの、と言つてもまだ一日目なのだが……笑顔で話し始めた。

「面白い友達ね」

「あ、ああ」

澪は窓の外をチラリと見て

「これから何処か行くの？」

ちょっとぴり意味深な問いかけだつた。

「えつ？　いや……澪は？　直ぐに帰るの？」

思わず訊き返してしまつた。

澪はほんの少し、僅かに表情を変えて省吾に視線を向けた。

「うん……その予定だけど……」

「じゃあさ、せつかくだから、どうか行こうか？　なあんて……ハ

ハハ

省吾はあくまでも冗談交じりでおどけた風に言つと、空笑いした。

「本氣で言つてるなら嬉しいけど……」「冗談ならうつとショック」

澪は困惑した笑みを浮かべて応えた。

「えつ……いや、マジ、本氣。滅茶苦茶本氣」

彼女の思わぬ応えに、省吾は慌てて真面目な表情を作つて寄りかかっていた手すりから身体を離し直立した。

## 【6】寄せる想い・3

澪と省吾の一人は、なんとなく練馬駅で降りると街道沿いのアイスクリーム屋に入った。

空が暮色に染まる時間に、何処へ行くとも言えず、結局一人の乗降する駅の中間で下りた感じだった。

「友達はショウって呼ぶの？」

澪は小さなスプーンでコーンに乗ったチョコミントを口へ運ぶ。

「ああ、そうだな。そう言えば仲のいい連中は、みんな『』を付けてない」

省吾はそう言って、自分はスプーンを使わずにキャラメルプリンのアイスに齧りつく。

「じゃあ、あたしはショウちゃんって呼ぼう」

彼女は、既にそう決めた口ぶりで田を細めると、スプーンを咥えたまま省吾を見つめる。

「いや、別にいいけど……」

なんと返していいか判らない。

この日はアイスクリーム屋に入つて、少し余裕のある雑談を交わしただけで省吾は充分満足だった。

店を出てから、少し通りを散歩して一人は駅で別れた。

心残りは、次の約束をしそびれた事だ。

まあいい。明日も会えるから、どうにでもなるだろう。

しかし省吾は、その後澪を土日も誘えないまま週明けまで、十二分間だけの短いデートから抜け出す事は出来なかつた。

週明け月曜日。

朝、澪と電車で会い十一分間のデートを楽しむ。そして帰りも。彼女は見かけの清楚な雰囲気とは裏腹によく喋る。

ただ、ふと何処かを見つめる視線が物悲しいのは何故なのか……  
笑顔の似合う彼女の澄ました横顔は何処か果敢なげで、小さく瞬く  
睫毛すら哀愁が漂う。

そんな横顔を見ていると、手を握りしめてあげたくなるのだ。  
揺れ動く車内で微かに触れる手がもどかしくて、思い切って彼女の手を掴んだ。

それは、先週から何度も試みて出来なかつた行為で、勇気を出したと言うより、もはや我慢の限界がきたと言つべきかもしれない。  
澪は何も言わずに小さな手を握り返して、子供のように微笑んだ。

火曜日。

朝、何時もの電車で会つ。放課後、学校帰りに駅へ着いた省吾を澪が待つていた。

乾いた喧騒ばかりの殺風景なホームが、水色に輝いて見えた。

彼女は自販機で買って飲んでいた缶入りの紅茶を省吾に差し出して

「飲みきれないから、後はまかせた」

彼は一瞬戸惑いの後それを受け取り、さり気ない素振りで缶に口を着けて飲み干した。

水曜日。

学校帰り、省吾の降りる駅で澪は一緒に電車を降りる。

近くの公園のベンチでしばらく話をして、駅で彼女を見送った。  
ようやく携帯番号を交換したが、何だかあまりに清い関係がもどかしく感じた。

……やっぱこの先に進む為には、ちゃんとした告白が必要なの  
だろうか。

木曜日。

省吾の家に澪が来た。

母親が仕事から帰るのは夜の八時過ぎ。

澪は男の部屋に入るのが初めてらしい、あらゆるものに興味を示す。  
水色のチェックのベッドカバーを見て「かわいい」と、やたら笑う。

黄昏に染まる部屋の片隅で、初めて澪とキスをした。

交わされる熱い唾液は、官能の小波さざなみとなつて、省吾は彼女の細い肩を力強く抱きしめた。

ふと瞳を交し合つた時、彼女の着けていた色つきリップが省吾の口の周りに付着していく、思わず澪は吹き出してしまつた。

金曜日。

学校帰り、澪は友人と一緒だつた。

前に何度か電車で見たことのある娘だ。以前見た時は肩に着かないくらいのミドルの髪型だつたが、耳がやつと隠れるくらいのショートカットに変わつっていた。

「渚 英美ですか？」

人懐っこい笑顔で彼女は笑うと

「澪は虚弱だから、よろしくお願ひしますね」

「虚弱じゃないよ」

澪はそう言って英美の身体に自分の身を当てる。

見かけは清楚な一人も、じゅれ合つ姿はクラスの女の子たちと変わらない。

真面目ぶる様子も無ければ、成績優秀な学校を鼻にかける雰囲気もない。ただ、言葉使いは、省吾の学校ほど荒れていないかもしない。

三人で一駅分一緒に過ごした。この前の裕也がいた時とは逆のパターンだ。

キスの先に早く進みたいといつ逸る気持ちを抑えて、彼は駅で澪と別れる。

土曜日。

澪の携帯に連絡を入れたが出る様子がない。英美とかと出かけているのだろうか。とりあえずメールを入れたが夜になつてようやく返事が届いた。

何か用事があつたと言つていた彼女に、省吾はそれ以上訊く事はない。

束縛するよりで、追及するのは気が引けた。

日曜日。

澪と渋谷へ買い物に行き、池袋のパルコの屋上で夕方まで話をして過ごした。

周囲を取り囲むフレンスと風除けの板で高台からの景色は見えないが、蒼い空が少しだけ近くに感じた。

人目を忍ぶように、証明写真を撮るボックスの陰で甘酸っぱい初秋の風に吹かれながらキスをした。

こうして省吾の一週間は過ぎてゆく。

しかし次の週も、土曜日は澪と連絡が取れない。

考えた挙句に彼女に訊いてみると、毎週土曜日は病氣の治療をしているそうだ。それを聞いた省吾は、結局それ以上追求できなかつた。

「病氣、大変なの？」

「ううん。前は酷かつたけど、今は平氣。治療さえしていれば問題ないの」

省吾の問いかけに、澪は涼しげに笑つた。

## 【二】寄せる想い・4（前書き）

読みにくい方もいるかと思い、少し改行を多くしました。

## 【7】寄せる想い・4

「週に一回治療の必要な病気って、何だと思う?」

日本史の授業中、不意に省吾は前に座っている愛香に声を掛けた。背中の肩甲骨をシャーペンの後で突くと、ビクリと背を仰け反らせてから彼女は小さく振り向いた。

「ちょっと、ぴっくりするでしょ」

「なあ、何だと思う?」

愛香は少々眉を寄せ、「何が?」

「だから、週に一度は集中的に治療の必要な病気さ」

「知らないよそんな事」

彼女は思い直したように、少しだけ身体を後にそらして

「誰か病気なの?」

「ああ。まあな」

「もしかして、あの娘?」

省吾はそれには応えなかつた。しかし、それが答だ。

「症状とかは見えるの?」

「症状?」

「顔色が何時も悪いとか、咳き込んだり時々血を吐くとか、身体に癌があるとか

「か、身体なんてまだ判らないよ」

省吾は慌てて返す。

「バカね。変な意味じゃなくて、手足とかは?」

「別に、何にも異常はないな。血を吐いたら判るだろ?」

省吾も机に前のめりになつて、出来る限り小声で言つた。教師はひたすら黒板に向つてカツカツとチョークを打ち付けて文字を書きながら、何かを喋つている。

とりあえず真面目にノートを取る連中も多いが、こじりこじで時折

小声が舞つている。

「どうして週に一度治療してるのである？」

「彼女がそう言つてたんだ」

「ふんん。彼女と上手くこいつてるんだ」

愛香は小さく頷くと

「お父さんに思ひ当たる事訊いてみるけど、あんまり期待しないでね」

愛香はふわりと髪の毛を振つて、前に向き直る。

「ああ、サンキュー」

省吾は愛香の肩をシャーペンでポンッと叩いた。

それほど強い風は感じないが、上空の雲はやけに速いスピードで流れていた。

この日省吾は、学校帰りに乗り込んだ電車で英美に会つ。

彼女は桜台に住んでいて、澪とは中学から一緒にいたそうだ。

「今日は？ 澪と一緒にじゃないの？」

「えっ、うん」

英美は少し俯いて応えた。

この前の陽気な彼女とは少し違つているのは、相棒がないせい

か。

「あ、運動会のなんとか？」

澪はいちいち全ての予定を省吾に伝えるわけではないし、彼も細かく訊いたりしない。

本当は帰る時間くらい訊いて当たり前なのだろうが、毎回訊くのもどうかと思つてしまつ。

英美は小さく小首を横に振ると

「今日は検査があるからつて、5時間目が終わると帰つたの」

澪の行動は、未だに把握できない事が多い。

しかし、他人の自分に通院の予定まで全て話せとも、もうひりん言えるわけが無かつた。

「そ、そりが……よく早退するの？」

「たまによ。でも週に一度はするかも……」

そう言えば、先週も一緒に帰らない日があった。その前の週は無かった。

彼は、澪に会えない日があつても、いちいちその理由を訊いたりしない。もちろん、土曜日の件のように、時々は訊くが。

それは付き合っている確信が持てないからであつて、決して省吾自信気にならないわけではない。むしろ気になつて仕方がないけど訊けない。そんなところだ。

省吾は少し考えてから、英美の顔色を伺ひながら

「澪の病気って、何か知ってる？」

英美はスッと眉を潜めて、瞳を曇らせた。

「なんか、血液の病気だつて……」

「血液？ まさか、白血病……とか？」

省吾は平静を装つたが、内心は血の気が引く思いだつた。白血病といえば、不治の病であまりにも有名だ。

しかし、英美は首を横に振る。

「よくは知らないけど、違うと思つ。聞いた事のない名前で言つてたから」

「澪が自分で言つたの？」

「うん。でも、ショウくんにはあまり知られたくないって。あたしにもあまり話さないし」

英美の話し難そうな態度はそう言つ事だつたのだ。

澪と付き合つていればその不可解な部分を自然と知ることになる。友達の自分に、省吾から質問が来る事を英美は予測していたのかもしない。

「ああ、大丈夫。英美から聞いた事は忘れるから」

省吾はムリに笑顔を作ると

「で？ 何で病気？」

「あたしもよく覚えてなくて。滅多に病気の話はしないから。でも、

かなり前に澪が『あたしは生きる為に、週に一度死ぬんだよ』て言つてた

「生きる為に死ぬ？ 週に一度？」

英美は省吾の問いかけにただ頷く。

省吾は益々判らなくなり困惑の笑みを深めて、英美を見つめていた。

プシュウ。とこつコンプレッサーの音と共に車両のドアが開いた。周囲の動く人波に沿つて外を見ると、彼の降りる駅だった。

とりあえず英美に手を上げて電車を降りた省吾だったが、何だか判らない靄に包まれたような思いで、走り去る電車の影を見つめていた。

週に一度死ぬとは、いったいどうこう事なのだろうか。治療をする土曜日に彼女は死ぬのか？ 毎週？ いや、実際に死ぬわけじゃないだろう。

死ぬほど辛い治療だと言う事だろうか……

省吾はその夜寝付けなかつた。思考が勝手にフル回転して、眠気を吹き飛ばしてしまつ。

あのか弱い身体で澪はどんな治療に耐えているのだろうか……  
苦しいのか、痛いのか、普段の彼女にはそんな素振りがまったく無いだけに、何も判らない省吾はそれだけでも歯がゆい。

結局澪の病名は判らない。自分が聞いた所で知らない病気なかもしれない……そんなに辛い治療を彼女は受けているのだろうか。  
毎週苦悩に浸るその日を、彼女はどんな思いで待ち受けているのだろうか……

カーテンの隙間から白み始めた外の光が薄つすりと零れ始めて、窓の外にカラスの鳴き声が聞こえていた。

翌木曜日。省吾は朝の電車で何時ものように澪に会つ。

……相変わらず白い肌。そう言えば色つきリップは何種類か持つているのだろうか。その口によつて色が微妙に違うような気がする。

「何？」

「えっ？」

「なんか、じつと見られると恥ずかしいよ

窓の外を眺めていた澪は、省吾の視線を感じて少しだけ頬を紅潮させて笑つた。

「あれ？ 僕そんなに見てた？」

「見てた見てた。ガン見してたあ」

澪は省吾の腕を叩いて笑つた。

朝は相変わらず何の意味も無い会話で時間が過ぎてしまつ。

それでも省吾は以前のように、時間を惜しんで何かを話そうとはしなくなつた。その先にいくらでも彼女との時間を感じていいからだろう。

以前と比べて、追い立てられるように喋らなくなつた澪も、省吾と一緒にいる事が自然に感じるようになったのかもかもしれない。

「帰り会える？」

「うん。大丈夫だよ」

電車の下り際に急いで訊く彼に、澪も急いで応える。

「じゃあメール入れるから」

閉まる扉に向つて省吾が言つた。

蒼い空の向こうにはほつねる様な雲が集まつて、差し込む陽光が幾つのグラデーションを作り光沢を発している。まるでアクリル水彩で描いた風景画のようだ。

校庭の木々の緑は風に溶けるように色を失い、心なしか黄緑色に変わり始めていた。

「どうしたよ、浮かない顔して」

昼休み、ベランダで頬杖をつく省吾に、裕也が声を掛けってきた。省吾は無言で振り返ると、彼の手にあつたポツキーを一つ抜き取つて自分の口へ運ぶ。

「別に」

裕也はベランダの手すりに背中を着けると空を仰ぐ。

「夏も終わつたな」

見上げる高い空には雲は無い。何処までも抜けるような蒼だけが成層圏まで続いていた。

「ねえ、ショウ」

愛香が教室の窓から身を乗り出して、細長い手のひらで省吾を手

招きした。

風に吹かれた前髪をたおやかに靡かせながら振り返った省吾は、少し前屈みで彼女に近づく。

「あれ、訊いて来たよ」

彼女ははためく自分の髪を手で押さえながら、そう言つて意味深に裕也に田を配ると「ここのじやない方がいい？」

「この学校の屋上は一部だけが開放されている。

グラウンドが狭い為、テニスコートも屋上にあるが、部活の時以外は施錠された金網の扉が閉まっている。

二つの校舎がくの字に交わったA棟とB棟を繋ぐ屋上の階段通路に、省吾と愛香は来ていた。その場所だけ階段付きの、屋根の無い台形の橋が渡されているが、もしそこから落ちてもコンクリートの床に這う太いパイプ類が受け止めてくれる。

A棟とB棟の端は給水塔やエアコンの室外機などが設置してある為、その動力パイプ等を跨ぐ為に橋状の通路が渡されているのだ。三階では穏やかに感じた風が、四階建ての屋上では少々強く感じられて、階段の途中で愛香のスカートがふわっと舞い上がった。

「きやつ」

慌ててそれを押さえる姿は、あまり教室では見せない慎まさがある。

「見えた？」

「えつ？　いや」

省吾は遠慮がちにウソを言った。愛香の後ろから階段を上がつて、いた彼には、ほんのり日焼けした太もものその上まで丸見えだった。

「けつこう風強いね」

「ああ、だから誰もいないんじやん」

風の無い日は、屋上の限られた場所のあちらこちらでお昼を食べる者や、雑談で盛り上がる連中の姿が見えるが、今日は全く人影が

無かつた。

愛香は橋の手すりの柵にスカートを押し付けるように寄りかかった。

「で、何だつて？」

省吾も彼女の隣で手すりに寄りかかる。

「それがさあ、週に一度集中的に治療するつてだけじゃあ、何とも言えないってわ」

「なんだよ」

省吾はがつくりと肩を落とすと「そんな事なら教室でいいだろ」「だつて、裕也とかいたし……」

「まあ、そうだな」

省吾は立ち位置を変えて、向かい風になるように手すりに肘をのせると、街並を眺めた。

まるでほつときで雲を集めたかのよう、遠くの空にばかり舞めき合っている。

「ねえ、白血病……とかじや……」

愛香は遠慮がちに小さな声で言った。

「いや、そうじやないらしい。たぶん」

省吾は遠くに見えるONの屋上看板を眺めて言った。

確かに事は判らない。英美に聞いただけだし、ガンの告知を澪本人が受けたとも思えない。あえて違う病名を知らせる可能性もあるだろう。

それでも「週に一度死ぬ」という言葉が頭の隅にずっと引っ掛かっている。

「なあ、死ぬほど辛い治療つて、なんだ」

省吾は再び手すりに背を向けて愛香の方に身体を向けた。

「死ぬほど？」

彼女は思わず眉間にシワを寄せた。

「そんなに辛い治療をしてるの？」

「いや、判らないんだ。彼女の友達がそんな二コアンスで言ってた

「そつ……まさか本人に面と向かつて訊けないもんね」

愛香は風に踊る茶色い髪を指でかき上げた。

省吾は再び遠くへ続く空を眺める。

「ねえ……彼女の事……好きなの？」

「はあ？」

愛香は彼の声に思わず身を引くよつて瞬きをした。

「当たり前だよね。そんなの……決まってるよね」

彼女の作り笑いの意味を、省吾は察する事が出来なかつた。  
何時もより慎ましい彼女の姿は時折見せる魅力でもあるが、それは省吾と一人きりになつた時に限る事だと彼は気付いていない。

「そろそろ戻るか」

省吾は髪をかき上げながら階段に足を踏み出した。

「うん……」

自分の前を歩く彼の姿を、愛香は何時もよつずつと澄んだ瞳で見つめた。

## 【9】暮る想い・2

省吾は帰りの駅に着くとベンチに腰掛けた。  
一緒にここまで来た裕也は到着した電車に直ぐに乗り込んだが、  
省吾は手を上げて彼を見送った。

澪が来るのを待つ。

彼女が電車に乗る前にメールを送つてくる約束だ。  
ベンチに座つた省吾は線路脇の看板を何となく眺めていた。  
少しだけ携帯にメールが入ると、その直ぐ後に到着した電車に澪は  
乗つていた。彼女をわざわざ降ろす必要は無いので、省吾はそのまま  
そのままの車両に乗り込む。

「今日体育でバスケをやつたら突き指しちゃつてさ」

澪は笑いながら、シップを貼つた左の中指を省吾に見せた。

「バカだなあ」と言いながら、

……体育も普通にやつてるのか。と思つ。

「そしたらさあ、英美がね……」

彼女は相変わらず明るい笑顔で話し続ける。

この笑顔の何処にそんな辛さが隠れているのだろうか。

いつたい、彼女は家に帰るとどんな生活をしているんだ……省吾  
は、自分の知つている澪以外の彼女にも興味を抱いていた。

「なあ、澪」

「なに?」

「澪の家は、何時も誰かいいるの?」

「えつ? うん。お母さんがいるよ。あと、ヨッシーが

「ヨッシー?」

「犬よ。ミニチュアダックスなんだ」

「そ、そつか」

「どうしたの? あたしの家に来たい?」

澪は彼の心の中を察するように笑つた。

「いや、お母さんがいるなりこじよ

「あひ」

彼女はそう言つてクリクリと田を見開いて笑つと  
「あたしの部屋でヤラシイ事しようとしてるでしょ」

そう言つて、自分の身体を省吾にぶつける。

揺らいだ体をポールにしがみ付いて凌いだ省吾は

「そ、そんなんじゃないよ」

彼は肩から落ちた鞄を再び掛けなおして

「女の部屋とか、あんまり見たことないからさ」

どちらにしてもウソだつた。澪の私生活が気になるだけだ。どんな暮らしをしているのか気になつて仕方がない。自分と会つている以外の彼女が。

「そう。別にショウちゃんの部屋と変わんないよ」

そう言いながら澪は身体を近づけて、ドアの窓から外を眺めた。

……この横顔だ。明るくおどけて喋る時とは正反対のこの何処か淋しげな眼差しが何とも謎めいているのだ。

親しくなる以前に省吾が毎朝見ていた澪の横顔は何時もいつもだつた。何処か謎めいた、果敢なげに憂いな瞳で外の景色を見つめるのだ。

「ねえ、どうしようか」

澪が窓の外を見つめたまま呟いた。

「どうするつて?」

「だって、ショウちゃんの降りる駅、過ぎちゃったよ」

澪は振り返ると笑顔でそう言った。

「あ、いけねえ」

結局省吾は澪と一緒に江古田の駅で下りた。

「」の駅で降りるのは、彼女が倒れた時以来久しぶりのことでも、もちらん改札を抜けるのは初めてだつた。

「ねえ、じゃあゲーセン行いりよ

「ゲーセン?」

プリクラかあ……そう思つて省吾は彼女に付き合つた。しかし、もちろんプリクラも撮つたが、彼女の本命はそうではないらしい。すぐさまクーリングゲームに夢中になりだしたのだ。

「ショウちゃん、これ獲つてよ

「俺、クーリングゲーム超下手だぜ」

「いいから」

仕方ないとばかりに何キャラとこつキャラのぬいぐるみを狙つがなかなか獲れない。

「この腕、本当に景品つかむ気あんのか?」

「ちよつとどいて。あたしがやる」

結局澪が再び自分で挑戦する。と、いきなり田標のぬいぐるみをがっしりとアームがつかんだ。

「やつたあ」

澪はぴょんぴょんと跳ねて喜ぶ。

「なんでいきなり掴むんだよ……」

クーリングゲーム機の難易度調整は巧みで、簡単なものはアームの力の強弱が3~4段階に変えられるだけだが、それだと弱に合わせた場合は永遠に景品を掴む事は出来ない。

しかし複雑な機械は何回に一回だけアームの力が強くなる。という確率的な調整もできる。それによってお密は金をつき込み、ある程度の満足感も得られるという仕組みなのだ。

それでも、そんな事を知らない省吾はなんだか妙に理不尽な思いに駆られながら、喜ぶ澪に釣られて笑みを浮かべた。

## 【10】逸る想い

「やつぱり、また今度にするよ」

ほの暗い通りに明かりが灯るその場所は、街路灯の明かりではない。大きな門柱とその隣に半地下の大きなガレージの扉。両隣の家がやけに小さく見える目の前の家は、いつたい何坪の敷地なのか、建物がどれだけ大きいのか、いまひとつ判らなかつた。

庭に設置された水銀灯が、黒い門柱を照らし出して、その上に設置された防犯カメラが省吾を捉えていた。

「何言つてゐるよ、ここまで来て」

澪は大きな門扉の横にある小さな扉を開けると、省吾の腕を掴んだ。

「だつてさ……お母さんいるんだな」「う

澪はハツとして彼の腕を離すと、薄暗い庭の奥を覗いた。微妙に邸内が暗いのは、部屋の明かりが一つも灯っていないからだ。

「そう言えども、リビングの電気が消えてる。お母さんいないみたいよ」

「本当?」

澪はホソとする省吾の手を掴むと、再び引っ張つた。

「本当にいらないんだろうな」

省吾は澪に手を引かれるままおずおずと石畳に足を踏み入れて、玄関までのやたら長い距離を歩いた。

なんだか、玄関の扉が普通の家よりも大きい。

澪はドアノブを一端掴んで回すと

「やつぱり誰もいないわ」

そう言つて、鞄から鍵を取り出した。

省吾は既にやましい事でもしていふように落ち着かず、まるで不

倫の密会のように辺りをキヨロキヨロと見回す。

芝の敷かれたほの暗い庭の先の暗がりは、ちょっとした林になっている。

本当は植え木の先は直ぐに通りとを仕切る塀なのだが、暗闇がそう見せているのだ。

省吾は腕を引っ張られてハツと視線を移すと、扉は開いて澪は既に玄関の中にいた。

センサー式の電燈が淡い山吹色に灯る。

……広い。天井が吹きぬけた玄関は、それだけで省吾の部屋ほどはありそうだった。

「デカイ玄関だな」

「そう？」

澪は自分のローファーを脱ぎながら、省吾を促した。

「上がって」

省吾は自分のスニーカーを脱ぎながら「犬は？」

「ああ、たぶんリビングで寝てるわ」

「飼い主が帰つても、出でこないの？」

「リビングのケージに入ってるから」

「そう」

広い玄関から廊下が続いて、ほの暗い先には幾つかのドアが並んでいる。

省吾は彼女の後を歩きながら周囲を見渡した。大きな収納扉の横に階段があるが、その階段の脇にもドアがある。それは収納と言うより部屋のドアだ。しかし、どう見てもその上を階段が通っている。

「そのドアって、何？」

「ん？　ああ、そこは地下室よ」

「地下室？」

そんなのテレビでしか見た事がなかつた。

廊下が広い……階段が広い……省吾はいちいち自分の家の寸法と比べてしまふ。それ自体が無謀なのだが。

一階に上ると、再び長い廊下にドアが並んでいる。

澪の部屋のドアにはMICOと書かれた木製のプレートが掲げられていた。

……このプレートなら100円ショッピで見た事がある。土台と文字パーソを買って自分で貼り付けるやつだ。省吾はそれを見ただけで何だか澪を感じた。

しかしドアを開けて明かりが灯ると

「広！」思わず声を上げた。

十五畳くらいはあるだろうか……艶やかなフローリングとログハウスのような全面板張りの壁は、明らかに省吾の部屋の倍以上はある広さだ。

それでもほんのりと香る蒼リンゴの匂いは、何時も澪から漂う香りで、省吾は些細な安堵に浸る。

ドアの正面には勉強机があつて、ノートパソコンが乗っている。その横には液晶テレビ。

大きな窓の前には木目調の黒いローテーブルと3人掛けの赤いソファが在り、その部分にはピンク色のラグマットが敷かれて、入り口から一番奥にベッドが在る。

オレンジ色のミッフィーのカバーが掛けられたベッドはセミダブルだった。

省吾は口を開けたまま部屋の中をぐるりと見渡す。

「ナニか飲み物持つてくるね。ミッキーにも何かあげてくる

「あ、ああ」

澪は机の椅子に鞄を掛けると、部屋を出て行った。

澪は部屋に戻つて来ると、持つて来たペットボトルからコーラをグラスに注いで、一つを省吾の前に差し出し、もう一つをその横に置いた。

ソファに座つた省吾の後ろに回つた彼女は、それを視線で追う省  
彼に

「着替えるからこっち向いちやダメだからね」

「えつ？ あ、ああ」

他の部屋で着替えりやいいのにと思いつつ視線を他所へ移した省吾は、大きな窓ガラスに澪の姿が映っている事に気付いた。しかし、彼女は何気にカーテンを閉める。別に映った姿に気付いた訳ではなく、外から見える気がして閉めたのだろう。

そして省吾の後ろでスカートとブラウスが身体に擦れる音が次々に聞こえてくる。

彼は落ち着かずに視線を上下左右に、狭い範囲で動かした。そして、急いで閉めたカーテンの隙間には僅かに下着姿の澪が映つているのを、省吾は見逃さなかつた。

彼女は胸にプリントのある紺色の小さなTシャツを着て、白いネル地のミニスカートを履いた。

細いカーテンの隙間に見入っていた省吾は、何時の間にかそれがガラスの向こうの風景のような錯覚に囚われていた。映る人影が動いても、彼は視線を変えなかつたが、ポンと肩を叩かれて我に帰る。

「どうしたの？ ボーツとしちゃって」「いや、別に……」

澪はただ笑つて、省吾の座つているソファと一緒にになつて腰を沈めると、テーブルのコーラを飲んだ。

「なあ、澪」

省吾は少しだけ真顔になると

「澪の病気つて、酷いの？」

思い出した事を直ぐに口に出した。

あれこれ考えればまた何も訊けなくなると思ったからだ。彼女との距離も大分近づいて、少しあはる権利を得られたような気がした。澪は持つていたグラスをゆっくりとテーブルに置いた。

「酷いって言えば酷いけど、生活には支障ないわ」

そう言つて左右の空いた手を組んで膝の上に置くと「エッチな事

も出来るし」

彼女の大胆な発言に、一瞬頬を紅潮させる省吾だったが  
「いや……そうじゃない。別に俺はそんな事を気にしてるんじゃないよ。今は……」

澪は再びテーブルのグラスに手を伸ばして横田で省吾をみると、目を細めて笑った。

「判ってるよ。でも、本当に普段は平気なの。学校での体育もほとんど出でるし」

「ほとんど？」

省吾は僅かに眉を潜めるが、澪は笑顔のまま氷を鳴らしてグラスに口を着け

「生理が酷いときは、そりや休むよ」

「あつ……そう言つことか」

省吾は息をつくように、ようやく自分のグラスを手にした。

彼女の病気は思つているほど酷くは無いのかもしれない。週に一度死ぬなんて言つたのは、きっと心配性の英美をからかっての事だ。それを彼女が真に受けたのだろう。

彼は、澪の口から病気の事を少し聞いただけで、肩の荷が下りたよつて妙に晴れ晴れした気分になつた。

何だか肩の荷が少し降りたよつて気がすると、今度は一人だけの時間を有意義に過ごしたくなる。

「それで、さつきの事だけど」

「何？ サッキって」

「いや……ほら、エッチも出来るとかなんとか……それって、どうなのかなあ。なんて……」

澪はお下げの三つ編みを指で解きながら、小さく吹き出すよつて笑つて

笑つて

「ごめんね。これもわたくしの話だけど……こま生理だから」

省吾は思わずソファの背もたれに、倒れるよつて身を投げ出して大きく息をついた。



## 【1-1】愁い

部屋のドアにノックの音が聞こえた。

「澪、誰か来てるのか？」

透き通るよな男の声だった。

「あれ、お兄ちゃんいたの？」

「いや、いまちょっと寄つただけだ。玄関に靴があつたから

「うん。友達が来てる」

澪はそう言いながら部屋のドアを開けた。

四角い黒淵のメガネを掛けた短髪の青年が部屋を覗いた。爽やかで真面目で、少し神経質そうな笑顔がソファにいた省吾を捕らえた。省吾は反射的に小さく会釈をする。

「お前にしちゃ、随分な珍客だな」

清楚で育ちのいい澪に、茶髪の省吾は確かににある意味不釣合いかもしれない。

部屋を覗いた彼に悪気はないのだろう。その爽やかな笑みからそれは充分に伝わった。

「何て事言つのよ。失礼でしょ。もう」

頬っぺたを膨らませる彼女を、省吾は初めて見る。

そんな澪の表情を見た男は

「ああ、悪いね。気にしないでくれ」

澪の頭越しに、省吾にそう声を掛ける。

省吾は苦笑しながら再び頭を下げた。

彼が澪の兄だと言う事は、さつきの彼女の受け答えで判つた。

「あ、これお兄ちゃん」

澪は手短に省吾に伝えると

「もういいでしょ」

そう言って兄を部屋から閉め出す。

「あんまり激しい遊びは止めておけよ

兄はそう言つてハハッと声をだして笑いながら、部屋から出て行つた。

「まつたくも！」

澪がソファに座ると再びドアがガチャリと開いた。

「あ、今日は母さん遅いって言つてたぞ」

「判つたから、もう入らないでよ」

「判つた判つた」

その声がドアの閉まる音に僅かに被つてフローラウトする。

「カツコイイお兄さんだね」

「見た目だけよ」

「大学生？」

「ううん、もう働いてる。お父さんの病院で内科と外科を受け持つてるの」

「へえ、すごいんだ」

「人手不足なだけじゃない」

澪はそう言つて、ペットボトルから、二つのグラスにコーラを注ぎ足した。

彼女の家を出たのは八時を過ぎていた。

せつかくだからと宅配ピザを注文して一人で食べた。そして省吾が再び驚いたのが、澪の部屋にも玄関のテレビインターホンが繋がつている事だった。それは各部屋に繋がつてゐるらしい。

彼女は自室から門扉の前に来たピザの宅配店員を確認してから、階段を下りていった。

澪とはほとんどソファの上で過ごした。部屋が広くて落ち着かなかつたが、ソファの上にいればそれもほとんど気にならない。

何かを食べて直ぐにキスをするなんて思いも寄らなかつた。毎回歯を磨こうとも思わないが、彼女が嫌がると思つた。

しかし、意外と澪も平氣な様子で、ピザについて來たミルクティ

一を一人で飲んだせいか、今夜のキスはミルクティーの味がした。まろやかに絡みつく彼女の舌は、ミルクティーそのものだった。しばらくの間はミルクティーを飲むたびに、彼女の唇や舌の粘膜の感触を思い出してしまつ……そんな事を思いながら、門扉の中を見送る彼女に省吾は軽く手を上げた。

門を出て少し歩いた所で一台の白いベンツとすれ違う。四ドアのセダンではない。二ドアの少し車高の低いタイプのやつだ。省吾が目で追つたそれは、澪の家の前に止まって、オートメーションの駐車場の扉がゆっくり開くのを待つと、吸い込まれるようにその闇の中へ入つて行つた。

すれ違つた時、運転していた女性の姿がプライバシーガラスの中に僅かに見えた。

毛先を少しカールしたような、ちょっとぴりノスタルジックなショートボブの髪型が、妙に印象的だつた。

あれはきっと澪の母親だろう。省吾は立ち止まつた足を再び前に踏み出す。

路地が交差した場所で振り返ると、澪の家の二階のベランダに人影が見えて、こちらに手を振つていた。

直ぐに澪だと気付いて、省吾は遠慮がちに手を振り返す。

庭の明かりに照らされた華奢な身体が、スポットライトを浴びたように暗闇にぼっかりと浮かんで見えた。

澪は明るい。確かに英美の方が何処か飛んでいる感じはするが、今時の同世代としてごく普通の明るさは持つている。好意を抱く自分から見た澪の笑顔は、さらに30%増しだろう。

……なのに何故。

何故時折見せる真顔がせつなぐ、果敢なげに見えるのだろう。どうして、一瞬笑顔が消えて何処かを見つめる彼女の横顔は寂しさに満ちているのか……

省吾は帰りの電車の窓から通り過ぎる街の灯を見つめながら考えていた。

本当に澪は見かけ通り元気な娘なのだろうか。彼女が言つ通り、その病気は命を脅かすほどのものではないのだろうか。

ふと自分に置き換えてみる。

自分がもし命の危機にさらされるような病気になった時、周囲に全てを話すだろうか。

彼女の笑顔の隙間に漂う憂いな横顔が、何時も省吾の脳裏を不安にさせるのは何故なのか。

無言で佇む彼女の姿を毎朝密かに見続けていた為に、深層心理に深く刻まれた残像のようなものなのだろうか……

流れの街並が途切れると、見慣れた駅のホームに進入して光の帳に包まれた。

## 【1-2】聾める想い・1

見慣れた朝の喧騒に包まれて、省吾は自動改札へ定期を差し込む。目の前を歩く〇〇のタイトスカートの、後ろみごろの愈わせ目が少し右にズれているのを見つけて妙に気になつたが、わざわざ声を掛けて教えるほどでもない。

あまりそこに視線を向けるのもおかしいので、まあいいかと、ひと事として片付けて視線を上げる。

周囲には同じ学校の連中も大勢いるが、顔見知りでもよほど親しい仲でなければいちいち声は掛けない。それが朝の仕来たりと言うか、それだけみんな学校へ向う事で頭がイッパイなのだ。

「おはよう」

省吾が駅の階段を下りた所で、後から肩を掴まれた。  
華奢でしなやかなその手が男のものでない事は、掛けられた声と同時に感じた。

「あれ、愛香。今日も朝練なし?」

後から声を掛けってきたのは神崎愛香だつた。

「なに言つてるの、昨日のコンクールで三年は終わりよ」

「ああ、そう言えばそうか」

愛香の艶のあるキャメルブラウンの髪の毛が、秋風にサラサラと舞う。

「彼女、元気そうじゃない」

今朝も電車では澪と一緒にだつた。同じ電車の愛香は、気を利かせて駅を降りるまでは省吾に声を掛けなかつたのだろう。

「ああ、普段はね」

「週一回の治療つて、まだやつてるの?」

「ああ、そららしい。あと、時々精密検査で学校を早退したり、遅れて行つたりね」

「見た目はあんなに元気なのにね」

「愛香がそう言つて怪訝そうに微笑むと

「でも、ちょっとと色白かな」

そう言つ愛香も夏の日焼けがだいぶ収まって、白い指先で髪の毛先を玩ぶ。

「ねえ、お父さんから変な噂を聞いたんだけど……」

愛香は遠慮がちに言った。

「ここの前ショウヤ、彼女は死ぬほど辛い治療をしてこられたよ」

「ああ

「なんかさ……」

愛香はそこで躊躇して言葉を飲み込む。

「なんだよ」

省吾は視線を愛香に固定したまま歩き続けた。別に必死で前を見ていなくて、ここの歩道は真っ直ぐ一本道だし、もう一年以上も通っている道だ。

「なんか……臨死させる治療があるって、医師の間でも噂があるらしいの」「

「臨死？」

普段あまりにも聞き慣れないその言葉に、省吾は眉を潜めた。

「一端死なせて……正確には心停止させて、直ぐに蘇生処置を施すんだつて」

「それがいつたい何の治療になるんだ？」

「判らないよ。何か、そうすると病状の進行がリセットされるんだつて」

「リセットされる？」

後から自転車が来た事に気付いて、省吾は愛香の肩に手を添えると歩道の内側に押して、自分も同じ方向に動いた。

愛香は一瞬その仕草に胸の高鳴りを覚えるが、それを覺られないようにグッと平静を保つて彼の横を過ぎる自転車を田で追った。

「そんなん何度もやれるのか？」

省吾はそんな愛香の心の動きなどは全く気づかずに、言葉を続ける。

「判らないよ。でも噂では、原因不明の血液の病気で、症状はよく知らないけど……その病気の進行は心停止させる事によって正常な状態に戻せるって」

呆然とその話に聞き入る省吾の腕を掴んだ愛香は、「でも、噂だよ。そんな噂が医師の間にあるって。お父さんも人伝ひとづてに聞いただけでよくは知らないらしいから」

しかし省吾はそれがどうして澪と繋がるのか、直ぐには判らなかつた。

ふと視線を上げると、高高度を飛ぶ旅客機の引く飛行機雲の白い線が、虚空に一本見えた。

「死ぬほど辛い治療じゃなくて、実は本当に死んでる……とか」

愛香は再び遠慮がちに咳くようにな声に出すと、それに反応した省吾は思わず立ち止まる。

「…………まさか」

冗談を受け流すような、脅えるような複雑な笑みを彼は浮かべた。

教室に入つて自分の席に着いた省吾は、何か物足りなさに気付き辺りを見回す。

「あれ、裕也がいないじゃん」

「本當だ、珍しい」

前の席に腰掛けた愛香も窓際の彼の席を見て咳いた。省吾は真ん中の列の一番後ろ。裕也は窓際の一番後ろの席にいた。

省吾はふと携帯を取り出すと、着信ランプが点いている事に気付いた。裕也が学校を休むなら、何か連絡があつてもいいのでは。そう思つたのだが、やつぱり彼からメールが入つていた。おそらく電車内で着信したのだろう。

『風邪で休む。報告頼む』

メッセージはそれだけだつた。

ちょうどチャイムが鳴つて、品疎な風貌の男性教師の担任が教室へ入つて来る。

「ああ、今日は休みはいるかな」

担任の荻野勤は、出席簿を一瞥した後、教室の中を見渡す。いちいち全員の出席は取らない。休みは誰か探すだけで、それで終わるのが何時もの事だ。

省吾は仕方なく担任に声を掛けると、裕也が風邪で休む事を伝えた。

もちろん、職員室に電話を入れるのが本来の義務なのだろうが、最近は友達にメールで連絡を頼む連中も多い。

だいたいそれで無断欠席は免れるのだ。もちろん、厳しい学校ならそれは通用しないのだろうが……

省吾はちょっと空虚な気持ちに浸つて、空いた裕也の席を眺めた。

## 【1-3】聾める想い・2

朝あんなに晴れていた空は何時の間にか低い雲に覆われて、隙間から覗く僅かな蒼も、曇にはすっかり隠れてしまった。

校舎のベランダへ出ると妙に冷たい風が吹いていて、急に季節を飛び越えたようだ。

省吾は食事を終えると、なんとなくベランダの手すりに肘を着いて遠くの空を眺めた。

家並みの向こうには、東京ガスの丸い緑色のタンクが小さく見えて、今にも怪獣が現れて、その辺一帯で暴れまわりそうなこの風景が、密かに彼は気に入っていた。

「なに黄昏ちやつてんの？」

教室の窓から声を掛けて来た愛香は白いカーデガンを羽織つていた。

朝は着ていなかつたが、おそらく鞄にでも押し込んできたのだろう。

「別に」

省吾は少しだけ振り返つて応える。

「今朝の事気にしてる？」

「いや、別に」

今朝愛香から聞いた奇妙な噂話しさは、あまりに突拍子も無い為、彼には今ひとつピンと来ないと言うのが本音だつた。

わざと心停止させて再び蘇生させるなんて、素人が考へてもあまりにリスキーに思える。最近流行のナツクル系雑誌にでも載りそつたネタだ。

「外、寒くない？」

「ああ、ちょっとな」

省吾はそう言って、身体を完全に愛香に向けると、ベランダの手すりに背を当てた。

彼女は窓から手を伸ばしてチョコレートの着いたクッキーを袋に差し出す。

「食べる？」

いつの間に何処で買つて來るのか、コンビニの100円コーナーによくあるお菓子だ。

省吾は左手を伸ばして一つ摘むと、それを口に放り込んだ。

その時、冷たい風がゴオッと吹き抜けた。

怪しい雲行きだった空は、あつという間に夕暮れのようなほの暗さに包まれると、突然バタバタと音が聞こえて、教室の中には連中も一斉に窓の外を振り返る。

「何？ 雨？」

愛香も省吾の身体越しに空を見上げる。

あつといつ間に校庭の色がくすんだかと思うと冷たい飛沫を感じて省吾はベランダの手すりから身体を離す。

ベランダの少し離れた場所にいた数人の女子が「ぎゃー」と、奇声を発しながらドアから教室へなだれ込んだ。

省吾は愛香の乗り出していた窓から直接教室へ飛び込むと、急いで窓を閉める。とたんにその窓ガラスには激しく水滴が飛び散った。外は一瞬で雨で煙つていたが、さらに雨脚は強まって風が吹き付けると、ザブザブとバケツで水をかけてくるよつて窓ガラスの景色は歪んだ。

「凄い雨」

教室の中には、しばし呆然と外の景色を眺めていたが、見ていてもどうじょうもない事に気付くと、再びそれぞれにお喋りを始める。

パツと省吾の頭に小さなタオルが飛んできた。

「頭拭きなよ」

愛香が放り投げた彼女のタオルだ。ミッフィーの絵が描いている可愛らしいものだった。

省吾はそれを両手に掴むと

「サンキュー」と言つて、頭を「ゴシゴシ」と拭いた。

濡れたせいか、何時も愛香から香る甘いコロンの香りがタオルから染み出るよつに辺りに漂つた。

午後の授業中には一端雨はあがり雲の切れ間から僅かに陽が注いだ空だったが、放課後には再び雨が地面を濡らしていた。

昇降口の電気は何時も半分しか灯っていない為、窓から光が入らない今日は妙に薄暗い。

その先にある体育館へ向うバスケ部の連中が通り過ぎる。

「省吾」

去年まで同じクラスだった、坂上圭介だ。

「あれ？ 圭介はまだ部活？」

「ああ、今日は紅白戦の助つ人」

そう言つて手を上げると、手に持つたバックを肩に掛け直して足早に歩き去る。

それに応えて省吾も手を上げて見せると、下駄箱の暗い影に挟まれながら靴を履き替えていた。

「たまには一緒に帰ろうよ」

昇降口で声を掛けて来たのは愛香だった。

「ああ、別にいいけど」

「駅までだけね」

彼女が冗談っぽくそう言つて笑うと

「今日は澪は来ないんだ」

省吾はナイキに自分の足を押し込むと、上履きを靴箱に戻した。聞き覚えの無いその澪という名が、例の彼女だと言つ事は愛香にも直ぐに判つた。

「ああ、そうなの」

さり気なく帰す愛香の胸の鼓動は、いつぺんに高鳴っていた。

彼女が省吾と一緒に電車に乗ったのは、おそらく五月の終わり頃が最後だろうか。

その時は部活がたまたま休みで、帰り際に寄った駅前のコンビニで省吾と会つてそのまま一緒に帰つたのだ。

もちろんその時は澪の存在はなかつた。確かに彼は既に毎朝澪を見つめながら登校していたのだが……

とにかくそれ以来愛香は部活が忙しくて、偶然を装つにも出来ない状態で省吾と一緒に帰る事なんて出来なかつた。

愛香は何故省吾に心を惹かれたのか……

それは中学時代に遡る。

神崎愛香と北原省吾は当然のように中学校は一緒にではなかつた。彼女は小さい頃から楽器が好きでピアノ、バイオリンと<sup>かじつ</sup>けつけてきたが今ひとつピンと来なかつた。

区立の中学校に入つて吹奏楽部に入部するとフルートの音色に魅了され、直ぐに自分のフルートを購入し、特訓して6月の定期演奏会には既にレギュラーメンバー入りした。

今までこそ見た目は多少チャラチャラした愛香だが、意外と頑張り屋なのだ。

そんな彼女も中学二年の夏休みには、部活をサボつて好奇心旺盛な仲間と渋谷に繰り出したりして夜中まで遊び歩くようになつた。この頃既に今の身長、160センチに達していた愛香はパツと見はもう高校生にも見える。

覚えたてのタバコや酒は、みんなよりもひと足早く大人の仲間入りをしたのだと、彼女に錯覚させた。

校則がうるさかつたので髪は黒かつたが、ちょっとマスカラを塗つて淡い色のグロスを引けばいくらで高校生や大学生からナンパの声がかかつた。

もちろん、元々睫毛の長い彼女はスッピンでも声はかかる。ただ、口リ系の援交オヤジや怪しいプロダクションのスカウトも多いのが難点だ。

しかし、ウザい、キモイと言いながら、次々に声のかかるのは気持ちがいい。

愛香はそんなウソと欲情で固められた扉の向こうへ、僅かに足を踏み入れていた。

#### 【1-4】聾める想い・3（前書き）

澪から少し離れて、愛香と省吾のヒッキーが数話続きます。

## 【1-4】聾める想い・3

「愛香、クラブのバー券貰つたんやけど、行く?  
携帯に電話をかけて来た関西弁の少女は悪友の真琴まいだ。

通う中学は違うが、夜の街で知り合った同じ年の彼女は、夜遊びの年季は愛香よりも上だった。

以前大阪に住んでいた彼女は、神戸、奈良にも住んだ事があつて、少し甘つたるい関西弁を喋る。

いつの間にかクラスの娘といるより真琴といるほうが多くなった。彼女は時折プチ家出などをして街を徘徊しているので、何時でも会う事ができるし、妙に気もあつた。

その日の夜も、愛香は真琴に誘われるまま夜の街へ繰り出す。

眠らない夜の街は、夏休みの学生の胸を何故か高鳴らせるのだ。それは当時中学生だった愛香も同じで、高校生も中学生もいたところで目的もなしに徘徊している。

いや、彼女達は徘徊する事が目的なのかもしない。まるでそこから何かが始まると信じているように。

都知事の圧力で取り締まりは以前よりも厳しくなったものの、深夜徘徊する未成年のあまりの多さに補導も追いつかない。

欲望の渦に引き寄せられる大人たちの隙間を縫うように、彼女たちは光の街をさまよう。

それでも愛香は塾には通っていた。

親がうるさいせいもあるが、彼女は彼女なりに年相応のやるべき事をわきまえていた。

もちろん時々はサボるが、特別夏期講習などは朝の九時から夕方まできつちり出ていたりする。遊ぶのは夜だから関係ないのだ。

省吾を見かけたのは石神井駅前にあるその塾だった。

雑居ビルの一階と二階が塾になつていて、一階はコンビニが入っている。

省吾はといふと、塾をサボる事も多く、時間に遅れてくる事もしばしばで愛香との接点はまったく無かつた。

しかし八月の模試での事だった。

この日は参加者が少なくて、長い机に生徒はまばらに座っていた。多い時でも模試の際は一つずつ椅子を空けて座るが、この日はそんな事をするまでもなく一人分も三人分も席が空いている机がざらだつた。

教室には五人がけの長机が一列になつて十個ずつ、全部で20個並んでいる。所々の机は規定通り三人が一つ置きに座つていたが、愛香の座つた真ん中辺の机には端と端に一人いるだけだった。

それでもそんな事は気にも留めずに試験問題をこなしていた彼女だつたが、急にシャーペンの芯が途切れた。

何度もノックしても芯は出てこないので、後のキャップを開けてペンを逆さまにしてみると中には一本もストックが無い。

愛香は直ぐにペンケースの中を見るが、そこにも芯のストックがなくて、しかも他には色付きのボールペンしか入っていなかつた。直ぐ隣に誰かいれば誰でもいい、声を掛けてシャーペンの芯を貰うだろうが、今日に限つてかなり離れた場所に見知らぬ男が一人座つているだけだ。まさか後を振り向くわけにもいかないし、前の席の娘を呼ぶわけにもいかない。

……マジ困つた……どうしよう。

その時シャツと小さな音がした。

何かが机の上を滑つて来て、愛香の手にぶつかり、彼女はとっさにそれを手のひらで覆つた。

近くの席の何人かが、不審な音に思わず頭をあげる。が、再びテストに集中したのを見て、愛香はホッと息をつく。

教壇にいた講師も一瞬その音に視線をチラつかせるが、愛香は素知らぬふりをして顔を伏せていた。

さつき机を滑つて来たものを掴んだ左手をそつと開けてみると、それはシャーペンの芯の入つた小さなケースだった。

彼女は顔を伏せたまま、それが飛んできた四つ離れた席を盗み見る。

彼は素知らぬ顔で答案用紙に向かって手を動かしていた。

それほどカッコイイ男ではない。

靴の踵は潰して少しガラは悪そうだし、夏期講習もたまにしか見かけないヤツだ。だいたい右手に時計をしているのが妙にカッコつけに見えた。

しかし、その憎たらしいほどにクールで些細な気遣いは、愛香の心を強く驚撃みにしたのだ。

「ね、ねえ」

愛香はテストが終わると慌てるように彼に駆け寄った。

さつきのテストが最後だったの、同じ机にいた彼はさつと帰るところだったのだ。

「えっ？」

彼は少々無愛想に振り返った為、愛香は一瞬言葉に詰つたが「さつきは有難う」

そう言って、残りの芯が入ったケースを彼に返す。そして満面の笑み。

自分がちょっとは人よりモテル事は充分に自負している。この男の氣を引くことなんて造作も無い事だ。

「ああ、別にいいさ」

しかし彼は、それを左手で受け取るとさと教室を出て行つた。

愛香は自分の笑みに反応しない彼に一瞬拍子抜けする。

「ね、ねえ、ちょっと」

「俺さ、タバコ吸う女って、ちょっとて、感じなんだ」

彼はもう一度振り返つて、冷ややかに笑みを作ると廊下を歩いて行つた。

どこかで見られたのか……？ 愛香は初めて血の氣の引く思いを

味わつた。

タバコを吸う女は嫌い……そう思われる事なんて、今まで考えたことも無かつた。それを吸う仕草は、自分では何処かいい女、大人の女をイメージさせていたのだ。

ショックだつた。そんな事、夜に出逢う男には言われた事がない。それが省吾と初めて言葉を交わした出会いで、その時以来彼女はタバコを咥えてもいいない。

ある日、塾の昼休みにコンビニ弁当を食べる省吾を、愛香は見かける。その時、彼が左利きだとわかつた。

文字を書くのは右手だったのに気付かなかつたが、箸を左で持つのはおそらく左利きだろう。

と言つ事は、右手首に時計を掛けるのは、彼にとつて至極当然の事だ。

「あれ、省吾つて左利きなんだね」

近くにいた娘が何気なく話しかける声に彼は頷いていた。

その後愛香は省吾と時々顔を合わせたが、なかなか話をするチャンスは無いまま秋頃になつて彼は塾を辞めた。

心のどこかに想いを留めたまま、月日は過ぎた。

楽しい事を追い求め追いかけられる喧騒に包まれ、それに夢中になつていた彼女は、その留めた想いさえも、何時の間にか忘れていた。

ところが高校へ入つてから再び省吾と出逢つたというわけだ。

愛香は決して省吾を追いかけて今のが高校に入つた訳ではない。

父や母はせめて大学の付属校に入れだがつっていた。それは小学校から中学に上がる時も同じで、愛香はその度に反発した。

勉強に追われて過ごすのはまつぱらだつたし、今の高校は、校則があつて無い様な校風が何よりも気に入つたのだ。

そして、入学式の日には氣付かなかつた彼の姿のある日校舎で見かけて、しばらく忘れていた愛香の乙女心に再び火が灯つてしまつたのは言つまでもない。

勇気をだして彼女から声を掛けてみるもの、クラスが違う為か、なかなか距離が縮まらない。

しかも省吾は、同じ塾で愛香と会っている事も忘れていたのだ。クラスが違うからこそ付き合っている連中も大勢いるというのに、どうにも愛香には自分からその意思表示がうまくできなかつた。そのくせ他の連中や上級生からはよくコクられて、その度に屋上や体育館裏で「ごめんなさい」をしなければならなかつた。中学からの付き合いで真琴とはよく遊ぶが、以前のように夜な夜な遊びまわる事は無くなつた。

当て付けに他の学校の男と付き合つてみたりしたが、極端に親しくなれない省吾には何の効力も無かつたし、部活が忙しくて、けつときょく他の学校の男の子と付き合つのはかなり無理があつた。

そんな状態のまま二年が経ち、二年生になつた時にやつと念願叶つて同じクラスになつたというわけだ。

本命に関してだけは異常に奥手な愛香に、省吾との間に望む進展はかなりの難題だつた。

## 【1-5】ふたりきり・1

傘から雨が足元に何度も落ちて、その度に歩道に薄く溜まつた雨水が小さな波紋を作つて揺れるが、それは空から注ぐ雨の勢いであつという間にかき消される。

愛香が置き傘にしていた折り畳みの赤い傘に省吾と一人で入つて駅までの道を歩く。

愛香は彼と腕が触れそうで触れない微妙な距離を保つて肩を並べながら、つい右半身に意識が集中してしまつ。

省吾は愛香が自分側に多めに傘を傾けている事に気付いて、柄をそつと手で押す。

「俺は頭が濡れなきやそれで充分だから」

……普段は何にも考えてないようで、時折見せるこのさつ氣ない氣配りにグッとくる自分が悔しい。

愛香はガラでもないと思いながら、火照る頬をこつそり空いていれる手で摩つた。

駅の階段まで来て庇に入ると、彼女は傘を畳む。

「今日はどうして彼女と帰らないの？」

本当は話したくない彼女の話題を、愛香はあえて平静を保つて切り出す。

「なんか運動会の練習があるらしい。その後友達をいじ飯と食べる

とか」「雨なのに？」

「体育館で出来る練習なんだって」

「そう」

愛香は足元を見ていた視線をふと上げて

「でも、彼女病気なんですよ？ 運動は平気なの？」

「さあ……普段は元気だから、普通に生活できるんですよ。体育とかも平気だつて」

営業途中のサラリーマンが、死にそつたほどゆづくと階段を上る横を、二人は何気に追い越した。

小脇に黒い鞄を抱えた、四十過ぎのいかにもくたびれた風貌の男だった。

省吾はこんな大人を見ると、あくせく働く毎日が自分にも訪れて、結局高校生などにオヤジ呼ばわりされるのかと思うとウンザリする。天井に当たる微かな雨音を聞きながら、一人は何となく無言でホームに佇んでいた。線路上の石は、普段は見せない艶やかな琥珀色に様変わりしている。

学校での二人は自然に何でも話しが出来るのに、他の空間に放り出されると途端に何を喋つていいのか判らなくなる。

学校では周囲にクラスメイトがいる事で、一人で喋つていってもつまり、それは一人きりではないのだ。

しかし今ホームにいるのは一人きり。

もちろん周りには他の学校や同じ学校の生徒もいるし、「ゴミ箱の横に立っている娘は隣のクラスの顔見知りの綾子だ。

それでも、学校という枠で括られていないこの空間では、今隣にいる省吾と愛香は一人きりと言つ事なのだ。

その証拠にすぐ横のベンチには学校とは無関係の、さつきのくたびれたサラリーマンが腰を降ろして栄養ドリンクを飲んでいる。

ホームに電車が入つて来て、一人は無言のままそれに乗り込んだ。省吾は車内に連なつてゆらゆらと揺れる吊革や空調の風を受ける広告の吊りビラなどを、ぼんやりと眺めたりしていた。

「ショウは家はどうしてるの？」

「どうしてるって？」

「えっ？ 例えば……家で一人の時とか」

省吾の家が母子家庭と言う事は、当然リサーチ済みだった。

「そうだなあ。俺パソコンもあまりやらないし……ボケツとテレビ見てる事が多いかな」

彼は視線を窓の外に移しながら言った。

愛香が下りるのは一つ目の駅だ。

彼女は省吾ともうしばらく一緒にいたいが、直ぐに車内アナウンスが流れであつといふ間に次の駅に着いてしまう。

電車が減速を始めると、愛香はキュッと胸が苦しくなった。もつと何かを話したいのに、それどころじゃない。

明日も会えるのにどうしてこんなに胸が苦しいのか判らなかつた。中途半端に彼と一緒にいた為に、想いが膨らんでしまつたのだろうか……

バシュウッと音を立ててドアが開いた。

動かない愛香を省吾が見て「お前こゝだろ?」

発車メロディーが鳴つた。

動かない彼女に省吾は困惑したが、無理やり降ろすのも妙だ。他の駅に用事があるのかもしれない。

愛香は何故か無言で頷くと、省吾の腕を掴んでホームへ飛び降りた。

「おい」

省吾は訳が判らずに腕を引かれるまま彼女と一緒にホームへ足を着いた。背中ではドアが閉まり、電車が走り出す。

駅に降り立つた雑踏は、真っ直ぐ階段へ向つて動いていた。

「おい、何だよ」

省吾は愛香が掴んだ腕を振りほどいた。

「だつて、詰んないじやん」

「はあ?」

愛香の冗談っぽい笑顔に、省吾は困惑した。

何が詰んないんだ……この時は、彼女の意図がまるつきり解らなかつた。

「せつかく一人なのに、全然喋れないし……」

「いや、けつこう喋つてたし……」

省吾は困惑を隠しきれない笑みを浮かべたが、彼女は急に笑顔を曇らせて俯いた。

「喋つてないよ」

「えつ？」

「喋つてない。全然話していない。せっかく一緒に帰れたのに、久しぶりに一緒に電車に乗ったのに……もつと一緒にいたいじゃん」

愛香は勢いに任せると子供のようの一気に言い放った。言い出したら停まらなかつた。

省吾にはそれが、何時もの少し大人びた彼女にはかけ離れた姿に見えた。

ホームの端から歩いて来た二人組みの主婦が、二人のやり取りにジロジロと視線を向けるのが何とも恥ずかしい。

……もっと遠慮して見ろよ。省吾は刺さるような視線に嫌悪感を抱いた。

既に階段に足をかけた他の高校の連中も、愛香の声が聞こえたのか振り返つてチラ見している。

「いや、一緒にいたって……意味判んねえし」

益々困惑した省吾は苦笑しか出来ない。愛香は、ついムキになってしまった自分が恥ずかしくて急に走り出す。

「あつ、おい。ええ？」

階段に向つて駆け出した彼女を、省吾が追いかけた。人混みに阻まれて上手く前に進めない彼女は、強引にそれを搔き分けて階段を駆け上がつてゆく。

「ちょっと……」

「待て」と声を出そうとした省吾は、自分が人混みの中に入ることを思い出し、言葉を飲み込むと

「ちょっと、すいません」

そう言って、ひたすら人混みをぬつて階段を駆け上がつた。

通路をダッシュする愛香の髪が激しく揺れて、短いスカートの裾は捲くれあがつていた。その背中を彼はひたすら追いかけて、今度は階段を駆け下る。

……何やつてんだ、俺。何で駅で女の背中追つかけて、必死で走

つてんだよ。つうか、アイツ足速ええよ。省吾の頭にそんな思いが素早く駆け抜けて消えた。

「ちょっと待てって」

改札口の前で、よけやく彼女を捕まえた。

「なんだよ。どうしたんだよ」

息を弾ませて愛香の腕を掴んだ。

「う、ごめん。あたし、つい……」

彼女も肩で息をつきながら、途切れ途切れに言った。

今追い越してきたばかりの雑踏が次々に改札を抜けてゆく中で、お互いのブレスと自分の激しい鼓動だけが、一人の耳には響いていた。

## 【1-6】ふたりきり・2

「あ、気にしないでね、さつきの事。あたしはほら、男に困ってるわけでもないし」

愛香はそう言ってキレイにカットされた眉を潜めると、ちょっとぴりムリめに笑つて見せる。

一人は石神井公園の池の畔を何となく歩いた。

さすがの省吾も彼女の想いを感じ取っていたが、どうしていいのかイマひとつ判らない。

だいたい何時も何でも話せる女友達と思っていた彼女が、自分をそんな風に想つていたなんて、どうにもピンと来ないのだ。高校に入つて微妙なアプローチを繰り返していた愛香の態度は、全く省吾に届いてはいなかつたのだ。

雨は上がり、濡れそぼる草木に弱々しい光が薄つすらと注がれ、まるで朝露に煙るように緑の景色は白く微かに霞んでいた。ひょうたん型の池の一一番窪んだ場所にかかるメガネ橋の上で省吾は立ち止まつた。

雨で濁りきつた水面に、時折魚の跳ねる音がして波紋を作つている。

「正直お前は可愛いと思つよ」

省吾はそんなセリフを面と向かつて言つ事は出来ず、池の水面を見つめたままだつた。

「そ、そんなの、当たり前じゃん」

愛香は照れ隠しにそう言い返した。同じく水面を眺める彼女は、チラリと彼の横顔を盗み見る。

「でもさ、俺……今は」

「ちょっとまつたあ」

愛香は咄嗟に省吾の腕を掴んだ。

「それ以上言わなくていいから」

慌てた顔を笑顔に変えて

「そんなの判つてるよ。だからちよつと言つてみたかつたつて言つ  
か、弾みつていうか……だから……今日の事は忘れてよ」

省吾はこんなに慌てた彼女の表情も、駅のホームでの泣き出しそ  
うな顔も、今まで見た事は無かつた。

それはとても人間らしく、女の子らしいと思つた。いつも自信に  
満ちて、周囲の女子からは容姿も成績も一目置かれ、年中誰かにコ  
クられてはそれを断る優越感に浸つてゐる素振りをみせる。  
そんな彼女が眉を寄せて子供のように自分の思いを叫ぶ姿に一瞬、  
本気で可愛らしいと感じた。

でも今は……今は彼女の気持ちに応えてあげる事は出来ない。  
省吾は答を出さつとは思わなかつた。今はそれでいいような気が  
した。

高校生の自分が、まさか将来を考えて女性を選んでいるわけでも  
ない。

ジョギングするお爺さんの姿が目に映つた。歩くようなスピード  
だが、池の周りの遊歩道をもう三周以上は周つてゐるだらう。

「お前の家、この近くなの？」

「うん。」この通りの向こうよ

省吾は虚空を仰いでひとつ息をつくと、自分よりも少しだけ視線  
の低い愛香を見た。彼女は省吾の視線を感じながらも、池の畔に視  
線を這わせている。

「一端駅に戻つて、モスでなんか食わない？ 僕腹減つたよ」

「うん。そう言えば、お腹減つたよね」

愛香はちょっとだけ潤んだ目を細めて笑つた。

「お前が走らせるからだぞ」

「運動不足みたいだから、走らせてあげただけじゃん」

省吾が歩き出すと、彼女はスカートを大きく揺らして小走りに彼  
に肩を並べた。

本当は手を繋ぎたいけど、そう言つわけにもいかない。

今日は決定的な告白ではなかつたけれど、何となく気持ちを伝えたら、どんよりと立ち込める曇つた空模様とは裏腹に、彼女の気持ちは晴れやかになつた。

その夜、神崎愛香は自分の父親の勤務する某大学病院へ来ていた。大きな敷地を横切つて、急患用の通用口から入る。外来診療の終了した閑散としたロビーを抜けると、エレベーターに乗つて五階の外科病棟へ向かう。

ナースステーションを横切つて休息ロビーに入り、椅子に腰掛け  
て一息ついていると直ぐに一人の医師がやつて來た。

箕輪忠典。彼は愛香の父親である神崎理の下で働く外科医だ。

「ああ、愛香ちゃん。わざわざ来なくても」

「だって、箕輪さんなかなか捕まらないんだもの」

「いやあ、けつこうオペが立て込んでいてね」

箕輪はそう言つて苦笑を浮かべると

「実は、この後もオペが控えてるんだ」

「時間はとらせないよ。この前の事、調べてくれた？」

愛香は立つたままでいる箕輪を見上げた。

「いやあ、やっぱり噂つてだけで、詳しい事は何も見えてこないんだ。むり気なく他の連中に聞いても、みんな誰かに聞いたつて感じで」

「臨死させる治療の事例はあるの？」

「そんなのあるわけないよ。そんな治療法が認められるわけないし

……」

箕輪はテーブルを挟んで愛香の前の席に座ると再び笑みを浮かべ  
「ただ、治療法のわからない血液の病気が存在するのは確かなんだ  
よ。精密検査ではどこにも異常は見られないのに、血中の白血球や

赤血球、その他の成分もそれぞれの数が異常に増えたり減ったりしていくんだ。もちろん、骨髄にも異常はないらしい。でも、原因不明の病気は意外と多くて、世間に出るのは比較的症例の多いほんの一部に過ぎないんだよ」

箕輪はチラリと腕時計に目を配ると

「じゃあ、俺そろそろオペの準備があるから」

「うん。『めんね。わざわざ』」

彼女はそう言って、優しく微笑んだ。

「いや、いいよ。噂の件は、それとなく他也当たつてみるから」

箕輪は軽く手を上げて、休息ロビーを立ち去った。

彼女が父親から聞いたと言つて省吾に話して聞かせた、臨死させて治療する奇病の噂話は、実は箕輪から聞いたものだつた。

愛香は病院から出ると、友人から入つて来た携帯メールに返信を送り、タクシーを拾つて帰宅した。

愛香はたまたま母親の使いで父の病院へ行つた時に箕輪みのわにあの奇妙な噂を聞いた。それを聞いた瞬間、何故か省吾の彼女の姿が浮かんだのだ。

症例のない奇病と臨死というモラルに反した……といより、もはや倫理を超えた治療法の噂が、省吾が言つていた「よく判らない病気と死ぬほど辛い治療」に重なつたのだ。

彼女は箕輪に頼んでその噂に関して調べてもらつてはいたが、やはり所詮は噂。なかなかその真相には辿り着かない。

病院に関する噂話は以外に多く、そのほとんどが根も葉もないものばかりだと言う事は、愛香自信がよく知つている。

それでも、電車で見る澪の何処か病的な白さを思い出すと、何だか嫌な胸騒ぎがするのだ。

これは父親から受け継いだ勘なのだろうか。愛香は自分でも判らない不安に急かされるように、とにかく噂の真相が知りたかった。

根も葉もない、ありえない事ならそれでいい。

省吾は自分に振り向いてくれないけれど、彼の悲しむ姿は見たくない。

愛香は自室のベッドで横になつたまま、ただ白い天井を見上げて省吾と歩いた石神井公園の、緑の生い茂る遊歩道を思い出していった。

## 【17】女心

少ない北窓から差し込む淡い光が、廊下のリノリウムの床に僅かに白い反射光を描いていた。

休み時間の象徴である教室の喧騒が、開け放たれたドアから風に乗つて染み出るよう廊下へ流れる。

「ああ、あたしも暇になつたからバイトでもしようかなあ」  
教卓に寄りかかった愛香が、両腕を頭上に掲げて伸びをしながら吐息混じりに言った。

「あんた大学行くんでしょ」

クラスメイトの陽子が言う。それを横で聞いた美紀は

「馬鹿ね。愛香は今更あくせく勉強しなくたつて、適当な大学なら何處でもいけるのよ」

「東大とか行かないの？」

陽子はそれが当然という顔で、愛香を見る。

「行くわけないじゃん。意味判らないし」

「でも愛香、あんたバイトしなくたつて、充分なお小遣い貰つてるでしょ」

少々妬ましい視線で見る美紀を、冗談っぽく嘲笑う愛香は

「暇つぶしよ。それと社会勉強かな」

教壇付近で戯れる女子たちの中にいる愛香の姿を、美紀は不思議な気持ちで見ていた。

今朝、駅の階段を下りてコンビニに寄ると、愛香がいた。今までと変わらない笑顔で「おはよう」と言つて寄つてくる。

今までも時折あつたように自然のまま一緒に肩を並べて学校まで来て、ほぼ一緒に教室へ入つて来た。

昨日、一緒にモスバーガーに入った時も愛香は既に何時もの彼女で、ハンバーガーを頬張りながらシェイクを口にし、少し長い睫毛をパタパタと瞬きさせて笑つた。

一瞬憂いに俯いた彼女は何処かへ消えていた。

今、他の女子と何かを話しながら笑い会う愛香の姿は、その整つた目鼻立ちも相まって満ち溢れた自信さえ感じる。

「女つて判んねえよな」

省吾は横にいる裕也に聞こえるように呟いた。

「あ？ 何だよお前。今頃そんな事に気付いたのか。それってヤバくねえ？」

「なんでだよ」

机に頬杖を着いたままジロリと裕也を横目に見た。

「だってよ、あの澪ちゃんだって、本当はどんな娘か判らないぜ」「そんな事ないだろ！」

裕也は、省吾の机に腰掛けると

「じゃあお前、澪ちゃんの事は何でも知つてんの？」

「いや、何でもってわけでは……」

裕也の言葉に省吾は内心ドキリとした。彼女の事は、知っているよつで未だに何も知らないような気がする。

「よく普通のカップルを裝つて池袋や新宿、渋谷に出かけたりもするが、彼女の病気の事はほとんど聞かないまだ。澪の家で訊いたあの時以来、省吾は彼女の病状には触れていないので。

別に具合の悪い素振りもないし、毎週土曜日には連絡がほとんど取れないという事意外は別に他の女の子と変わりは無い。もちろん、その他にも検査などで朝会わない事もあるし帰りに会えない事もある。

それでも澪を傍で見てている限り、彼女が死に関係するような重病には見えないのだ。逆に、ちよつぴり会えなくなる秘密の時間が、彼女の魅力でもあるのかもしれない。

だいたい命に関わるような重い病気なら、もつと虚弱で、電車の中でも立つていられないとか、しばらく歩くと倒れそうになるとか、そんなイメージがある。

確かに親しくなったキツカケは、彼女が電車で倒れたせいで、

あれ以来澪が省吾の前で具合を悪くした事は無かつた。

「はい、退いた退いた」

始業のチャイムが鳴ると愛香が省吾の前にある自分の席に戻つて来て、彼の机に座る裕也をそこから退かせた。

省吾は田の前に来た愛香を見て、一瞬わざと窓の外に視線を移した。一瞬省吾を見た愛香もさり気なく廊下の方へ視線を這わせる。

一瞬交差した二人の視線は、事無きようにそれぞれ違う場所を見つめる。

「お前ら、俺が休んだ隙に、何かあつたのか？」

立ち上がった裕也は、愛香と省吾を交互に見て言った。

「な、何でそななるんだよ」

「そ、そつよ」

「いや……何か前と雰囲気が違つていうか」

裕也はそう言つて笑つた。もちろん、ただの当てずっぽうなのが、彼の一言に愛香も省吾も一瞬鼓動が跳ね上がつたのは事実だ。何時も適当な事をいう割には、時折鋭いところを突いてくるのが裕也の恐ろしい所だと、省吾は度々感じる。

「バカな事言つてないで、早く席に戻れば」

愛香にそう言われて、裕也はズボンのポケットに手を入れたまま「ヘイヘイ」と、ガ一股に歩いて席へ戻る。

省吾は思わず愛香を見ていたが、その視線に彼女も気付いて

「な、何？」

「いや、別に」

省吾は慌てて返すと「ていうか、俺はただ前見てるだけだし」

「あ、そうだよね」

彼女も慌てるよう、前方へ向き直つた。

柔らかそうな茶色の髪が肩から背中に落ちて揺れると、微かに甘い香りがした。

省吾はちょっとだけ彼女の髪の毛に触れてみたい気持ちを抑えて、廊下を歩く微かな足音に耳を澄ます。

入り口のドアが開いて数学の教師が大股で入つてくると、教室のざわつきは潮のように引いて、退屈な時間の始まりだ。

## 【1-8】真相

その日の放課後、省吾は何時ものように澪と電車内で待ち合わせ、一緒に帰った。

「ねえ、石神井公園の池にワードがいるって噂、知ってる?」

澪が幼い子供のように笑う。

「えつ? それってかなり前じゃなー?」

「最近それが大きくなつたつて噂よ」

「マジで?」

澪は省吾の腕を叩く

「ねえ、石神井公園寄つて行こひよ」

「えつ、今日?」

省吾は昨日愛香と歩いた場所を、今日澪と歩くのははじめて気が引けた。

「何か用事とかあるの?」

「いや、別にないけど……」

省吾は澪に腕を引かれるように、石神井の駅を降りた。

近場で一番大きな公園と言えば、おそらく石神井公園だろ。昔、他の女性と歩いた事も在るのは事実だ。

それでも、確かに好きで付き合っていた昔の女性よりも、愛香と歩いた記憶の方がなんだか思い出深いのは何故なのか。単に、時間の経過の順位がそう感じさせるのだろうか。

省吾は池の周囲を歩きながら水面の様子に目を輝かせる澪を愛おしいと思つ反面、その無邪気さが何だか愛香の内面の一部とオーバーラップしてしまつ。

『じゃあお前、澪ちゃんの事は何でも知つてんの?』裕也が今日教室で言つた言葉が頭の中を過つた。

確かに判らない。そして愛香が自分に友達以上の好意を抱いていた事さえ昨日気付かされたのだ。

そして付き合っていふと思つてゐる澪の事も未だに判らない事がある。

普通それは考え方や性格など内面に関しての事がが多いのだろうが、彼女の場合は少し違う。もちろん、何かの病気を抱えた娘と付き合うのは初めてだからその心理の奥まではなかなか理解する事は出来ない。

それでも、少なくともキスをする間柄の人間に何時までそれを躊躇にしておくつもりなのだろうか……その間に完治してしまうような病気なのだろうか。

省吾はめがね橋の上から手招きする澪の姿に気付いて、慌てて傍に駆け寄つた。

「あれってワーニーじゃない？」

「えっ？」

省吾は澪の指差す方に目を凝らした。

岸辺に生える水草の陰に、確かに何かの黒い影が浮かんでいる。マジか……確かに以前ここでワーニーの田撃騒動があつたのは事実で、連日ワイドショーや報道陣がうろついていたのをわざわざ見に来た事が在る。

省吾は澪の手を引いて、今まで歩いて来た対岸へ渡ると、黒い影の見た場所へ駆け寄つた。

駆け出して直ぐにハッと振り返る。

……愛香のつもりで思わず駆け出しが、澪は走らせて大丈夫なのだろうか。

しかし、心配は無用なようで、彼女も普通に駆けてゐる。確かに昨日の愛香のように全力に近いスピードで走つているわけではないが、小走りは何の無理もなさそうだ。

黒い影の見た辺りで立ち止まると、水草を覗き込む。

「いる？」

澪は完全に何かがいると思つてゐるようだった。

「いや、よく見えないよ

「石投げてみようか

澪が言った。

「逃げちゃうんじゃないかな?」

「動けば何かがここにいるって事でしょう？」

「ああ、なるほど」

別にワニを捕まえに来たわけじゃないのだから、至近距離で何かが見れればそれでいいのだ。

澪はベンチの横の大きな岩に手を添えた。

「そんの持ち上がんないだろ」「

「ダメ?」

「それに、そんな大きな石みたいなの放り投げたらみんな振り向くよ。そんなのちょっと恥ずかしいだろ」

省吾はそういうて、草むらに落ちていた拳よりも少し小さな石を一つ拾うと、一つを澪の手のひらに乗せた。

「どうちが先に投げる?」

澪は目を輝かせるように訊いた。

「じゃあ、澪がやれよ

澪は省吾の腕に掴まって、池の畔はを覗き込むように身体を伸ばすと、思い切って石を放り投げた。

ジャポン！ と意外と気の抜けた音だけが水面に響いた。

省吾は澪の手を掴んだまま彼女に寄り添うと、一緒に池の中を覗き込んで、自分が持っている石も放り込もうと左手を振りかざした。その瞬間、ズバッと水面が大きく揺れて、大きな影が一瞬水中を動くのが見えて飛沫が上がった。

「きやつ

澪は思わず省吾にしがみ付いて、彼も後ずさりをする。

「いるよ、何かいる

「あ、ああ。ワニなのか……

省吾は澪を抱きしめたまま、池の水面に出来た大きな波紋を見つめていた。

何かがあそここの池にいるのは確かなのだろう。しかし、一人にはそれを確かめる術などなかつたし、何かがいる事実を見ただけで気持ち的には充分楽ししかつた。

公園を出て駅へ向う頃には緋色の空が上空を埋め尽くして、西に広がる雲に太陽は隠れていた。

住宅街の横を通つて駅に続く道で、省吾はロータリーの人影に目を止める。

改札を抜けてきたのは愛香だ。

どこかで遊んできたのだろうか。

暮色の景色の中、駅の周辺は街路灯や照明が多い為、彼女の姿ははつきりと見えた。

省吾は愛香がこちらに気づかない事を心の何処かで祈りながら、澪と繋いだ手は離せなかつた。

いきなり離したら、澪が不自然に思うだろつと考えた。

ちょうど自分の右手を繋いでいたので、省吾は時計を見るふりをしてさり気なく澪との手を一端解く。

愛香が商店街の路地へ入るその時、街路灯に照らされた省吾たちの姿を彼女は見つけてしまつた。

省吾は、自分を確かに見つめる愛香の視線を捉えて、踏み出す足がおぼつかなくなる。

しかし、彼女は立ち止まる事なくそのまま直ぐに視線を向き直して、歩き去つていつた。

一瞬合つた視線は無言のまま、まるで何分もの長い間見つめられているような気持ちだつた。

彼女が入つた商店街の路地は買い物客が取り巻いていて、愛香の姿はもう何処にも見えない。

「どうしたの？ 何か買つ物在る？」

商店街へ続く路地を見つめる省吾に澪が言った。

「……何でもない、せこ」

## 【19】暁

裕也は学校帰り、阿佐ヶ谷のバス停で中学時代の女友達に会った。

「なんだ由奈、久しぶりじゃん」

相田由奈。小学校から知っている彼女は中学の時からカッコも行動も派手だった。

とりあえず高校には入つたが、願書と金を出せば入れるような学校で、それは彼女にとつては女子高生という肩書きの付いた楽園の切符のようなものでしかない。

「ああ、裕也。あんたまだシャバにいたんだ」

冗談でも彼女にそんな事を言われる彼は、素行のいい中学生でなかつたのは確かで、それでも、ちょっと自己主張が強い為に時折いざこざを起こす以外は、いたつて普通の中学生だった。相田由奈に比べれば。

商店街のファーストフードに入つて久しぶりの会話に盛り上がる。  
「あんた北高行つたんだっけ」

由奈は黒く縁取つた目をクリクリさせて笑つた。

「ああ、俺にしちゃ勉強頑張つたぜ」

「今は？」

「それがさ、下には下がいるもんだから、何とかドンジリにはならずには済んでるよ」

「マジで？」

由奈はげらげらと大きな口で笑うと、ジャラジャラと沢山の腕輪を着けた手をテーブルに出して頬杖を着いた。

「そう言えばさ、この前ウチのオネエチャから変な話を聞いたんだ」「なんだよ」

「なんかあ、原因不明の病気を治す為に、一度殺してまた蘇えらせるんだって」

「なんだよ、それ」

裕也はアイスコーヒーを飲みながらバジルポテトを摘んだ。

「ほんとだつて。ウチのオネエチャ、病院で看護婦やつてんだもん」

「お前の姉貴、看護婦なの？」

「この女の姉は昔、小学校の頃に見た事がある。彼女と六歳違いで、やけに大人に見えたものがやたら派手好きで、その流れから考えると今の由奈の姿は至極当然だ。

「なんかあ、その病院の娘が治療不可能な病気で、一度死ぬと病状が無くなるんだって」

「死んで蘇えらせるなんて、出来るのか？」

「ほら、心臓停まつた時にすべドーラマとかでバチンッてやるじゃん。

電気みたいな」

「電気ショックか？」

「ううう、アレで停まつた心臓をまた動かせばいいらしいよ」「動かなかつたどうすんだよ」

「そんなんの知らないよ。動くようになつてるんでしょ」「由奈は面倒くさそうにそう言つて、携帯電話を開いた。

「何処の病院で、そんな事してんだよ」

「そこまではしらないよ。ただの噂だもん」

由奈は再び大きな口で笑うと、次の楽しい話題に移つた。

\* \* \*

箕輪忠典みのわだちゆうじんは大学病院の最上階に在るレストランで相田美智子と食事をしていた。

一階の奥に従業員食堂もあるが、お昼時間を大幅に過ぎた場合はレストランの一区画で食事をする事ができる。

「で、ミツチャンがいた時は、かなり深刻な状態だったんだね」

「うん。その娘、かなり酷い様子で、入院はしないけど、毎日病院

に來てたのよ。」

美智子はそう言いながらカルボラーナをホークに巻く。

彼女はこの病院の内科に勤務する看護師で、外科の箕輪とは飲み会などでしか親しい面識は無かつたが、看護師伝に彼女が以前働いていた病院での事を耳にしたのだ。

「で、今はその娘、全然病院に来てないのかい？」

「そつらしいよ。」この前久しづりにそこに勤務する友達とご飯食べたら、最近はめつきり見かけないって

「亡くなつたとかじやないのかい」

スペゲティーを頬張る彼女を前に、箕輪はカツサンドを齧る。

「だつて医院長の娘さんよ。亡くなつたら判るでしょ」

「そりやそだな……」

箕輪はそう言つてコーヒーを啜る。

美智子はこの大学病院に来る以前、個人医院で働いていた。彼女がいた病院の医院長の娘は血液に関する難病に掛かっていた。

治療に携わつていない彼女にはその詳細は判らないが、治療方の無い珍しい病気と言う事は伝わっていた。

美智子がその病院に勤務していたのは、医院長の娘が小学校の時で、ほとんど毎日病院に顔を出しては薬の投与と検査を繰り返していたらしい。

その後美智子は今の大学病院へ転職した為、その後の少女の事は判らなかつた。

しかし、数日前に以前の同僚と久しづりに夕食を共にして、何気ない会話の中からその少女の話を久しづりに聞いた。

「なんかね、最近あの娘、元気みたいよ」

以前の同僚である清美は、食事の後で入った居酒屋でぬる缶のぐい呑みを片手に言つた。

「あの娘って？」

「医院長の娘さんよ」

「ああ……」

職業意識の強い彼女は、看護師としての評判は上々だが、自分に関係ない患者の事はあまり気にならないタイプだ。

「でも、おかしいのよね」

「何が？」

「だつて、完全な治療法も無いまま、一時は昏睡になつたら終わりとまで言われて毎日血液検査をしてたのに、急によ」

「何か、いい薬剤が見つかつたんじゃないの？ 医者の伝で、未認可の海外医薬とか？」

「それにしてもね……最近はほとんど病院にも来ないのよ」

美智子の元同僚はマコを潜めると、小声になつてテーブル越しに身を乗り出した。

「なんか、自宅で治療してるらしいのよね」

「自宅で？」

「ほら、機器メーカーの園辺さんでいたでしょ。彼のところで、医院長の自宅に心拍計や除細動器やら何やらをこつそり納入したって」<sup>やのべ</sup> 美智子は清美との会話をそのまま箕輪に話して聞かせた。その時、箕輪が彼女の話に口を挟む。

「医療機器を自宅に？」

「ええ、そつらしいよ」

美智子も彼の問いかに頷く。

「何のために？」

「だから、自宅治療でしょ」

「心電図や除細動器まで？ だつて薬剤とかはどうする？」

「だつて、医者の家よ。何考えてるかなんて解らないわ」

箕輪は再びコーヒーを飲んで息をつく。ほんの少しの間思案を巡らせていたかと思つと、伝票を掴んで徐に立ち上がつた。

「その病院つて、確かに南澤医院なんだね」

確認する彼に向かつて、コーヒーを啜りながら美智子は頷いた。

「自分が働いていた病院だもの、間違えないわ」

「有難う、今度呑みにでも行こう  
そう言つた箕輪は足早にレストランを出た。

## 【20】暗闇の眞実

恵比寿にある高級イタリアレストランに、愛香の姿はあった。

彼女はフランス料理よりイタリアンが好きだつた。

クリーム色の壁には、シチリア島の大きな風景画が間接照明に照らされている。

「ありがとう、かなり参考になつたわ」

彼女は田の前にいる箕輪忠典に言った。

蘇生して治療するといつ噂の、新しい情報があるからといって、彼に呼び出されたのだ。

「いや、たまたま看護師にそう言つ事に詳しい娘がいて……でも、どうしてそんな噂にこだわるんだい？」

箕輪は白ワインを口にする。

彼は、以前南澤病院で働いていたといつ看護師から聞いた話をひと通り愛香に話して聞かせた。

「うん。だつて面白そじやん」

愛香はいかにも好奇心旺盛な高校生らしさを強調するかのように、悪戯っぽい笑みで彼をみると、普段よりも長きてくつきりした睫毛を瞬きさせた。

「女子高生の考えは解んないな」

箕輪はそう言つて肩をすくめると

「また、食事に誘つてもいいかい？」

愛香は無言で瞳を細めると、口角を上げてみせる。返事はしなかつた。

箕輪はまだ二十九歳と外科医としてはまだまだ若い方だが、愛香の父親である外科部長にも認められるほどの腕前で、執刀する数は現在院内一と言つてもいい。

高級外車も乗っているし、顔もまあまあ。白衣を脱げば、実年齢よりも三つは若く見える。

それでも愛香には今ひとつ興味の湧かない存在だった。父親の近くにいる為、彼とは自然に親しくなったが、今回のような頼み事でもなければ一人きりで食事などしないだろうと思った。

まだ、渋谷で知り合うヒップポップ崩れのノリノリの連中とジャンクフードを齧る方が楽しいだろう。

愛香は軽く頬杖を着いて、久しぶり着たミニ丈のワンピースから長く出た細い脚を、そっと組み直す。

ガラス張りのビルは互いに光を映し出して夜の街を煌々と照らしている。

黄色いポルシェボクスターのサイドシートに、愛香は脚を揃えて座ると、屋根の無い景色に光の粒を見上げた。

「何処か寄つてくかい？」

箕輪はチラリと横目で愛香を見た。僅かに巻き込む風が、彼女の柔らかな髪をたなびかせている。

「えつ？　いいよ。明日も学校あるから」

「前は平日でも遊び歩つてたんだろ」

「前はね。最近はそんな元気ないよ」

愛香は箕輪を見ずに、フロントガラスの先にある眠らない街の灯だけを見つめていた。

新宿を抜けて甲州街道を走ると高層ビル群は消え、中央には首都高速、歩道には街路灯が連なって街路樹と共に流れる景色に次々と消えてゆく。

環七通りの三車線道路を加速して、オーバーパスを何個か越えると青梅街道に入った。

右手に少し古いタイプのラブホが在る。モーテルという看板が掲げられて、通り沿いの入り口に大きなスダレの下がっている造りだ。愛香の視界にもそれは入っていたが、全く無関係な景色として捉えていた。

しかし、箕輪は素早く車を減速せるとそのままのスダレを潜つた。

「ちよっと、何やってんの？」

次第に落ち着いた暗がりに変わって行く景色の流れを、ただ何となく見ていた愛香は、驚いて声を上げる。

「いいだら、少しぐらい付き合つてくれても」

「なんで、噂話聞いたくらいでこんな所に付き合わなきゃいけないわけ」

「昔はどうせ遊びまくつてたんだ」

箕輪は愛香の身体を強く引き寄せて抱き着くと、彼女のシートベルトのバックルを外した。

「ちよっと、止めてよ」

彼が無理やりキスをしようとして、愛香は慌ててそれから逃れようとした身體をくねらせた。

「ほんとムリだから」

そう言つて両手で箕輪の顔を掴んで押しのける。

「あの噂は本当だよ」

「え？」

愛香の身體が停まつた。

「裏をとつたよ。あの病院の娘は臨死と蘇生を繰り返す事で生き延びてる。生きる為に死んでいるんだ……それがキミとビリコの関わりなのかは知らないけどね」

箕輪の顔を、愛香は唇を震わせながら見つめていた。

「だけど、あそここの医院長は学会にも顔を出すほどの医者だから下手な詮索はできない。おそらく真相を知つてゐる連中は他にもいるかもしれないよ」

愛香は後ずさつするようにボクスターの小さなドアを開けたと、後ろ向きのまま降りた。

「家まで送るよ」

箕輪は立ち上がった彼女を見上げた。

「こいよ。ここまでで」

「家までまだ大分あるよ」

「いいつたら、いいよ」

愛香は駆け出して、ゴムラバーで出来た大きなスダレを払いのけながら街道の歩道へ飛び出ると、しばらく夢中で走った。

100メートルほど走つてから早稲田通りへ抜ける路地を入つて再び走る。

閑静な闇にアスファルトを叩くローヒールのパンプスの音だけが染み込むように、何処までも響き渡る。

大きく肩で息を着きながら住宅街の真ん中で突然立ち止まると、その静寂の中で溢れ出る涙が何故だか止まらなくなつた。

善人と思っていた箕輪に突然迫られたショックなのか、人間の裏側を久しぶりに垣間見た恐怖なのか……それともまだ面識さえない澪を哀れに思う零なのだろうか。

しかし、そんな澪を思う省吾の気持ちを考えるとそれが何処か不憫で、冷たい杭を胸に深く突き刺されたような痛みを感じたのは確かかもしれない……

「ショウ……どうして彼女を好きになっちゃつたの……」

走つた為に乱れる呼吸に混ざつて嗚咽が漏れるのを必死でこらえながら、街路灯の照らす電柱に手を置いて、愛香はひとり肩を震わせた。

## 【2-1】上り坂

「しかしあんた、部活に励んでるわけでもないのによく食べるわね  
少し遅い夕飯と一緒に食べていた母親が、省吾の食べっぷりを見て  
言つた。

「何にもしなくたつて腹は減るさ」

「バイトでもしたら?」

「ああ、でも夏のバイト代がまだ残つてゐし、冬休みまでには考  
え  
る」

省吾はそう言つてから「おわり」

母親は呆れた顔で息子の茶碗を手にした。

食事が終わればサッサと自分の部屋へ戻るのが省吾の習慣だつた。  
母親が一人で淋しくないだろうか……時折そんな事も思うが、逆  
に高校生にもなつて母親とリビングで団欒するのも何だか照れくさ  
い。

省吾は部屋のテレビを着けると、ベッドの上に横になつた。

すると、携帯電話の着メロが鳴る。

「もしもし」

「…………」

省吾が電話に出ると向こうは黙つている。「オオオシと車が走る騒  
音が聞こえた。

「愛香だろ?」

「今、暇?」

愛香の声がか細く聞こえる。

「な、なんだよ。いきなり」

「暇かなあ、て思つて」

「別に忙しくはないけど……」

再び「オオシ」とトラックか何かが走る音がした。

「……お前、何処からかけてんだ？」

「ちょっと外から」

「外つて？」

「外は外よ」

一瞬の沈黙が二人の電話機の間に広がって、省吾はなにげなくその向こうの夜気が発する微かな音に聞き入っていた。

「迎えに来て欲しいんだけど……」

何時もの彼女の声とは違つて、愛香の声は消え入りそうだった。

「迎えつて……何処に？」

少しの間があった。自分の場所が何処なのか愛香の探している気配が伝わる。

「下井草……かな」

「下井草？ 何やつてんだよそんな所で」

「いいじゃん。環八真っ直ぐで来るでしょ」

「そりや真っ直ぐは真っ直ぐだけどさ……俺、チャリしか無いんだぜ」

「いいよそれで」

「いいよつて、動力が俺だぜ」

「じゃあいいよ、他当たるから」

そう言つてプツリと電話は切れた。

「何だよ、何であいつ歩きでそんな所にいるんだよ」

省吾はそう呟いてから溜息をひとつ零すと、切れたばかりの着信履歴にリダイヤルした。

夜の環八通りは意外と車が空いている。だからと言つて車道を走るわけでもない省吾が早く目的地へ着けるわけでもない。

「こんな時間に出かけるの？」

出先に背中から聞こえた母親の声に省吾は

「ああ、なんか学校の友達が急用だつて」

そう言つて玄関を出た。

優等生ではないが、息子を信頼している母親は「夜だから氣をつけてね」と、特にそれ以上追求もしない。

省吾もそんな母親に「ああ、判つてる」と、悪びれる様子も無く応える。

水銀灯の連なる明るい歩道をA-T-Bで駆け抜けると西部新宿線の路線を越えて早稲田通りに入る。

直ぐにコンビニがあつて、雑誌を立ち読みする愛香の姿が窓から見えた。その姿は、どことなく切迫したさつきの彼女とは打つて変わつて、のんびりと暇を潰すよつた雰囲気だった。

息を整えながら、思わず省吾は溜息をつく。

彼が外からガラス窓を叩くと、彼女は顔を上げて微笑み小さく手を振る。何だか判らない不安と共に全力で自転車を飛ばして来た省吾は、思わず拍子抜けして肩をすくめた。

「はい、差し入れ」

コンビニを出て来た愛香が省吾に冷たいスポーツドリンクを差し出した。

「あ、ああ」

何だか未だに事態が飲み込めない省吾はそれを受け取ると、とりあえずキヤップを開けて勢いよく口へ流し込む。

ふと彼女のこじゅれたサーモンピンクのワンピースに目を留めると「何やつてんだよ、こんな所で。しかも何だかよそ行き風?」

「デート」「デート?」

省吾は歩道から辺りを見渡して「相手は?」「逃げて来た」

「逃げて來た?」

益々省吾には判らない。

「さあ、出発?」

愛香はそう言つて、省吾の自転車の後ろに立ち乗りして、彼の背

中をポンポンと叩いた。元々荷台のない彼の自転車は、立ち乗りしか方法は無い。

省吾は何だかぶつぶつと言いながら、自転車をヒターンさせると来た道を戻った。

環八通りから路地へ入つて上石神井を抜け愛香の家に向つ。

「がんばれ、もう少しだぞ」

後ろで愛香が笑つた。

「お前な、全部俺の動力だぞ」

緩い下りの後は緩い上り坂が待つてゐる。省吾はそれに備えてギヤを下げる。

「うん。ごめんね」

愛香は前かがみになつて、彼の背中にそつと頬を当てる。はためく彼女の髪の毛の香りが微かに漂つた。

「いや……別にいいけど……」

省吾は背中に感じる愛香の頬の温度を感じながら、石神井の緩い坂道を駆け上がる。

「あんまりくつつくなよ

「だって、風がちょっと寒い」

「背中に口紅とか着けんなよ……」

## 【22】文化祭1（前書き）

### 【中間あらすじ】

電車で倒れた澪を助けた省吾は、以前から心を惹かれていた彼女と親しい関係になつてゆくが、彼女には省吾の知らない秘密がある……

臨死させる難病の治療…愛香は父親の勤務する病院で妙な噂を聞き、その真相を探つた。そして彼女の胸騒ぎは当たつていた。

省吾に思いを寄せる愛香は、澪を愛する省吾を不憫に思い、涙を隠しながら彼の背中にそっと頬を着けた。

## 【22】文化祭1

キャンディーレッドに染まる雲の群れが、音も無く静かに浮かんでいる姿を見上げて、微かに漂うサツカリンの匂いを感じる。

それは、果敢なげに甘く切ない死の香り。

逆光が眩しくて視線を少しだけ動かすと、緋色の虚空に浮かぶシヤンパンゴールドの三田月がクレーターを露に月影を落とす。

地上は真っ白な砂丘に覆われて、二つの光に照らされた自分の影は何処にも無い。

業火に包まれた太陽と、水の精が羽ばたくような涼しげな月が共生するこの世界で、1分20秒の静寂に佇む。

生と死の境界線は限りなく曖昧で時の流れを感じない。

その永遠の中で、再び全身に息吹が沸き起くるのを、ただ静かに待つのだ。

甘い死の香りを感じながら。

年に一度、一般の観覧者が校舎の中を普通に歩き回る光景は何とも異様で、小中学生がざわめきながら廊下を行き交う姿は普段は絶対にありえない。

文化祭の一般公開日。省吾の通う学校は、体育祭は一般公開されないので、文化祭が一般客を唯一校内に招き入れる行事だ。

「裕也」

体育館の横に設置された屋台村の人垣から声がして、鉄板焼きそばの屋台で汗を流していた裕也は顔を上げた。

「裕也」

再び声が聞こえると、人垣の中から相田由奈の派手な顔が現れた。

「うわあ、随分派手なのが登場したな」  
横でキヤベツを切つていた省吾は小さく声に出すと、微かな失笑で裕也を見た。

「お前、いまあれと付き合つてんの？」

「バカいうな。ありや中学のダチだよ」

由奈は同じように田の周りを真っ黒にした女友達をひとり連れて、裕也の屋台に近づいて来た。

「なんだよ、来るなら言つてくつやあ良かつたのに」

「今朝思い出してさ」

由奈は真っ赤な唇から白い歯を見せて笑つた。

「ちょっとぶらついてくれば」

省吾が気をきかせてそつ言つたが、裕也はイマイチ氣乗りしない様子で

「あ、ああ」

「なんだよ、ダチなんだろ」

「そつだけども、アイツと校内歩くのはちょっとな……」

省吾は裕也の気持ちもなんとなく判つた。

いくら派手な娘好きの裕也でも、それは限度がある。相田由奈と紹介された娘とその友達は明らかに裕也の趣味の限度を越えている。それでも仲の良かつた中学の同級生だから、外で会つのは気にならないのだが。しかし、自分の通う学校内と一緒に歩くのはまた話が違うという事だ。

上手い具合にお客が立て続けに来て、一端はその状況から逃れた裕也だつたが、再びお客が引いて暇になると

「ねえねえ、少し学校の中案内してよ」

由奈が言つた。

「観念して行つて来いよ」

省吾はひと事のように笑つて言つた。

渋々エプロンを外した裕也は、由奈とその友達を連れて、校舎の方に向かって人混みに消えた。

「あら、ショウヒトリ？」

裕也が消えて間も無くすると、省吾の屋台に愛香が来た。

「ああ、今裕也はちょっと出でる。友達が来てわ」

「じゃあ、あたし手伝ってあげようか？」

彼女は妙に明るい笑顔を見せた。

「別にそんなに忙しくもないぜ」

「いいじゃんいいじゃん」

そう言つて裕也のエプロンを着けて屋台のカウンターに楽しげな愛香が入ると、やはりお客様はげんきなもので、あつといつ間に大学生や同年代の男が集まつてくる。

「ねえねえ、何年生なの？」

「三年です」

「名前は？」

「ひ・み・つ」

「これつて、彼女が焼いたの？」

「そうですよ」

「いいなあ、彼氏とかいるの？」

「さあ、どうでしょ?」

愛香が店頭で焼きそばを売る間、省吾はひたすら具の準備をする。それを取つて愛香が鉄板で調理して、省吾が透明のパックに詰める。

男性客は愛香にお金を払い、愛香から焼きそばを受け取りたがるから、省吾は完全に裏方に回る。

「なんて奴らだ……」

省吾は高校生以上、特に大学生っぽい客のナンパじみた客に呆れて思わず溜息をつく。

「いいじゃん、売れれば。けつこついに線いくかもよ。この屋台」

愛香はそう言つて、小声でぶつぶつ言いながらキャベツを切る省吾の脇腹を突くと、再びお客様に愛想を振り撒く。

「お兄さん、ぐださいな」

屋台の横から声を掛けられた省吾は、ハツとして顔を上げた。

見慣れたお下げでないのは休みの日は何時もそうなのだが、人波から身を乗り出す彼女があまりにも違う雰囲気に見えて、省吾は手に取ったキャベツを箱の中に落つことした。

「頑張ってるね。凄い混んでるし」

澪が、しゃがんでいる省吾を屋台の仕切り板越しに見下ろした。

「あ、ああ。愛香の……その娘のお陰でな」

省吾は愛香を澪に紹介するべきか一瞬戸惑いを感じた。

「始めてまして、神崎愛香です」

愛香は、客の合間をぬって、すかさず自己紹介すると小さく頭を下げて笑った。

「南澤澪です」

屋台の縁に手を掛けて彼女も笑う。

省吾はしゃがんだまま、少し高い位置で交わされる女同士の初対面を交互に見つめた。

「ほら、ショウ、早くキャベツ切つてよ」

ぽんやりと一人を眺める省吾に愛香が催促した。

「あ、ああ。判つてる」

省吾は洗つてあるキャベツの葉をまな板に乗せると、ぞくぞくと切り始めた。

## 【23】文化祭2

昼の時間に近づいたせいか、屋台村は人の出が増える一方だった。愛香は鉄板で次々に焼きそばを焼くが、お金の受け渡しもあるし何時までも話かける大学生もいる為、何だか何倍も忙しく感じる。

「あたしも手伝おうか？」

頬につけたファンデーションを伝う愛香の汗を見た澪が、屋台の横から見かねて声を掛ける。

「えっ？」

省吾は少し後ろから思わず声を出したが、澪は屋台の後にまわって来ると、丸椅子の上に在った予備のエプロンをサッと頭から被つた。

それが良かつたのか悪かつたのか、省吾は横でキャベツを切りながら少々困惑してそれらを見つめていた。

大きな鉄板で焼きそばを焼く愛香と、その隣で次々に容器に詰める澪。

もはや男性客は澪でも愛香でもどちらでもいいと言つカンジで集まっている。

女子は、校内で教室を使つた喫茶などに参加している娘が大半で、今回の文化祭の一押しは、三年一組と二年四組で競合しているメイド喫茶らしい。

それに反して、屋台村の出店は男子生徒が中心なのだ。

その中にあって店頭に一人も女子が立つこの屋台には不順な動機ではあるが、男性客が自然に集まっていた。

省吾はもはや自分の手には負えないお客の一ースを、一步引いた位置から眺めていた。

ついには、周囲の屋台を出している仲間も、暇を見ては省吾の屋台に顔を出す。もちろん、見慣れない笑顔を振り撒く澪に声をかける為だ。

「うわっ、すげえ混んでんじゃん」

裕也が戻ってくるなり、自分の屋台周辺の人混みを見て仰天した。  
しかも店頭に出ているのは女子一人。そしてその一人は私服だ。  
裕也は澪のお下げを解いた姿を見た事がないので、その長い髪の娘  
が誰なのか最初は判らなかつた。

裕也は、後ろで黒子のように働く省吾に近づいて声を掛けよつと  
した時、愛香の隣の娘が澪だと初めて気づく。  
「わっ、み、澪ちゃん。何やつてんの？」

「あ、久しぶりー」

澪は一瞬手を振るが、直ぐにお客の方を向いた。

「遅つせえよ、裕也」

省吾はキャベツの葉を剥がしながら言つた。  
「なんでうちの屋台に澪ちゃんが立つてんだよ  
「そんなの成り行きに決まつてるだろ」  
「ていうか、愛香までなんでいるんだ？」  
「それも成り行き」

省吾はそう言つて、自分の持つていたキャベツを裕也に渡した。

一時間ほどすると、だいぶお客様が引けてきた。体育館でのバンド  
演奏などが始まる時間のせいもある。

「おい、愛香。お前演奏何時からだ」

省吾が声をかけた。吹奏楽部OBも体育館で演奏がある。

「一時だから、まだ大丈夫だよ

「じゃあ、昼飯食えよ」

「あ、あたし弁当持つて来たよ」

澪が言つた。

「あ、でもあたしも持つて来てるから」

愛香はそう言いながら、エプロンを外すと「ちよつと取つてくる

ね」

「ショウちゃん、あたしのバックにお弁当は入つてるから食べて」

愛香の姿を見送った彼女は、代わりに鉄板の前に立つた。

「お前、なんて羨ましい奴なんだ」

裕也が叫んだ。

「お前だつて、ラブラブで何か食べて来たんだ」「

「ああ、ケーキセットを二人分の値段でな」

省吾が弁当を広げる頃、愛香が息を弾ませて戻つて来た。屋台の後ろに置いた、本当は縁台の長椅子に腰掛けて、愛香も自分の弁当を広げる。

横で澪の手作り弁当を頬張る省吾の姿に、僅かながら複雑な思ひが過る。

「なんか多くねえ」

彼女の弁当を見た裕也が言った。

「み、みんなで食べれるよつよ。気が利くでしょ

「さすが愛香」

裕也がすかさず愛香の弁当を摘んだ。

「お前は後だ。とりあえず店に立てよ」

省吾に言われた裕也は渋々、というか少し照れながら澪と肩を並べて屋台の店先に立つ。

愛香はその姿を見る振りをして、澪の後姿をマジマジと見つめていた。

……七部袖のカーデガンと花柄のスカートはおそらくマックスマーラ。カジュアルにさらりと着てているけど、どっちも一着4万円前後はする洋服だわ。

艶やかな黒髪は自分とは正反対で、普段三つ編みにしているせいか、下半分が微妙にウェーブしている。それが何故か、清楚な中に漂う微かな色氣にも感じた。

南澤澪……彼女が抱える病気は本当にそれほど深刻なのだらうか

……本当に臨死と蘇生を繰り返して生き長らえているの？

愛香の思考が、この前聞いた算輪の言葉と共に交錯した。

「髪、三つ編みじゃないと、けつじつ色っぽいんだね」

「そ、そっ？」

裕也が澪に妙な事を言ひるので、省吾は後ろから梅干の種を力いつぱいふつけた。

「痛つてえ」

「どうした、愛香。ほんやりして」

省吾に声を掛けられて、箸を口に着けたまま澪を見ていた愛香は慌てて振り返った。

「えつ、うつん。何でもな」

愛香はもう言つて出し巻き玉子を口に入れると

「あんたにはもつたいないと思つてね」

「そ、そりがな」

省吾はそう言つて立ち上がると、澪の横に立つた。

「澪も少し食べろよ。俺がやるから」

「えつ、ショウちゃん出来るの？」

「あんなあ、元々ここは裕也と俺の屋合なの」

「あ、そりがな」

澪は皿を出して笑つと、愛香の隣に腰掛けた。直ぐに女同士で何かを話し始めると、キーの高い笑い声が聞こえた。

「なんだよ」

省吾は横目で自分を見る裕也を見返した。

「いや……そりがな。元々男所帯だったんだよな。」「うう」  
裕也はもう言つて残念そう、軽く息をついた。



## 【24】文化祭3

「よう、裕也。あれ、省吾は？」この屋台メチャ混みだつて聞いたぜ」

クラスの斎藤健一と沼田徹がヒヤカシに来た。昼時に屋台村を通りかかった連中に、この屋台の混みようを聞いたのだらう。

「おお、健一、徹。ちょうどいい、お前らもちょっとやってみないか？」

「ああ？ やるって？」

裕也の言葉に健一が返した。

「屋台だよ。ほら、二人共中に入れよ」

裕也は一人を誘つて、有無を言わさず屋台の中に引き込んだ。

もう昼の時間もだいぶ過ぎたので、人出もまばらになりそんなに忙しくは無いが、とにかくスタッフで作った分は完売しなければならない。

それでもポツリポツリとはお客様が来るので、完売も時間の問題だらう。

「なんだよ、省吾は何処か行つたのか？」

「ああ、今散歩に行つてる」

「そう言えば愛香は？ それに見知らぬ可愛い娘がいるつて聞いたんだけど」

見知らぬ可愛い娘というのは、当然澪の事だろう。

この学校の生徒、特に省吾と裕也を知る者にとって、どうして二人の屋台に私服の知らない娘が立つてお客様とやり取りしているのか、非常に興味をそそる光景だつたに違いない。

沼田が促されるままにエプロンを着けたのを見た裕也は

「ああ……残念だけど、その娘はショウの専属なんだ」

省吾は澪を連れて体育館に来ていた。

愛香が出る吹奏楽部の演奏がちょうど始まつた。

「へえ、愛香さんてフルート上手だね。音色が隣の人と全然ちがう」

省吾の隣でパイプ椅子に腰掛けている澪が言つた。

「えつ？ そんなの聞き分けられるの？」

省吾には、愛香のフルートの音色なんて他の音に混ざつて全然聞きとれない。楽器に口を着けているから吹いている事は判るが……それはフルートだけのパートになつても一緒で、三人いるフルート奏者の音はただの心地よいハーモニーでしかない。

「あ、あたし、少し変わつてるから」

「澪も楽器やつてたの？」

「うん。ピアノを中学まで習つてたけど、それとは違うみたい」

「耳がいいんだろ」

「耳じゃないかも」

澪は正面の舞台を見ている視線を、チラリと意味ありげに省吾に向けて笑つたが、直ぐにそれを舞台に戻した。

その時、愛香のフルートソロが少し入つた。

指揮者の指揮棒の動きに合わせて揺れるように、穏やかに響き渡るそれは、確かにキレイな音色だ。クラシックや管弦楽を聞きなれない省吾にもそれはハッキリと判る。

「愛香の事だから、どうせ高いフルート使つてるんだ！」

彼は両脚を組み直すと、両腕を胸の前に組んで呟くよつと言つた。

「じゃあ、あたし帰るね」

夕刻が迫る頃、文化祭に訪れた人波は消えて、残りの僅かな一般客も出口へ向つて歩いていた。

終始賑やかだった校内があらゆる場所は、荒涼とした夢の痕と化

す。

体育脇で屋台の片付けまで手伝つた澪は、他の三人に手を振つた。

「最後までいて、ショウと一緒に帰れば？」

愛香の言った言葉に、省吾は思わず彼女を振り返る。

愛香なりの女同士の気遣いなのだろうかと、彼は思った。

「うん。でも、クラスメイト同士の用事もあるだろうし。あたしは

何時でもショウちゃんに会えるから」

澪は意味深な笑顔を愛香に一瞬向けると、今度は省吾に田を配る。

「じゃあね」

彼女は小さな手を何度も振りながら、閑散とした屋台村の跡地を去つていった。

「澪ちゃんって、いい娘だなあ」

裕也がポツリと呟いた。

愛香は澪の視線が何だか気になつて、彼女が消えた裏門へ続く体育馆の先を、しばらく眺めていた。

「さて、とりあえず点呼に行くか」

省吾がそう言って、校舎に視線を向けた。部活のイベントのないものは、教室へ戻つて定時まで学校にいた証拠を、専用のノートに残さなければならない。

部活のイベントがある連中は、それぞれに出欠を取つているのでその必要がないのだ。

「その前に、売り上げ届けようぜ。小銭が多いから重いよ」

裕也が、布で出来た専用の袋を手にぶら下げていた。

「ああ、そうか」

裕也の後から歩き出す省吾に、愛香が駆け寄ると

「ねえ、澪ちゃんて、勘がいいとかあるの？」

「なんで？」

「う、うん。べつに……」

愛香はそう言ってから、しばらく黙つて一人の後を付いて行つた。あの視線とあの言葉。まるで自分と省吾が少しほ一緒にいれる時

間を作つてあげる。とでも言いたげな雰囲気は、愛香の中で静かな戸惑いに変わっていた。

……あの娘は、省吾を想うあたしの気持ちに気付いているのだろうか？

愛香は、省吾や裕也とは全く違う意味合いの興味を、澪に抱いていた。

## 【25】戯れ

低く立ち込めた鉛色の厚い雲は完全に太陽光を遮り、まるで地上全体を押し潰しそうなほどに重く広がっていた。

「何時まで続ける」

南澤病院の医院長室で、大きな漆塗りの机の向こう側に腰掛けた南澤正蔵が、ザラついた声で言った。

身なりはそう大きくないが、個人病院をここまで大きくして来た自信と貫禄が、全身から湧き出でている。

未だに自身も執刀を受け持つ彼には、外科医としても一流の誇りが在るに違いない。

それは、額や耳尻の小さなシワにさえ感じる。

「俺は、澪が生きるなら何度でも、何時まででもやります」

この病院の外科と内科の両方を受け持つ南澤涉みなみさわあゆむは、大きな机を前に言い放つ。

磨かれた漆の光沢に、彼の姿が映り込んでいた。

「しかし、妙な噂が流布しているそうじゃないか」

「医院長は……いや、今は父さんと呼ぶべきでしょう。澪の命よりも、この病院の体裁や保身の方が大切なんですか？」

正蔵は何も応えずに、大きな椅子の背にもたれ掛ると、息子の姿を見上げた。

「ひとり娘が可愛くない親がいるものか」

「それじゃあ、放つておいて下さい。何かあれば、俺が全ての責任を取ります。医院長には迷惑はかけません」

「週に一度の臨死治療で何時までも……リセットされた症状が安定しているのは僅か一週間だぞ。その度に殺される澪の身にもなつてみろ」

「死んだ方が、楽だと……？」

涉は唇を噛み締めるよつと言つた。

「繰り返す臨死体験が、他にどんな影響を及ぼすかも知れん」

「それでも俺は、澪に生きていて欲しいんです。澪の血中成分の異常は、身体の異常ではなく、おそらく脳に問題があるんです。臨死する事によつて、一時的にそれがリセットされます」

涉は漆塗りの艶やかな卓上に両手を着いた。

「それを薬効で押さえられる手段が見つかれば、彼女を臨死させなくとも治療する事が出来るはずなんです」

「それを解明できるのか？」

正蔵は前かがみになつた息子の真剣な眼差しに問い質した。

「判りません……」

涉は一瞬視線を下に向けて机に映る自分の姿を見たが、また直ぐに顔を上げると

「それでもきっと解明します。妹の命を救うために、全力で。アメリカのミシガンに一人同じような症状をもつた患者を見つけました。今症例の情報交換をしていく段階です」

「それも、治療法は摸索段階なのだろう」

「しかし、手掛かりは在るかもしない」

正蔵は小さく溜息をつくと、前屈みになつて机に乗せた両手を組み合わせた。

優秀な外科医の手にしては、あまりにもありふれた指先だ。

「まあ、お前がそこまで言うなら、私は止めん」

落ち着きなく、彼は再び椅子に背を任せて、胸元で両腕を組む。

「しかし、もし澪が望んだら、その時は永遠に眠らせてあげなさい。非情な言葉に思えるが、それは澪自身も考えている事かもしれない。臨死を繰り返す精神的負担は、誰にも判らないのだ。

しかし、今度は涉が返事を返さなかつた。

沈黙した視線を父親に送ると、机に乗せた両の手を離して直立する。

「それじゃあ、オペの予定が入つてるので失礼します」

そう言つて踵を返し、彼は大また歩いて部屋のドアを開けた。

重いドアが閉まってから、正蔵は再び溜息をついた。それは、さつきとは比べ物にならない、地の底へ陥きそつたほど深いものだった。

学校帰りの何時もの駅に電車が滑り込んで来るど、チェックのスカートからスラリと伸びた足が、車両とホームの間の小さな隙間を跨いだ。

ドアを抜けて直ぐに見えた澪に、愛香は愛想よく微笑む。

「久しぶり」

「あ、うん、久しぶりね」

澪は少し驚いた笑顔で、慌てて返す。

今日は省吾が風邪で学校を休んでいる。例によつて裕也にメールを送つた省吾だが、彼は最近年上の専門学校生の女の子と付き合いだしたらしく、時折学校をサボる。

『俺も休む』

そう返信された省吾は、仕方なく愛香に連絡を頼んだ。

肩をすくめながら一人の病欠を、もちろん裕也は仮病だが、……報告した彼女は、一人で澪に会つて話すチャンスだと思つていた。

さり気なくチェックを入れていた二人の待ち合わせる電車の時間。それが今日こんな場面で役に立つ。

「ショウは風邪だつてね」

愛香が会話を切り出す。

「うん。そんなに酷くも無いみたいだけど、だるいから。だつて「当然の事だが、澪も省吾の事は知つている。しかも、より詳しい容態を。

愛香はその言葉を複雑な気持ちで聞き入れて、早々に頭の隅へ追いやつた。

「最近ショウとまびしへ。」

「相変わらずよ」

さり気ない問いに、澪もさり気なく応えて笑う。

「澪ちゃんのお父さんて、お医者さんだつて？」

「うん、ウチが病院だから。だから兄もそこで働いてるの」

「へえ、お兄さんも医者なんだ」

愛香は笑顔を絶やさず

「あたしのお父さんも病院に勤めているのよ」

「ああ、そうだつてね。大学病院の外科部長とか。凄いよね」

澪はそう言って、少しだけ高い位置にある愛香の顔に視線を向けて笑う。

「どうして知ってるの？」

「ショウちゃんが前に言つてた」

「ああ、そつか」

車内アナウンスが流れで電車の揺れが減速力に変換されると、愛香の降りる駅に着いた。

しかし、彼女は降りない。せめて澪が降りる駅まで彼女と話をしようとして心に決めてきた。

「愛香さんはどの駅？」

「う、うん。家は石神井だけど、今日はちよつと」

愛香はそう言って落ち着かない素振りで再び電車が走り出すのを待つた。

「ね、ねえ」

ドアが閉まって再び電車が走り出す。

愛香は少ない時間を有効に使わなければといつ決意みたいなものに後押しされて切り出した。

「澪ちゃんは、病氣……大変なの？」

「どうして？」

「え？ どうしてって……何となく」

再び車内アナウンスが流れで、喧騒と慌しさが広がる。

「週に一度、あたし……りん……をして……しているの、……るんでしょ」

澪が言つた言葉は、愛香には飛び飛びにしか聞き取れなかつた。

「えつ？」

愛香は再び同じ言葉を聞きたくて澪に訊き返すが、彼女は黙つて微笑むだけだつた。

「愛香さんは、ショウちゃんの事好き?..」

やつぱり……彼女の問いに、愛香はそつ脱つた。

「な、なんで? そんな事訊くの?」

「うん。何となく」

澪は再び笑顔を返す。決定的な事を言つては、何となくはぐらかす感じだ。

愛香は窓の外に視線を向けて、遠くの家並みを見つめると「好きって言つたら、どうする?」

一瞬沈黙があつた。

愛香は微かな緊張の中で澪の姿を横田で盗み見る。彼女も窓の外を眺めていた。

「別に。どうもしないよ」

澪は視線を変えずに言つた。

愛香は思わず彼女の方に顔を向けて「あたしが横取りしたり?」

「その方が、ショウちゃんの為かもね」

車両のノイズに包まれながら、澪は外の景色に視線を向けたまま小さく呟いた。

愛香はその横顔にドキリとする。

果敢なく愁いな澪の横顔は、愛香の胸を一瞬キュッと締め付けた。

……ショウは何時もこの横顔を見ているのだろうか。いや、きっと見ているに違いない。

ふつと振り返つた澪は、瞳を細めて歯を見せずに口角を上げた。

……無理だ。何不自由なく、きわめて健康な今の自分に彼女以上に省吾を惹き付ける魅力はない。澪は確かに綺麗な顔をしているが、

美貌や可愛さとは違う何かが彼を惹き付けているのだ。

愛香は思わず見入ってしまった澪に向って、笑みを作ると

「澪ちゃんは、駅どこ？」

「あたしは江古田」

「そう。あ、もう次だね」

そう言つている間に、再び車内アナウンスが流れて減速する慣性に一人の体が同時に揺れた。

「それじゃあ」

「うん。またね」

ドアを抜けた澪が手を振ると、愛香もそれに応えて微笑んで手を振り返す。

階段の雑踏に消えてゆく澪の小さな背中を、愛香は完全に見失うまで目で追いかけていた。

## 【26】テスト前

青い空に浮かぶ雲が日増しに高くなつて、気が付けば朝の肌寒さに夏羽毛の布団の中で身体を丸めて目を覚ます。

そろそろパジャマを着ようかと思いながら、まどろみの中を考える。もちろん今夜からの事なのだが。

省吾は渋々布団から出ると、制服のズボンにワイシャツを羽織つて、とりあえずキッチンへ降りた。何時ものように簡単な朝食を済ませ、ブレザーの袖に腕を通して玄関を出る。

朝方に少し降った雨は路面を濡らして、所々出来た水溜りには秋晴れの空が映り込んでいた。

省吾は完璧にその水溜りを避けて、自転車を走らせた。

彼の乗るATBは小さな泥除けが付いているものの、激しく水を撥ね飛ばすと背中に水滴の模様を作ってしまうのだ。

文化祭が終わって少しすると、勉強嫌いの彼らには憂鬱な日々がやってくる。

「数学の試験範囲つて、ここからだっけ？」

「いや、そこは一学期に出てるだろ」

休み時間、珍しく省吾と裕也が教科書を広げていた。

「やべえよ。俺今回数学で赤点取ると、期末で挽回できない」

裕也が頭をかかえる。

今週半ばから中間考査が始まるのだ。

「お前は、リーダーもそう言つてなかつたか？　お前、授業サボり過ぎだよ」

「出ても変わんないって」

裕也の言葉に省吾は肩をすくめた。

「なになに、あたしが特別に教えてあげようか？」

わざわざ愛香から離れるよつて裕也の席にいたのに、彼女が笑顔で近づいて来た。

さつきまで教室にはいなかつたので、何処かへ行つていたのだろう。

「何処が判んないの？」

「全部」

裕也がヤケクソ氣味に愛香に言つた。

「じゃあ、裕也には特別な勉強方がいいね」

愛香は今買つてきた食パンとチューブ入りのチョコレートホイップを取り出した。

「何だよそれ

省吾が言つた。

愛香は「ふふん」と笑つて、食パンの上にチョコレートホイップで公式を書き出した。

「はい、裕也はこれ食べな

「何だよ、それ」

愛香の差し出す公式の書かれたパンを見て怪訝な表情を浮かべる。「知らないの？」うしてパンに文字を書いて食べると記憶が早いんだよ

「おまえ、それ暗記パンだ」

横にいた省吾が言つた。

「あ、当たり。判つた？」

「そのネタ、前に俺、何かの漫画で読んだ」

「うそ……そうなんだ。なんだ。詰んない」

愛香はそう言つて、小さく口を尖らせる。

「なんだじやないよ。それってタダの食パンだろ？」

裕也は、愛香の手からパンを取ると

「ていうか、購買に食パン売つてねえし、どつから買つて来たんだよ」

そうボヤいてパンを一気に口へ入れた。

「あ、じゃあ何で食べんのよ」

「食べるもんはとりあえず食つよ」

愛香は裕也の顔をみて頬を膨らませた後、省吾の方を向いて笑みを浮かべる。

「シコウも食べる?」

省吾が肩をすくめて頷くと、彼女は何だか楽しそうに、再びパンの上に数学の公式を書いた。

帰りの電車で省吾は、澪と肩を並べて揺られていた。

「澪のところは、試験問題も難しいんだね？」

「どうなのかな？」

澪の学校も明後日から中間考査にはいる。だいたいどの学校も今週半ばから土日を挟んで来週の頭までが日程となる。

「試験中はずつと勉強?」

「うん……どうだろ?」

澪は少し曖昧に答えて省吾の顔を見上げると

「シコウちゃんは?」

「俺は、それなりにヤバイのだけ頑張つて終わり」

「じゃあ、あたしといっしょだ」

「ヤバイ限度が全然違うんだろうけど」

澪の笑顔に向って省吾が言った。

翌日は一人共午前授業なので、この日の省吾は潔く帰宅して試験勉強を齧る事にした。

明日一緒に昼ご飯を食べる約束をして、駅で澪に手を振る。

次の日、午前中で授業の終わった省吾は、下り電車に乗つて澪の待つ駅へ向かう。

ひばりが丘にパスタが評判の店があると言つて澪が行きたがった

為、この日は珍しく下る事にした。

澪の待つ隣の駅に着くと、彼女と同じ制服がうじゅうじゅと駅を占領していく、省吾は思わず圧倒される。

部活などが休みの今日は、下級生も含めて一斉に下校しているのだろう。

澪は省吾を見つけて、一緒にいた英美に手を振ると素早く車両に乗り込んだ。

「すごいな、圧倒された」

「今日は部活も休みだからね。何時もはもっとまばらよ」

澪はそう言って、走り出した車窓から見慣れない景色を眺めた。

澪が乗つてから一駅。直ぐに電車を降りる。

「じゃあね、澪」

駅の改札を抜ける時に、彼女の学校の生徒が手を振つたので、澪も笑顔を返す。同じ車両の少し離れた場所にいた二人組みのクラスメイトだった。

駅の階段を降りきつた時、美容院のティッシュをさり気なくかわそうとした省吾だったが、澪は差し出されたそれを受け取つた。「こういうのは持つてると重宝するでしょ」

女性と男性の違ひなのか、省吾は一切こういった物を貰つた事がない。街頭で配るもの貰つてもただ邪魔になるだけだし、普段からポケットにハンカチ代わりのバンダナは入つているが、ティッシュなど入れてないので。

デカイ家に住みながら、街頭で貰つたティッシュを嬉しそうに鞄に入れる彼女の姿を、省吾はちょっと不思議な気持ちで眺めた。

駅前の狭い商店街を抜けた閑静な場所にイタリアンパスタの店はあつた。

店頭にはイタリア国旗柄の小さなパラソルが立てられて、お勧めセットなどが書かれたボードがイーゼルに立てかけてある。店内に入ると、お昼時は過ぎたが、まだ席は半分以上が埋まっていた。奥のテーブルが空いていたので、窓際のそこへ一人は腰掛け、—

緒にメニューを眺める。

「スペゲティーってこんなに種類あるんだ」

省吾が呟いた。

「あたしも、半分は知らないよ」

「ナポリタンって無いの？」

省吾はメニューの裏まで眺めて言った。

「あれはイタリアには無いのよ」

澪が微妙に失笑して、それでも楽しそうだ。

「そうなの？」

「そうよ」

あまり聞いた事の無い名前のパスタも多く、二人は結局メニューの写真を頼りに注文した。

窓の外は住宅街とも繁華街とも言い難い曖昧な景色が在るだけで、どうしてこんな所にお客が沢山集まるのか少し不思議だったが、パスタは確かに美味しかった。

## 【27】残り香

テストが始まるともうまな板の上の鯉だ。翌日の必要科目を一夜漬けで頭に叩き込むしか方法は無い。

一日目の金曜日、テストが終わって軽く裕也と雑談を交わす。彼は直ぐに時計を見ると

「じゃあ、俺急ぐから」

そう言つて小走りに教室を出てゆく。

どうやら専門学校生とうまく言つてこらし。

省吾も帰ろうとして、他の連中と教室を出ようとした時、愛香が声をかけてきた。

「あ、先に行つてくれ。じゃあ」

彼は他の友人達に軽く手をあげる。

「明日、澪ちゃんの治療の日、だよね」

「あ、ああ」

「澪ちゃんには、何か訊いてみた?」「いや、前に少し訊いて以来は、訊いてない」

愛香は妙に眉を彫らせるように笑うと

「訊いて見た方が……よくない?」

「何でお前がそんなに気にすんだよ」

「だって……ほら、この前の文化祭で仲良くなつたしだ……」

愛香はそれだけ言つと、足早に教室を出て行つた。

「今日はテスト、何だつたの?」

「古典と数学。そつちは?」

「リーダーと世界史」

試験中の学生らしい会話が飛び交つ。

試験が始まつて一日田の金曜日。試験中は学校が早い為、それだけ考えれば嬉しいのだがテストという現実問題を考えると、思いは複雑だ。

それでもテスト前日から省吾は澪と毎日お皿を一緒に食べて、二人の時間を過ごしていた。

毎週金曜日は省吾にとって何度も心の中で質問を繰り返す日でもあつた。しかし、それを澪に直接言う事は出来ない。

半分は彼女を困らせたくないところ気持ち。残りの半分は恐怖だ。真実を知る恐怖がそこにはある。

彼女が口に出したがらない土曜日の治療とはいつたいどんなものなのか……省吾は毎週のように平静を保ちながら、心の奥で考える。今日愛香に言われた事が無性に引っかかる。彼女は澪の事を何か知つてているのだろうか……

省吾の心は揺れた。

「あ、明日は……また、治療の日だね」

省吾の言葉に澪は明るく「うん」

まるで、決まつた習い事でもしていて、それに通つよつな素振りだ。

そんな彼女の表情が、一日会えない理由とあまりにもかけ離れているのだ。

「どんな治療なの？」

省吾は躊躇いながら訊いた。

澪はさり気なく視線を逸らして窓の外の風景を眺めた。

「そんなこと訊いてどうするの？」

「いや、どうするつて……」

省吾は澪の応えに困惑した。

「知りたいだる。澪がどんな病気なのか。どんな治療を受けているのか」

「知つても、ショウちゃんにまづいもできないから」

「けど……」

その時、澪に手を引かれて彼は電車を降りた。省吾の降りる駅だつた。

「今日は何か買って、ショウウチヤン家でお昼食べようか

水色の空に浮かぶ白い雲は、千切れた木綿のように薄く広がっていた。外の明るい光が入らないように窓のカーテンは締め切つて、それでも薄つすらと陽光が部屋の中を照らし出す。

机の上で開いたままのラップトップやそこに伸びるアーム式のデスクライト、20インチのテレビや漫画ばっかりが入った本棚。それらが黒いオブジェとなつて時間が止まつたように佇んでいる。

「恥ずかしいから」そう言つた彼女の要望を聞いて、省吾は部屋のカーテンを閉めた。

昼間なのには暗い部屋は、それだけでドキドキと鼓動が高鳴り、敏感になつた嗅覚は、彼女の生きた香りだけを捉える。

澪の静かなドレスが省吾に届いた時、彼は彼女を抱きしめた。

一人きりのほの暗い部屋で、澪は省吾に抱かれるまま、黒い三つ編みを振り解いた。

省吾は澪と結ばれるのはもつとずっと先だと思つていた。冗談交じりのダメ元でやりたい素振りなどを主張して見せて、それは本気ではなく、彼女がそう簡単にキスの先へ事を進めてくれるなんて思つていなかつた。

もつと時間をかけるか、何か彼女の踏ん切りを見極めるしかないと思つていたから。

「なんで……？」

「わかんないよ。別にしたくないわけじゃなかつたし

「そ、そうか」

一人は薄いタオルケットと一緒に包まって肌を寄せ合っている。

「きっと勇気の出せる田を探してたんだよ」

澪はそう言って省吾の頬に唇を着けた。

薄つすらとカーテンを抜ける弱い明かりに照らされて、一人は再び唇を合わせた。

その夜、省吾は勉強が手に付かない。肝心のリーダーの訳を丸暗記する必要があつたが、全然そんなものが頭に入る余地がない。

心の中で何かが弾けた様に熱く輝いて、身体の内側から真夏の陽差のようギラギラと全てを照らし出す。

鼻孔に残ったような澪の全身のあらゆる匂いが鮮明な記憶となって蘇えると、じつとしていられない思いが彼の身体を刺激して、月曜日の分のテスト勉強をしようと机にへばり着く省吾を近く妨害するのだ。

集中しようとするが、5分と立たないうちに午後のほの暗いこの部屋での出来事が、あまりにも鮮明に蘇えり、それを振り払うのに再び時間を要する。

今日はいくらやつても無駄だ……土、口があるさと諦めて、椅子から立ち上がりベッドに倒れ込む。

澪の残り香が省吾の鼻孔を再びくすぐって、脳裏に果てしなく甘い官能を蘇えらせた。

## 【28】十一曜の朝

水面に映る蒼い空とそこに浮かぶ白い雲。水際から枝を伸ばして緑の葉を茂らせる樹木は、いつたい何の木なのか。  
小波さざなみが揺らす空は何処までも青く澄んで、まるで湖に広がるそこが本当の虚空そらのようだ。

揺れる雲が動いて消えると、再び違う雲が姿を現す。

一つの虚空そらを分けるように間に広がる黄緑色の世界は、眩い光に照らされて魂を喰らい、それを葉緑素に変えているのかもしない。満天の星空の舞う漆黒の世界が、時には樹海に浮かぶ一つの空に変わる。そして、紅い黄昏に染まる太陽と月が共存する幻想の世界。そのどれもが、自分の鼓動さえ聞こえない静寂の中にある。

パンツ、と音を立てて景色が震えると、突然風の音が聞こえる。

それが、自分の発するブレスの音だと判ると途端に激しい喧騒に包まれる。

鼓膜の奥から響く激しい脈動は、蘇えった鼓動の波に煽られて全身に温度を分け与える。

凍えた魂は再び息吹を起こして、1分20秒間の生と死の小さな隙間に囚われた時間は終わりを告げる。

次の日の土曜日、省吾は朝の早い時間に澪の家の近くにいた。

……澪はいつたいどんな治療をしているんだ。  
自分の家の病院へ通うのだろうか。

省吾はそれを確かめたいとか、そんな確固たる思いがあつたわけではないのだが、家にじつとしていられずここまで来てしまった。彼女に会いたい思いはあるが、押しかけてまで会うつもりも無い。

今まで土曜日は会えないのが当たり前で、それは澪と知り合って早い時期に知った事だし、自分の無理な要望が通るレベルの話で無い事も知っている。

しかし、昨日の行為が澪をより身近に感じさせて、もつと近くにいたいと思わせたのは確かだ。

朝の風景に見る大きな建物はまた違った雰囲気で、周囲の家並みに比べてもそのデカさは一目瞭然だった。

省吾は百メートルほど離れた通りの路地に佇んで彼女の家を眺めていた。

今それ以上近寄る事は、裸体を見る以上に彼女の聖域に立ち入るよう躊躇われた。

「行かないの？」

後から急に声がして、省吾は慌てて振り返る。

見慣れた顔だが見慣れない髪型。何時もはしない、まどめ髪にした為に露になつた首筋は、日焼け跡も取れてもう大分白くなつている。

「あ、愛香」

後ろには愛香が佇んでいた。

「お前、何してんだ。こんな所で」

「た、たまたま通りかかつてさ」

「たまたま？」

愛香は省吾の家の近くでうろうろしていた。何となく彼の気配を近くに感じたくてそんな行動をとつたのは、今の省吾と同じ気持ちからかもしねれない。

そんな時、思いがけない時間に家から出て来た彼の姿を見て、それを追つて來たのだ。

しかし、そんな事を正直に言えるはずも無い。

「こ、この近くに昔の友達がいるのよ」

「へえ」

省吾はまだよく判らなかつたが、とりあえず頷いた。

「行かないの？」

再び言った愛香の言葉に、省吾は口を切る。

「行くつて、何処に？」

「あそこ、澪ちゃんの家なんでしょう？」

「何で知つてんだよ」

「あんたがじつと見てるからよ。あんな大きな家、普通じゃないじやん。いかにも医者の自宅つて感じ」

「別に、家を訪ねようと思つて来たわけじゃない。俺もこの辺に用事があつてさ」

彼はあくまでも言を構えた。

「こんな午前中に？」

「いいだろ、別に」

省吾はそう言つて、澪の家とは反対方向に歩き出す。

「ついでに寄ればいいじゃん。あんた、彼氏なんでしょう？」

「だつて、今日は治療の日だぜ」

省吾が駅に向かつて歩く後を、愛香が足早に追いかけた。

「じゃあどうするの？」

「どうするって？」

「もう帰るの？」

愛香の言葉に、省吾は応えなかつた。

彼女は不意に立ち止まる

「じゃあ、あたし彼女の家に顔出してくる」

そう言つて踵を返し、ズンズンと澪の家に向つて歩き出す。ロード

ライズのタイトなジーンズは、彼女の長い脚を強調していた。

「えつ、ちょっと

省吾が振り返ると、愛香はどんどん澪の家の方へ歩いて行くので、慌てて彼女を追いかけて肩に手をかけた。

「おい、やめろよ。何でお前が行くんだよ」

「だつて、あたしだつて友達だし。別にいいじゃん」

「今日は止めておけ

省吾は真剣な顔で言つた。

愛香も本氣で彼を困らせるつもりは無い。

「……わかったわよ」

彼女はようやく身体の向きを変えると「じゃあ、これから何処か行く？」

省吾に顔を突き出すように微笑んだ。

「何処かって、何処に」

「ううん、何処でも。どうせ一日暇なんでしょう」

愛香はそう言つて、省吾の手を引いた。

本当は手のひらを掴みたかったが、勇気が出さずに彼の手首を掴んだ。

「ていうか、お前、パンツ見えてるぞ」

ローライズのベルトループには太いダブルホールのベルトが巻かれ、ミニ丈のトップスとの間には大分白くなつた背中が露出している。

上に羽織った白いデニムジャケットもショート丈なので、あまり役には立っていない。

「ムラムラする？」

「いや、別に……」

「見せパンだよ。いいでしょ、学校では見れないんだし」「つうか、背中寒くないのか？」

「べつに」

愛香は省吾の手首を掴んだまま、歩き続ける。

省吾は少し諦めた表情で小さく肩をすくめて彼女の横顔を見つめると、愛香に引かれるまま駅への道を歩いた。

……どうせ、ここでもんもんとした時間を過ごしても仕方が無い。一人でいるよりかえつて気も紛れるだろう。

そう思いながらも通りの角を曲がる時、省吾は名残惜しそうに濶の家を一度だけ振り返った。

その彼の頭越しに、愛香も濶の家を一瞬だけ見つめた。

沈黙した佇まいだけが午前中の陽の光に照らされて、大きなバルコニーの手すりが銀色に光っていた。

## 【29】つかの間

「おー、愛香。なんや、新しい男できたん?」

金髪に色白肌で、真っ黒なマスカラに塗られた睫毛がバタバタと瞬きして笑っていた。

省吾と愛香が一緒に出た池袋で真琴が声をかけて来たのだ。池袋を彼女が歩き回っているのは珍しい。普段は渋谷辺りをいつもく事が圧倒的に多いのだ。

肩にはブランドショップでくれるショルダーの紙袋をぶら下げて、ギラギラした長い爪がそれを掴んでいる

中学からの愛香の遊び仲間で、現在吉祥寺の高校へとりあえずは通っている彼女だが、あまり学校へは行っていないようだ。

真琴は中学一年の時に大阪の堺から東京へ越して來たが、未だに関西弁は抜けない。

「そんなんじやないよ」

「そいやな、愛香にはちょっと地味か」

「そんな事……」

愛香は思わず否定しそうになつて、口をつぐんだ。

省吾は澪から見ればちょっと素行が悪く映るが、遊び慣れした愛香やその仲間から見れば、どうと言う事のない平凡な姿だ。茶髪だつて、今時その辺にゴロゴロしている。

寧ろ、ジーンズを下げる普通に履く省吾は、地味に映るのかもしない。

確かに中学の頃は彼も周囲の流行に倣つようにそんな履き方をしていた。しかし、そんな姿が何だか情けなく見えるようになつてからは、せいぜい腰骨にベルトが掛かるような履き方しかしなくなつたのだ。

真琴は、少し慌てる愛香の様子を見透かしたように

「あれれ? 愛香って、もしかしてこんなのがタイプなん?」

「こんなのって、なんだよ」

二人の会話に耐えかねた省吾が声をだした。

「だって、愛香つてば昔からいい男に声掛けられとつても、ぜんぜんその気にならんし。そうか、こんなんが好きやつたんか。そりやうか」

真琴はそう言つてほくそ笑むと、一人で納得して頷いた。

「それより、真琴。午前中にこんな所にいるつて事はさ」

「その通り。オールやつたよ」

「一人?」

「さっきまで、知恵とか夕菜とか一緒にやつたけど、なんか親からごつつ携帯掛かつて来て、渋々帰つて行つたわ」

真琴は喋り続けた。

「凄かつたでえ。携帯耳から放しても、ムチャクチャ声が聞こえて来んねん。あたしまで怒鳴られてる氣分やつたわ」

「これから、また何処か行くの?」

彼女の話が一瞬途切れた瞬間に、愛香は声を差し込む。

付き合いが長いので、話の入れ替え所は踏まえているのだ。そう

しないと、彼女が何時までも喋り続ける事も知つていい。

「そうやな。あたしもいつたん帰ろうかと思つてんけど、金なくつてさ」

「そんな事だらうと思つた」

愛香は真琴に笑みを送ると、小さなリュックから財布を取り出して一千円を彼女に渡す。

「おい、愛香」

二人の事をよく知らない省吾は、簡単に金を手渡す彼女に不信感を覚える。

「いいのよ。貸すだけなんだから」

真琴は借りた金は絶対に返す娘だった。それだけは知り合つた頃から変わらない。だから愛香も信用できだし、一見いい加減に見える付き合いの中で何故か繋がりを保てているような所があった。

もちろん、気が合つのが一番なのだろうが。

「ありがとう。今度何時出てくる?」

「うん、あんまり最近出てないしなあ

「ほな、次の週末」飯でも食べようや。そん時返すから

「うん、いいよ」

「ほななあ

「じゃあね」

真琴は駅へ向つて雑踏に消えていった。

「おい、彼女何時もあんななのか?」

「そう……かな。あんな感じ」

「あんな簡単に金かして大丈夫なのか?」

「大丈夫よ。彼女は必ず返してくれるから。だから信用できるの」

そう言つて、愛香は歩き出した。

ファミレスで安い昼食をとり、映画を観てからあちらこちらで時間潰して池袋駅に戻つて来たのは、もう夕暮れが迫る頃だった。駅周辺には土曜出勤から帰宅するサラリーマンとこれから遊びに出て来た連中とが交錯して人混みを作つている。

「ねえ、もう帰る?」

「えつ、だつてこれからどうするんだよ」

愛香は省吾にそう言われて一瞬押し黙る。

「澪ちゃん、もう治療終わつたのかな?」

場を誤魔化すよつに愛香は切り返した。

「ああ、たぶんな。でも、びつせ今日は外へは出られないんだ

「そうなの?」

「一応、一日自宅療養になるらしい」

「そう……」

心停止させるのだから当然だつ。いくら、上手く蘇生できても、

24時間はその後の経過が気になるはずだ。

愛香はおぼろげな知識で何となくそう思つた。

「ねえ、ショウは夜遊びに出たりしないの？」

「中学の頃は夜な夜な出た事もあるけど、逆に今は用事が無ければ出ないな。裕也と飯食つたりはするけど」

「じゃあさ、夕飯まで一緒にいようよ」

「でも、俺金無いぜ」

「しょうがない、夕飯くらこおじつてやるか」

愛香はそう言って、省吾の腕にもたれかかるように囁いた。

「いや……別にそうしてもらわなくてもさ」

省吾は息をついて視線を逸らすと、彼女の細い指の感触を腕に感じていた。周りに同級生がいないと、どうも調子が狂つて上手く切り返せない。

それでもただのクラスメイトだから、飯や映画くらいいいか。と、半ば彼も考えていた。

夜に繁華街を歩くのは省吾にとって久しぶりだった。

最後に来たのは、夏休みに裕也に誘われてインディーズバンドのライブに出かけた時だ。

新宿の飲み屋の前で酔っ払いの喧嘩に巻き込まれそうになり、二人で駅までダッショした事を思い出す。

つかの間の恋人同士のようにさ迷う一人の時間が、省吾にはゆつくつと、愛香には足早に過ぎて行つた。

「今日は有難うね」

帰りの西武線に乗つて一人が何となく無言のまま窓の外を見ていた時、愛香が視線を動かさずに言つた。

「いや、別にいいけど」

省吾は、少しマジ顔の愛香を見て思わず言葉に詰り、視線を再び外へ向ける。

ちょっとわがままにリードしようとする彼女が自然で、それに引っ

張られる日常が当たり前のような気がした。

「毎週土曜日はあたしと……なんて無理だよね」

窓の外を眺めながらそんな事を呟く愛香の横顔を、省吾は盗み見  
た。

線路沿いに連なる街路灯の明かりが次々と彼女の瞳に映り込んで、  
真横に流れる涙のように見えた。

しかし、省吾がそれに答える事は無かつた。

彼女が降りる駅に着くアナウンスが流れるごとに、電車は減速して周  
囲の人混みが一斉に斜めに身体を揺らす。

ガタツと止まってドアが開くと、愛香は

「じゃあ」

そう言つて笑顔を省吾に向けたままホームに足を降ろした。

「ああ、またな」

省吾は自分でも驚くよつた声を出して周囲の視線を浴びたが、ホ  
ームへ降りた愛香がそれに応えて手を振つたので何も気にならなか  
つた。

ただ、走り出した車内で俯く自分が、少しだけ空虚に思えた。

**【30】夢（前書き）**

【第30話】は澪の一人称でお送りいたします。

## 【30】夢

私は時々夢を觀ます。

それは限りなく鮮明なわけでもなく、曖昧でも無い、きわめて曖昧でしかもリアルな夢なのです。

何時からそんな夢を見るよつになつたのか……わざとあの頃からに違ひない。

海で溺れたのが始まり……いえ、私にはこの方法でしか今を生きれないのです。

何度も死んで、何度も蘇える。

あの幻想的な死の淵に佇むと、見えてはいけないものが見えるのかもしません。

眩しい太陽が謎めくオーロラの光か、いえ、もしかしたあの秘密めいた大きな月の輝きが、私の中の何かを呼び起させのかもしれません。

白い靄もやの中で電車に揺られていた私は、学校の友人と話しうんでいました。

しかし、気がつくと隣には誰もいません。

友達だけじゃない……下校時間のはずだといふのに、電車の中は閑散として靄の中で吊革がゆらゆらと静かな振動に揺れていました。他には誰の姿も見えません。

私は急に景色が歪むのを感じました。

電車内の靄もやは急激に濃度を増して私を包み込みました。

目の前は真っ白になつて、自分の立ち位置を見失つた私は、平衡感覚までも失つて倒れました。

バタンッと大きな音が聞こえました。

それは、私が床に倒れた音です。

意識が遠のいてゆく中で、誰かの気配を感じました。

靄に包まれて姿はよく見えません。

少し大きな温かい手が、私の身体に触れました。

「大丈夫？」

優しい声……その記憶はあっても、声自体は覚えていません。

浮遊感を感じて、私は移動していました。

誰かが私の身体を持ち上げて抱きかかえているのは解りましたが、やはり靄が濃くて腕の辺りが僅かに見えるだけでした。

私は自分が目を開けているのか瞑つているのか解りません。

さつき意識が遠のいたのだから、気絶しているのでしょうか……

それとも、とっくに目が覚めて、抱きかかえる誰かを見つめているのでしょうか。

自分の身体の陰になつて見えないはずの、誰かの腕時計が見えました。

男物の時計を右手首にかけているのが見えて、私を抱える誰かは男の人なのだと解りました。

どうして、最初の声で気付かなかつたのでしょうか……

事務室のような、スチール用品を沢山置いた独特の匂いを感じて目を静かに開けると、人の気配が数人感じられました。

でも、そこが何処なのか私には解りません。

少しだけ視線を動かすと、彼の身体が胸から下だけ見えました。

靄は晴れているのに、なぜかソフトフィルターでもかけたように霞んで、彼の右手の時計だけがハツキリと見えました。

何故か、周りの景色は灰色で、何も見えません。

彼の話し声が聞こえました。

確かに私を抱き上げた彼の声だと判るのに、その声の記憶がありません。

再び目を閉じた私は、カーテン越しに陽の光を感じて夢から目覚

めるのです。

私には北原省吾という彼がいます。

彼と初めてのキスをした夜、私は再び夢を見ました。

灰色の空の下で、誰かがショウくんを追いかけていました。  
背景もショウくんも白黒なのに、彼を追いかける誰かの髪の毛だけはダー・ジリンティーのような綺麗な色を靡かせていました。  
女性だと言つ事がわかります。

ショウくんは歩いているだけなのに、走っている彼女は彼に追い  
つく事はできません。

灰色の景色には、木が生い茂つていました。

よく見ると、足元はドライアイスを敷いたように氷に埋つてよくみえ  
ません。

それに、ショウくんを追いかける彼女の顔が何故か見えないので  
す。

ショウくんの顔は見えて、彼女の顔もこちらを向いているのに、  
目鼻がみえません。

本当にこんな人がいたら怖いはずなのに、私は平然と彼女を見つ  
めしていました。

「ショウ！」

彼女はショウくんをそう呼びました。

親しい誰かなのでしょうか。どうしてショウくんを追いかけるの  
か、その時の私には解りませんでした。

ショウくんはちょっとだけ後ろを振り向いて、再び歩き出します。  
私が一番気になったのは、彼女はショウくんに追いつけないかわ  
りに、決して離れない事でした。

一生懸命追いかける彼女とショウくんの距離は一定でした。

紅茶色の綺麗な長い髪が、頬に纏わり着きながら後にはためいていました。

その時ショウくんは私に気づいて

「よう、元気なのか？」

そう言いました。

後にいた彼女の姿は、消えていました。

白黒の木が生い茂る灰色の木洩れ日の中で、私がショウくんと手を繋いだ時、田舎ましの音が聞こえました。

私は時々夢を見ます。

鮮明ではないけれど、朧氣でもない……そして、夢の中の誰かとは、後に必ず出会うのです。

死の淵をさ迷う自分には、それまで見えなかつたものが見えるのです。

## 【3-1】地下室

日曜日、省吾は再び江古田の駅で降りて澪の家に向つ。今度はちゃんと門扉を開けて彼女の家に入った。

みんな出かけてるし、勉強するといつても一日中するわけではないのでよかつたら来ないかと、澪の方から誘つて来たのだ。玄関を入ると、毛むくじゃらの黒い物体が床を飛び跳ねるようになんと足を滑らせながら走つて来た。

澪の言つていたミニチュアダックスのヨッシーだ。

胴長のわりに足が短い為、身体の長い毛が床に着いてまるでモップのようだ。

省吾に對してもやたらシッポを振つて、鼻面をひょいひょいと動かすので、何だか愛着が湧く。

「ずいぶん人懐っこいんだね」

「ヨッシーは座敷で飼つている割には、人見知りしないのよ」

澪はそう言つて笑うと

「きっと泥棒が入つてもシッポを振つてるかも」

初対面の自分にこれだけシッポを振るのだから、ありえるだろうと省吾も笑つて見せた。

澪の部屋で話をして、自分の教科書を広げる。

ついでだから試験勉強も少ししようつと澪が言つたので、とりあえず持つて来たのだ。

まあ、遅れを取り戻すにもいいかもしれない、と、省吾もリーダーの教科書とノートは持つて来た。

澪はとりあえず教科書を眺めると

「これ今やつてるの？」

「あ、ああ。そうだけど。なんで？」

「う、ううん。ウチでは一年の時に使つたページがあるから」

そこまで授業に差があると思つていなかつた省吾は、言葉が出な

かつた。

「じゃ、じゃあさ、これ訳が解かないんだけど書いてくれよ」

省吾は授業で聞いていなかつた部分やノートを書かなかつた部分を澪に訳させて、それを何度も復唱した。

一時間もしないうちに省吾は段々飽きてくる。まだ丸暗記できたのは3分の1ほども無い。

澪は省吾のノートに挟んであつた英語の小テストの問題を見つけて、面白そうに眺めている。基本的に勉強の好きな彼女は、問題用紙などを眺めるのが好きなのだ。

「な、なあ」

二人はソファに寄りかかつて床に直に座っていた。そして省吾は澪の腕を掴む。

澪は彼の行動の意味を察して

「ほら、まだぜんぜん覚えてないでしょ」

「大丈夫だよ。後は家で一夜漬けするから」

そう言って澪をラグの敷かれた床に押し倒す。

彼女も別に嫌な訳では無いので嫌悪は感じないが

「ダメよ。昨日治療したばかりだから……激しい事はダメなのよ」

「そつとするから」

「ダメよ、息が荒くなっちゃうでしょ。心拍も上がるし」

「それは澪が感じ……」

澪は省吾の頬つぺたを両手で摘んで横に引っ張った。

「あいたたた……」

省吾は彼女の細い指で頬つぺたを引っ張られたまま発する言葉を変えた。

澪はそのまま素早く彼の唇に自分の口を着けると、フレンチなキスをして

「今日はこれだけ」

そう言って目を細めて微笑む。

省吾は、彼女が別に嫌がつてているわけではないのだと思うと、無

理に迫る事を止めた。病気の治療があつたのだから仕方がない。

……て事は、これからも日曜日はダメなのか……

省吾はそう思いながら、テーブルの上に置かれたアイスティーのグラスを手にした。

暫くたつた頃、省吾はトイレに行くといつて部屋をでた。二階の突き当たりに在るといわれ、一階と二階にトイレが在る事を知る。トイレの帰りに何かの気配を感じて階段の下を覗くと、ヨツシーがいた。

下から見上げる彼に、省吾は思わず階段を下りて触りに行く。省吾が階段を下りてゆくと、犬は喜んで廊下をぐるぐると小さく回つたりして、彼に着いては離れを繰り返す。廊下の床が滑るらしく、時折転びそうになるのが見ていて愉快だった。

その時、省吾はふと階段の直ぐ横にあるドアに目が行つた。澪が地下室と言つていた、真上を階段が通つているドアだ。

……地下室つてどんなだろつ。ちゃんと部屋のようになつているのか、それとも物置みたいなものなのかな？ ワインセラーが並んでいたりするのだろうか？

彼は不意に異常な興味に駆られて、気づいた時にはドアのノブを左手で掴んでいた。

澪の家とは言え、赤の他人の家だ。勝手にドアを開けていいわけが無い事は省吾も十分に判つていて、しかし、妙な好奇心は消えなかつた。

……誰かの寝室ならともかく、地下室だ。ちょっと見るくらいどうと言う事はないだろつ。

省吾は掴んだ左手に力を入れた。が、その時

「やあ、キミがいたのか」

声がして、省吾は慌ててドアノブから手を離すと、振り返つてヨツシーに向つて屈んだ。彼と遊んでいるふりをしたのだ。

それから声のした方を見る。

「ヨッシーが一人で走り回つてるとと思つたよ」

澪の兄である渉が廊下の奥で笑顔を覗かせていた。おそらく位置関係や雰囲気からダイーニングだろうと思つた。

「あ、今日は……」

省吾はとつさに笑みを返す。

ヨッシーは渉に呼ばれると、ツルツルの廊下を少し滑りながら駆けて行つた。

「ケージに入つていたはずなのに、勝手に出たんだな」

犬を抱き上げながらそう言って、渉が省吾に近づいて來た。

「あ、すいません。勝手に。トイレに来たら犬がいたもので」「いや、遠慮はいらないよ。澪は上?」

「あ、はい。じゃあ俺戻ります」

省吾は片言を交わして、階段を上がつた。

渉は彼の影が見えなくなるまで、階段の上を見つめていた。

## 【3-2】不審な行動

「実はあたし、今困つてて……」

布団を肩まで引き上げた友恵ともえが言った。

「なに？ 僕に出来る事なら力になるけど」

裕也は、高校生とは思えないセリフだなと自分でも思いながら、そんな言葉を声に出して言った。

「本当に？」

「あ、ああ。俺に出来るならね」

確認するような彼女の笑みに、裕也は少しだけ声のトーンを下げた。

川島友恵は裕也が半月ほど前から付き合っている専門学校生で、彼女は彼よりも一年上だ。それでも小柄な友恵と並ぶと、背の高い裕也は、とても高校生には見えなかつた。

「実は、学費が足りなくてや……」

「仕送りとか、貰つてないの？」

「学校の分だけね。でもこここの家賃とかは全部バイト代で払つていて……」

実家が群馬にある友恵は、上京して一人暮らしをしている。

「ほら、服飾の学校つて教材にけつこうお金掛かるから、急に必要になつたモノとか買う余裕はなくて、先月分の家賃が未払いのままでさ」

友恵はそう言つてベッドに起き上がると、少し俯いて見せた。

「いぐらっ？」

「こここの家賃丸々だから、六万円」

「六万があ」

そう言つて裕也も起き上がりつたが、彼女はそれに被せるように

「そ、それと……今月分もマズイんだ」

「今月も？」

「夏休みの課題に使つた教材がけつこいつ在つて、そのしづ寄せがけつこいつ来ててね」

「全部で十一万?」

裕也は小さく息をついて再び枕に頭を乗せる。

友恵はその彼の胸に頬を着けると

「あたし、ヘルスにでも行こうかな」

「だ、ダメだよ。そんなの」

友恵は新宿の小さなクラブでホステスをしている。

「でも、裕也にはお金のこと無理でしょ。ウチの実家、商売が上手く行つて無くて、これ以上お金の事は言えないし……」

「何とか考えるわ」

裕也は白い天井に嵌め込まれた照明器具を見つめて、呟くようと言つた。

「ねえ、裕也是今日も休み?」

朝の教室で、愛香が省吾に声を掛けた。

「ああ、メールが来た。今日は午後から来れたら来るつて

「先生になんて言うの?」

「具合がよくなつたら来るつて伝えるさ」

省吾は担任教師にもそう伝えた。

裕也是中間考査が終わつた翌日から学校を休んで三日になる。メールが来るという事は元気なのだろうが、いつたい何が理由で休んでいるのか、それが風邪で無い事は確かだと判つてゐるだけに省吾も心配だつた。

「よう」

その日の昼休みに入つて直ぐ、裕也是教室に顔を出した。

「よう、じゃねえつて。お前何やつてんの?」

机に鞄を置く彼に、省吾が歩み寄る。

「いや、ちょっとな」

裕也は苦笑しながらさう言つて「ふつ」と息をついて自分の椅子に腰掛けた。

何だか異様に疲れている様子の彼を、省吾は見下ろした。

「ちょっとて？」

「まあ、いいじやん。野暮用だよ」

「あの専門学校生の娘か？」

「まあ、当たらずも遠からず」

裕也はそう言つて笑うと

「でもな、別に彼女に会つてて学校休んだ訳じやないぜ」  
彼の妙にくたびれた様子に、省吾も何か他の理由がある事は察した。

「でもお前、あんまりサボると単位がやべえぞ」

「だからこうやって来たんだろ。リーダーはギリギリだからな」

裕也は途中で買ってきたりしい菓子パンを齧ると、缶コーヒーのプルタブを小気味よい音をたてて引いた。

その日の帰り、省吾はハンズへ行きたいといつ邊に付き合つて池袋へ出た。

裕也は午後の授業中ずっと机に突っ伏して寝ていたかと思うと、ホームルーム終了と同時に帰つて言った。

ハンズから出た時には陽の光は何處にも無くて、そこには夜の光と共に昼間とは違う喧騒が広がっている。

「あら、あんた」

背中から声が聞こえて、省吾は澪と一緒に振り返った。

「ああ、いいところで会つたわ。これ愛香に返しとつてくれる。週末あたしの方で用事が出来てな、愛香には伝えてあんねんけど、ちようどよかつたわ

真琴はそう言って、素で三千円を差し出す。

省吾はいきなり声を掛けて来て、反応を返す前にペラペラと喋る  
彼女にあっけにとられた。

「あ、ああ。いいけど……」

真琴の差し出したお金を受け取る彼の姿を、澪は事情が判らぬた  
だ見つめていた。

「しつかしあんたも隅に置けんやつちやな」

真琴はそう言って笑うと

「あんまり無茶しなさんな。ほなな」

ブランドの手提げを肩に掛け、彼女は人混みに消えていく。

省吾と一緒にそれを眺める澪が「誰？」

「あ、愛香のダチだつて。この前会つてさ。愛香に金を借りたらし  
くて、それを返してくれつて事だよ」

省吾はやけに長い言葉を返す。

「大阪の人？」

「えつ？ いや、東京だろ」

「でも関西弁だつたよね」

「ああ、そういうえばそうだよな。生まれが向こうなんだろ」

別にどうと言う事でもないのに、澪の質問にしどりもどりする。

「隅に置けないって？」

「あ……それは、澪みたいな娘とか、連れて歩いてるから……じゃ  
ないか」

省吾はそう言ってわらうと「行こうぜ」

しかし、何気なく動かした視線に街道に近い工事現場が見えた。  
道路の改修か何かは判らないが、とにかくサンシャイン通りと街  
道が交差する場所で工事が行われている。

省吾は思わず視線を止めて見入った。

鉄の資材を運ぶ裕也に似た姿がそこに見えたのだ。



## 【33】訳あり

「ちょっと待つて」

省吾は澪にそう言つて、駅とは反対方向に歩き出した。  
「どうしたの？」

澪は怪訝な笑みを浮かべて、それでも省吾につづいて歩くと、彼は前方の工事現場を田指している。

その先で作業をする妙に背の高い男を田指して、省吾は足を速めた。澪も遅れを取らないように小走りになる。

「ねえ、何？　どうしたの？」

澪は彼が一心に見つめる方向を見て「あつ」と小さな声を出す。  
「裕也」

省吾は工事中の低い柵越しに名前を呼んだ。

作業服に身を包み、安全第一と書かれた黄色いヘルメットをかぶつて忙しく動き回る長身の男は正しく裕也だった。

「なんだよ、こんな所に」

裕也はそう言つて片手を軽く上げると、あまり見られたくはないさうな様子で苦笑する。

「おまえこそ、こんな所で何やつてんだ」

省吾が声を大きく言った。

舗装を碎く機械の音が、急に轟きだしたからだった。

「ちょっとな、バイ~」

裕也は再び苦笑して見せると「今ちょっと手が離せないから」  
そう言つて小走りに資材に駆け寄つて行つた。

「裕也くん、アルバイト始めたんだね」

「あ、ああ。そうみたいだ」

駅までの途中、澪に言われて省吾は軽く頷いた。

……しかしおかしい。アルバイトと言つても、他にいくらでも在りそなものをどうして工事現場で働く必要があるのか。

想像できるのは一つ。即金で稼ぎたいからだ。ああいう所は日払い週払い給料がもらえる事が多い。

しかし、学校が休みの期間ならわかるがどうしてこんなハンパな時期にあんな重労働をするのか……

省吾は澪と何気ない会話を交わしながらも、帰りはずっとそんな事を考えていた。

翌日省吾は、真琴に頼まれたお金を愛香に渡す。

「ああ、真琴から電話があった」

「神出鬼没な奴だよな。あの娘」

「そうだよ。何処で逢うか判らないから、ショウも氣をつけた方がいいかもね」

愛香はそう言つて、省吾からお金を受け取る。

「べ、別に俺は何処で誰に会つてもやましい事はないよ」

それは本当の事なのに、何故かおかしな動搖に包まれる。

「ナニナニ」愛香、省吾の愛人にもなったの

省吾からお金を受け取る愛香の姿を見た陽子が、興味に満ちた笑顔で近づいて来た。

「冗談やめてよ、この百倍は必要だつての」

愛香も笑つて返す。

省吾が少し驚いた顔で「そんな高いの？」

「当たり前じゃん」

愛香は省吾に悪戯っぽい視線を返すと

「でも、特別半額にしてあげてもいいけどね」

省吾は「ハイハイ」と肩をすくめると、愛香の相手は陽子に任せて自分の席に戻る。

その日も裕也が学校へ来たのは三時間目が終わってからだった。担任には最近体調がよくないと伝えてあるらしい。もちろん、工事現場であくせく力仕事に追われるくらいだからウソに決まっている。

おそらく夜遅い時間まで重労働を強いられるから、翌朝起きられないのだ。

彼は結局昼休みまで爆睡を決め込んで、腹が減ったのか昼休みのチャイムでようやく目を覚ました。

「お前、なんあんな所でバイトしてんだ？　あれが彼女と関係しているのか？」

省吾は裕也が目を覚ましたので、一緒に購買へ行きながら話した。

「ああ、ちょっとな」

「何だよ、サラ金とかじゃないだろ？」

「いや、そうじゃない」

久しぶりの屋上で、省吾と裕也が購買で買ったパンを齧る。直接受ける風はだいぶ肌寒くなつて、思わず手すりの陰で風を防いだ。

裕也は、友恵の事を簡単に話した。

お互にあまり付き合つている女性の事を訊かないし、自分からも話さない。本命の女の事は尚更そのが、何時の間にか出来た二人の考え方だった。

もちろん、遊び半分の異性の話で盛り上がる事は多々あるし、誰々の噂話などもする。

だから、裕也が自分の彼女の事を、全てではなくとも省吾に話すのも珍しい事で、さすがに難問を抱えている事は省吾にも直ぐに理解できた。

「どうか、苦労人の彼女なんだな」

省吾は金持ちの澪と付き合う自分が、何だか後ろめたく感じた。

「お前、身体大丈夫なのか？」

「俺は、大丈夫さ。丈夫がとりえだからな」

そう言って笑う裕也の背中を、省吾は拳で軽く叩いた。

## 【3-4】優しさのあり方

その日の夕方は久しぶりに新宿まで出て、省吾は澪と一緒に映画を見に行つた。

帰りはファーストフードでお茶をして、ブラブラと駅へ向う。陽は完全に暮れて、行き交う人の波が街の明かりに照らされていた。

その時省吾の目に前に、以前一度だけ見た女性の姿が目に留まる。スーツを着た茶髪の優男やさおとしと腕を組んで楽しげに歩くその女性は、間違いない裕也の彼女だ。

……どういう事だ？ 一緒にいるあの男は誰だ。

「澪、ちょっとここで待つてくれ」

省吾は駅の出口付近に澪を待たせて、裕也の彼女、友恵を追つた。スーツの男とべたべたと寄り添う友恵が、その男とどういう関係なのは察しがついたが、省吾は信じたくは無かつた。

「あれ、どうした。高校生の下僕を作つたって言つてたろ」「うん、まあまあ頑張つてるよ」

「いいのか、高校生は感受性が強いぞ」

「あたしだつて変わんないよ。だつてしまふがないじゃん」

友恵は男の肩に顎を乗せるようにして

「でも、たかが知れた金額だもん。楽しんだ代金だと思えばいいでしょ」

「どうせ、そいつがダメでも、他に何人も同じ事させてるんだろ」

「あたしは別に強要してないもん」「そんな事じやあ、結婚できないぜ」

「今が楽しければいいよ」

そんな話しが聞こえてくる。

省吾は一人に駆け寄つていた。自分で自分を抑える事は出来なかつた。

友恵の肩を後から徐に掴んで振り向かせる。

左手の拳を思わず振りかぶっていた。

友恵も一緒に振り返った男も何事が起こったのか判らずに、ただ驚いて後に身を仰け反らせたが、省吾に掴まれた友恵は上手く動けなかつた。

二人はこの界隈の賊にでも襲われたと思ったのかもしれない。

省吾は振りかざした左手に力を込めたが、ひとつ息を飲むと、震えるそれをダラリと力無く下にあおろした。

「な、何よあんた。 警察呼ぶわよ」

友恵は省吾を覚えていないようだった。強気で彼を睨む。

「呼べるもんなら呼んでみる。お前、ふざけんな」

「何よいきなり、頭おかしいんじやないの？」

「こんど裕也に近づいてみる。拉致つて荒川に放り投げるぞ！」

省吾は彼女の肩を掴んだ右手を力任せに激しく揺すつて、大きく怒鳴つた。久しづりに出した自分の大声に、自分の身体が震えた。裕也の名前を聞いて、友恵の顔色が変わつた。

「な、なんだ。お前」

スーツの男が、友恵の肩を掴んでいる省吾の右腕に触れた。

反射的に怒りの矛先は、あまりにも自然にそちらへ飛ぶ。

男は省吾が左利きだとは知らずに右手を制するつもりだったのかもしれない。彼の手首を強く掴んだのだ。

「手を離せよ、このガキ」

しかし、省吾の利き腕は反射的に男の顔面を捉えた。

「ゴキッ」と鈍い音がした。鼻が潰れたかもしれない。

「うつ」と、だらしなく呻いて、男は大げさとも思える感じで歩道に転げる。

その光景を見た友恵は、初めて身体を震わせた。

「判つたのか？ もう裕也には近づくな。絶対だぞ！」

省吾は再び彼女の肩を大きく揺すつた。「判つたのか？」  
薄でのカードガンの衿がビリッと音を立てる。

「は、はい」

友恵の震える唇が微かに動いた。

「電話もするなよ。もしアイツに近づいたら、いくらでも仲間集めるからな。警察に言わない代わりに東京で暮らせないようにしてやるぞ」

ハッタリだ。集まる数なんてたかが知れているし、女を拉致る度胸なんて在るわけがない。本当にやるとしたら……裕也くらいだと省吾は思った。

スーツの優男は、いいかげん立ち上がるはずなのに起きて来ない。ひっくり返ったまま事が終わるのをじっと待つていてるのだ。

怒りの収まらない省吾は再び左手の拳を振り上げる。が、殴るつもりはない。

友恵は肩をすくませて一瞬目を強く瞑つた。

ふと周囲の通行人の目が自分に、しかもかなりの数が注がれる事に省吾は気づいて友恵の身体から乱暴に手を離す。

直ぐ横に在った東京電力の制御ボックスを思い切り蹴飛した。

友恵は再びビクリと身をすくませて、涙を零してしゃくり上げる。

「くそつ。女は得だぜ」

省吾はそう言って踵を返し、澪の待つ場所へ足早に戻った。

\* \* \*

翌日の昼休み、裕也は学校へ来ると落ち込んだ様子で席に着いた。

「よう、昨日もバイト頑張ってたのか」

省吾が近づいて話しかけた。

「ああ、でももういいみたいだ」

「なんだよ。何かあつたのか」

省吾はもううん、昨晚の事は言わないつもりだ。

「昨日の夜遅くに友恵のアパートに行つたらいなくて、携帯にかけたらもう会いたくないって言われたんだよ」

「なんだよ、また振られたのか？」

「訳わからんねえよ。今日また電話してみたら、携帯解約されたらしい」

裕也は困惑した顔で、虚ろに窓の外を見上げた。

「ま、いいじやねえか。金も必要なくなつたんだろ。結局女つてのは解んねえんだよ」

省吾はわざと残念そうに彼の肩を叩いた。

裕也はふうっと息を着くと

「今日、焼肉でも行くか？」

「ああ、オーリカ？」

「澪ちやん呼ぶか。彼女には俺がおじつてやるよ」

省吾は肩をすくめる素振りを見せ、一緒に窓の外を眺めた。青い空には、薄つすらとウロコ雲が高く連なっていた。

## 【35】返らないメール

午後の陽差は教室中をうつろいだ風景へと変えていた。

省吾は、机の上にとりあえず開いた教科書に自分のヨダレが落ちるのを感じて目を開けた。

六時間目、ふと顔を起すと珍しく愛香が机に突っ伏している。

省吾は何となく心配に思つたが、彼女も寝不足なのかと思い、とにかく声はかけずにそつとしておいた。

授業は物理の大柴だから、何も言わずにひたすら一人で授業を進めている。

ざつと教室を見渡しても、十人は机に突っ伏しているか頬杖をついて居眠りをしている。

「神崎は珍しくお疲れだな」

省吾の斜め前、つまり愛香の左隣の席に位置する山本が声を潜めて言った。

隣といつても全ての机は接していないので、山本の机も愛香からは人一人分離れてはいる。

「それともアレか？」

山本は続けて言った。

「違うよ。何だかだるいんだよ」

愛香は顔を伏せたまま首を回すと、山本の方に向つて小さく声を出した。

どうやら彼女は眠つていたわけではないようだが、その気だるい仕草は何時もの彼女らしくないのは確かだった。

帰りのホームルームでも、愛香はほとんど顔を上げない。

チャイムが鳴つて、掃除の当番でないものは次々に席を立つて教室を出てゆく。

「愛香、大丈夫？」

陽子が寄つて来て、虚ろ気な彼女に声をかける。

「うん……もう帰る……」

愛香はそう言つて顔を上げると、大きく髪の毛をかき上げた。

「おい、大丈夫なのか？」

省吾の声に振り返つた愛香の顔は、妙に白っぽくて弱々しい笑みだけが彼を見据えていた。

「あ……まだいたんだ」

「いや、今ホームルーム終わつたばっかりだから。そんなマッハで帰らねえよ」

省吾は思わず陽子を見上げて

「大丈夫か。保健室に寄つてつた方がいいんじゃないかな？」

「愛香、保健室寄つてく？」

陽子も彼女にそれを勧めた。

「うん、いいや。帰つて寝る」

鞄を掴んで立ち上がる彼女の姿は、何処か力なくて省吾は思わずふらつく彼女に手を差し出した。

「大丈夫か？」

「なんだ愛香、体調悪いのか？」

裕也が近づいて来た。グッスリと居眠りしていた彼は、今日覚めたらしい。

陽子は駅からバスなので、省吾と裕也が一緒に帰る事にした。もちろん、駅までは陽子も一緒だが。

「愛香具合悪いの？」

安倍川美紀が声をかけてくる。

彼女は掃除当番の割り当てなので、一緒に帰る事は出来ない。

「メールするね」

「うん」

美紀の声に、愛香は小さく返事を返した。

省吾は途中で澪にメールを入れる。

愛香に付いて行くからとは書き込まなかつたが、急用で先に帰ると伝えた。彼女からはOKの返事が直ぐに届いた。

「なんだよ、じゃあ焼肉は明日だな」

駅のホームで思い出したように裕也が言った。

「そうだな。ていうか、愛香がよくなつてからでいいだろ」

「それまで俺の懐に金があればな」

「二人の会話に、愛香は弱々しく笑つた。

電車に乗り込んで直ぐ

「澪ちゃん待つてもよかつたのに」

愛香は言つた。

「別にいいさ。何時でも会えるし」

省吾と裕也は愛香と一緒に駅を降りて、とりあえず彼女の家まで付き添つて歩いた。閑静な住宅街に入ると、愛香の家は周囲の民家を嘲笑うかのように大きな白い外壁を堂々と見せ付けていた。

周囲の民家も、比較的大柄な建物が多いが、愛香の家は完全にそれらを上回つている。

「デカイ家だな」

裕也が門扉の前で見上げた。

省吾は澪の家で免疫がついたのか、さほど驚きはしないが、とりあえず想像していた通り、洋風造りの瀟洒な建物だった。

「明日休む時はメールしろよ。学校に伝えてやるから」

「うん。ありがとう」

愛香が玄関ドアに入るのを確認してから、省吾は裕也を促して駆け戻つた。

「大丈夫か、アイツ」

「大丈夫だろ。風邪じゃねえの」

心配する省吾に対し、裕也は楽観的だった。

西日が眩しく一人を照らし出して、長い影がアスファルトに伸びていた。

次の日は、やはり愛香は学校を休んだ。

直接担任に連絡がいったらしく、省吾も裕也も彼女からは何の連絡も無かつた。

何となく心配になつた省吾は、昼休みに愛香宛のメールを送るが、返信は無かつた。

## 【36】秘密

愛香は結局週末まで学校には出て来ず、そのまま土日を迎える。その間も、愛香との連絡は取れないままだった。

メールが出来ないほど容態が悪いのだろうか……陽子と美紀に聞いてみたが、彼女たちが送ったメールにも、返信は来てないらしい。「インフルエンザとかじゃないの？」

裕也はそんな憶測を呟いて笑った。

陽子や美紀も、そうかもね。と半ば納得していた。

\* \* \*

日曜日、澪は朝一で父親の病院へ出向いていた。血液検査をする為だ。

休日の病院は静けさが漂い閑散としていて、この光景が澪は好きでは無い。しかし、彼女がこの病院に来るのは、できるだけ休診日なのだ。

静まり返った廊下は、何処か死の臭いを感じずにはいられない。検査を終えて廊下にすると、澪は思わず相手に出くわした。

「あ、愛香さん」

「ああ、澪ちゃん」

「どうしてここに？」

「う、うん。ちょっと検査にね」

愛香の答えに、澪は怪訝な笑みを浮かべる。

彼女の父親が大学病院の外科部長だと知っている澪は、どうしてわざわざこの病院に来たのか反射的に考えを巡らせたのだ。

父親のいる病院では、何か都合が悪いのだろうか……婦人科はな

いから、そう言つたことに関わりはないだろつ……それにしても何故。

「どんな検査?」

「うん。ちょっと、ね」

「そう……」

澪はそれ以上は訊かなかつた。

「じゃあね」

「うん。じゃあ」

二人は少しよそよそしい笑顔を交わして別れた。

第一検査室のドアが開いて、渉が顔を覗かせる。

「彼女、知り合いなのか?」

「えつ、うん。省吾君のクラスメイトよ。前に文化祭で親しくなつたの」

「そうか……」

渉が深く息をつくのを見て、澪は嫌な胸騒ぎがした。

「彼女、どうしてここへ？　お父さんが大学病院に勤めているのに」

「ああ、向こうから依頼があつたようだ」

「向こう？」

「彼女の父親だろう。向こうの外科部長直々に、ウチの病院に見てくれないかつて、父さんに依頼が来たらしい」

「知つてるの？」

「大学時代の後輩だそうだ」

愛香の父親の方が当然若いので、彼が自分の父親の後輩に当たるのだろうと、澪には直ぐに判つた。

澪の「どうして」は、本当はそんな事を訊いたのではない。あるいは、渉もそれを判つたうえではぐらかす様な回答をしたのかもしれなかつた。

「これから出かけるのか？」

「うん。午後からショウウちゃんと約束してる」

「判つてるとと思うけど、彼女の事は言つなよ」

「う、うん……判つてるよ」

病院での守秘義務がある」とは澪にも判つてゐる。父親の病院で受診をしないのは何か訳が在るのだ。

涉は澪が何かを感じ取つたのを察して、念を押したのだろう。澪は今見た愛香の姿をかき消すようにして、小さなバックを手に、病院を出て一度自宅へ戻つた。

日曜日の午後。秋晴れの下、省吾と澪は上野の不忍池の畔をブラブラと歩いていた。家族連れも多く、ここにきて子供の高らいだ声が響き渡る。

「ねえ、愛香さん……」

「えっ？」

「つうん。何でもない」

澪は今朝の事を省吾に言つてしまおつか迷つて、言葉を呑み込んだ。

「最近愛香に会つたの？」

「う、ん。ちょっと見かけただけだけど。それだけ」

池の水面みなもには青空が映りこんで、時折魚の跳ねる小さな波紋が見えた。

「そうか。アイツ、この前体調崩してさ、そのまま週末まで学校に来なかつたんだ。メールしても返事も来ないからちょっと心配でさ」

「そう……」

並木脇のベンチに腰をおろして、澪はカップルの乗つた池のボートに視線を移す。

省吾も彼女の隣に腰掛け、池の中央を眺める。

「何か、あまり人には言いたくない何かがあつたのかも……」

澪はそう言って、省吾の肩に頭をもたげた。

「ああ。そつなのかな」

澪が言つと何か妙に信憑性があつて、省吾はそれ以上何も言わなかつた。

「中では『澪はどうなんだ？』そんな言葉が過るのは仕方の無い事だった。」

## 【37】訪問

月曜日の朝、一度学校へ来た愛香だったが、授業は受けずに早退していった。

省吾は得体の知れない不安を抱えたまま、廊下で見た彼女の後姿を黙つて見送る。

クラスの中には、愛香が妊娠したのではないかと囁く者もいたが、省吾にはとても信じられなかつた。

もちろんそれがありえる経験を彼女自身がしていないとも思えなが、そんなヘマをするようには思えないのだ。

そう言つた情報はクラスの中では親しい陽子や美紀にも半ば謎だそうで、愛香自身は雑談の中でも決定的な発言はしないのだと言つ。もちろん、陽子も美紀も愛香が今更処女だとは思つていらないだろう。

昼休みに、省吾の携帯が引っ切り無しにバイブルーアクションした。相手先は非通知。非通知からこれだけコールが何度も掛かるなんてそうそう無い事だ。1分以上コールし続けるのが三回。省吾は四回目にかかった電話をトイレの中で受けた。

「ああ、やつと繋がったわ」

何となく聞き覚えのある声。いや、声よりもその関西弁だ。

「ま、真琴？」

「いやあ、覚えててくれたん？」

関西弁の知り合いなんて、他にはいない……

「もう大変だったで。あなたの番号調べて家に電話してな」「家に電話したのか？」

「そいや。いいやんか別に。若い声のお母さんやな。そんであんたの携帯番号教えてもらつてな……」

「いや、そんな事より何？学校は携帯で話すのは禁止なんだよ」

今日は、母親は休みだとつて朝から買い物に行つたみたいだが

直ぐに帰ってきたのだろうと一瞬思つた省吾だが、今はそんな事はどうでもいいのだ。

トイレで携帯を使つのも、メールならまだしも直接話すのは限界がある。

「そつは思つたんやけどな、ちょっと愛香の事でさ」

「愛香？」

省吾は電話を強く握りなおして

「愛香は、どうしたんだ？ 何で今田は直ぐに帰つたんだ？ お前、何か知つてるのか？」

矢継ぎ早に問い合わせの言葉を繰り出す。

「ああ、やつぱり今日も授業は受けんかつたんや。明日から入院やで」

「入院つて？ どうして」

「それは、彼女が話す氣になつたら直接訊くとええよ。あたしから言つのは失礼やしな」

「妊娠……なのか？」

省吾は躊躇いながら言つた。

人に言えない入院の理由といえば、真つ先に思いつくのはやはりそれだ。

「そつならよかつたのにな……」

彼女の明るい声が一瞬くぐもつた。

「なら何だ？」

省吾は苛立つた。

「だから、それは本人に訊くしかない。あたしにはいいまでしかやつてあげられへん。たぶん愛香は手術の前にあんたに会いたいはずや」

「手術？ 愛香、手術するのか？」

「あとは、あんたが自分の判断で行動しいや。ほんな」  
真琴は省吾の質問に応えずまま、電話を切つた。

……愛香は病気なのか？ でも何の？ どうして手術をするんだ？

疑問だけが省吾の頭を埋め切入ります。

彼はトイレを出ると、足早に教室へ戻つて鞄を掴んだ。

「おい、ショウ、バックレか？」

裕也がそれを見て声をかける。

「ああ、腹痛くなつたつて言つといってくれ」

省吾は途中で駆け足になつて駅へ向い、来た電車に飛び乗ると愛香の家に向かつた。

駅を降りて改札を抜けると、省吾は再び小走りになつて彼女の家を田指す。商店街の真ん中辺りで路地を入つて住宅街を抜ける。主婦の乗つた買い物途中の自転車に危うくぶつかりそうになるが、向こうは素知らぬ顔で行つてしまつ事に一瞬唖然として立ち止まり、再び小走りになる。

住宅街に入つて路地を曲がると愛香の家が在る。深く息をひとつくと、省吾は白い門扉の支柱にあるインターホンのボタンを押した。

間を置くと臆する気持ちが膨らんで、行動できなくなるような気がしたのだ。

機械の中で奏でるチャイムの音が、遠く小さく聞こえる。

「はい」

微かなノイズの後に聞こえた初めて聞く声は、愛香の母親のものだろうか。

「あの……愛香さんのクラスの者で北原と言いますが、愛香さんはいますか」

緊張する中で、省吾は出来るだけ丁寧な言葉を選んで発する。

「あ……ちょ、ちょっとお待ち下さい」

インターほんの向こう側で微かに慌てる素振りが覗えた。数分、いや一分ほどだったかもしれないが、門柱の前で佇む時間はやけに長く感じた。

インター ホンがプシッ と音を立て

「あの、どうぞ中へ」

その言葉を聞いて、省吾はやつと門扉を開いて玄関のドアまで歩いた。

ちょうど測ったように、彼が玄関の前に立つとドアが内側からゆっくりと開いて髪の長い女性が顔を覗かせる。

「ど、どうも……こんにちは」

省吾がギクシャクと小さく頭を下げると、彼女は笑顔になつて

「あ、いいえ。始めて愛香の母です」

細つそりとして少し背の高い黒髪の姿は、派手では微塵も感じない。

彼女は省吾を促すと

「さ、上がってください」

「あ、いえ、ここで。愛香さんは？」

その時愛香が階段を下りて来て、廊下に顔を見せた。

一人は無言で見つめ合つが、省吾も愛香も最初の言葉が出なかつた。

「よお」たまらず省吾が声をだして、軽く左手を上げる。

「うん……」

愛香も肘の所まで小さく手を上げた。

## 【38】熱情の妻

「お母さん、ちょっと買い物行って来て」「愛香が玄関まで歩いてくると、母親に言つた。

顔色もそんなに悪くは感じないし、いつたい彼女は何の為に手術が必要なのだろうかと、省吾は愛香の顔を見つめていた。

母親は省吾と愛香の二人を比べるように眺めると

「あ、ああ。そうね。じゃあ、ちょっと行って来るわ」

そう言って一端リビングへ引っ込んで、再び玄関に現れる。

「上がって」

愛香に促されて、省吾は黄色の一コーバランスをいそいそと脱いだ。

母親は省吾と入れ替わるように玄関のドアを開くと

「じゃあちよっと行つて来るわね。……一、二時間くらいで戻ると

思つかり

そう言つて、外へ出て行つた。

「来て」

愛香はゆっくつと廊下を歩いて階段を上る。

省吾はそのまま直ぐ後ろを歩きながら、彼女が着るザッククリとした藍色のワンピースの揺れる裾口に視線を漂わせていた。

「どうしたの？ 急に」

愛香は階段をゆっくつと上りながら、振り向かずに言つた。

「急について、お前にはどうしたんだよ。急に」

省吾は視線を上げて、左右に揺れる彼女の後ろ髪を見つめた。

「だって、あたしの場合は急だったんだもの」

「何がだよ」

愛香は一瞬黙つて、階段の最上段に足を乗せて止まる。

「もしかして、真琴に聞いた？」

「え？ あ、ああ……ちょっとだけ。でも、何がなんだかさっぱり

でさ。もつと寝込んだりしてゐるのかと思つたよ

「うん。けつこう元気よ」

愛香は止めた足を再び動かして部屋まで省吾を促すが、後は振り返らなかつた。

部屋のドアを開けた途端、ほんのりと甘い果実のような香りが省吾の嗅覚に届いた。

澪の部屋ほどではないが、愛香の部屋も充分大きかつた。白い壁にピンク色のベッドカバーがやたら目立つ。

ただ、木目調の勉強机と黒いアップライトピアノが、何処かシックでエレガントなイメージを醸し出している。

省吾は床に敷かれたグレーのカーペットの上に腰をおろす。カーペットは部屋の中央にだけ敷かれて、ピアノの下などはフローリングのままだ。

「何か飲む」

愛香は省吾と視線を合わせようとせずに淡々と身体を動かす。

「あ、ああ」

愛香の部屋には小さな冷蔵庫と食器棚が在る。彼女はそこから細長いグラスを二つ取り出して黒いローテーブルに並べると、冷蔵庫から出したアップルジュースをそれらに注いだ。

「はい」と愛香が省吾の前にグラスを差し出して、愛香も腰を落ち着かせた。

省吾はそれを一口飲んでグラスを置いたが、愛香は俯いたり窓の外を眺めたりして省吾と視線を交わそうとはしなかつた。

省吾も、何だか気まずさを覚えて彼女の目を見れない。

それから一人は黙つたまま、時間がだけが勝手に流れゆく。

外の庭木から小鳥の<sup>さえずり</sup>轡りが聞こえて、省吾は思わずそれに耳を傾けたりするが、こつしていくても仕方がないと腹を括る。

「おまえ、手術するつて……」

沈黙の中、省吾は言葉を発した。

「うん……」

愛香は省吾を見て、やけにサバサバ答えると僅かに微笑んだ。

瞳がキラキラと輝いているのは潤んでいるのだと彼にも判つた。視線を合わせようとしたのは、その瞳の奥を見られたくなかったのだろうか。

省吾は少し彼女と視線を交わしただけで、直視する事が出来ない。「何の……手術を？」

「何だと思つ？」

愛香はわざと大きな笑みを浮かべると、アゴをツンと突き出しておどけて見せる。

「そんなの判るわけないだろ」

それを見て、省吾は少し苛立ちを感じた。  
どうしてそんなに意地をはつて笑顔を見せるのか……その裏側をどうして見せてはくれないのか……

省吾は震えるような気持ちを隠せなかつた。

すると、愛香は着ていたワンピースの上から下着のホックを外すと、そもそもぞとブラを外してワンピースから抜き取つた。

淡いライラックのそれは、カーペットにパサリと落ちる。

「な、何してんだよお前」

省吾は反射的に、後ろにたじろぐ。愛香の考えている事が読めないからだ。

そして、愛香は膝立ちになると、ローテーブルを迂回して省吾に近づいた。

省吾はどうしていいのか判らずにとりあえず後ずさりするが、暫く後ろへ下がると背中がベッドの縁に当つた。

大きな窓にかかる真っ白なレースのカーテンを抜けた陽差が、少し眩しく感じた。

「触つてみて」

愛香は膝たちのまま省吾に近づくと、胸を突き出すでもなく直立したまま彼にそう言つた。

しかし省吾には、彼女が何処を触れと言つているのかは理解でき

た。

「でも……」

「いいから触つて」

愛香の真剣な表情に、彼女が「冗談でこんな事をしているのでは無いと悟つた省吾は、反射的に利き腕ではない右手を彼女の身体に伸ばす。

何故か利き手を出す事に躊躇した。

「違う、逆」

「逆?」

「右を触つて」

愛香に言われて、省吾は彼女の右胸を触るために結局左手を差し出す。別に、右手のままで触れるのだが、向かい合つた状態ではそれが自然な行為だらう。

後に着いた右手と寄りかかるベッドに自然と体重が乗つて、気持ちは後ずさりを続けていた。

澪よりは明らかにふくよかな彼女の胸を真直にして、差し出した手を寸前で止める。

省吾は胸にあつた視線を愛香の顔に向けた。彼女が何をしようとしているのか判らなかつたから、何とかそれを読み取ろうとしたのだ。

セックスを強請つ<sup>ねだ</sup>っているようでもない。

その時、愛香は省吾の左手を掴んで自分の胸に押し当てる。

ワンピの生地越しに明らかな彼女の肌の感触と柔らかい胸の造形の細部が、そして暖かな体温が伝わつた。

「もつとちゃんと触つて」

「いや、一応触つてるけど……」

省吾は思わず苦笑して見せた。あまりにも愛香の胸の感触がリアルで、何も考えられなかつた。

愛香はワンピースの裾を空いていた方の手で大きく捲り上げると、掴んだままの省吾の手をその中に素早く入れて直接胸に押し当てる。

「なつ、お前……」

「ちゃんと触つて」

再び愛香は真剣な表情で言った。その瞳からは、今にもガラス玉のような霧が零れ落ちそつた。省吾は困惑するばかりだ。

「そんな事言つてもさ」

彼女の胸は熱かった。しかし、愛香の胸の温度を直に感じながら、省吾は微かな違和感に気づく。

「お前……これ……て？」

省吾はそれ以上言葉が出なかつた。乳首の下に微かなシコリを感じたからだ。

ほんの小さなものだらう。しかし、確かに何かが皮膚下に在る。彼は真剣な顔つきで、それを親指の腹で撫で回すと

「痛いのか？　これ」

愛香は小さく首を横に振つた。

「これつてさ……」

省吾はその後の言葉が言えなかつた。

「乳癌だつて」

「に、乳癌？　そんな……」

自分の指先に感触があるにも関わらず、半分は愛香の言葉が冗談だと思った。いや、彼はそうであつて欲しいと思つたのだ。

「知つてる？　今、二十五人程度に一人の女性は乳癌になる確率なのよ」

「そんなんに？」

省吾はやけに口の中が渴いているような気がした。

「でも、そんなん……周りになつた人いなーぜ」

「だから、統計的確率よ」

「確率……？」

「そう、だからあたしがなつても別に不思議じゃないのよ」

愛香は、穏やかな口調で言った。

省吾は眉を潜めると「直るのか？」

「大丈夫みたい。早期発見つてやつかな……」

愛香は小さく微笑んで「でも、この胸はなくなると思う」  
省吾が引き抜こうとした左手を、彼女は両手で包み込むようにしてその胸に抱いた。

「無くなる前に触つて欲しいじゃん……」

大粒の雫がその上に零れ落ちる。

小さく震える生地に染み渡るその雫は、憂愁のパトスとなつて省吾の手に届いた。

## 【39】温度

省吾は言葉が出なかつた。

やけに喉が渴くのは、うまく唾が出てこないせいだと思った。  
自分は男だし、女性が胸を無くす痛みは計り知れないと想像はしてみても、その纖細な精神の奥底までは判らない。

ただ、この左手が触れた温かくて柔らかなものが彼女の身体の一部で、それが無くなるのかと思つとやりきれない思いだつた。

「胸のない娘は抱く気になる？」

愛香は俯いたまま、小さな声で呟くよつて言つた。

「そんなの、関係ないだろ。好きになつたら関係ないよ」

省吾は自分でも不思議なほど即答で応えた。

「あたし……まだなんだ」

「まだつて？」

愛香はフツと笑みを浮かべて「まだした事ないんだよ」  
小声で、しかも粗雑に言い放つ。

愛香の言葉に省吾は少しだけ驚いた顔を隠しきれなかつた。  
そんなのとつぐに経験済みのようなイメージがあつた。

愛香はワンピースを捲り上げると、一気にそれを脱ぎ捨てた。恥ずかしさを前面に置く余裕など無い。

夏休みが终わつた始業式の日、あれだけ健康的に日焼けしていた彼女の肌は、眩いほどに日くなつていた。微かにビキニーの水着跡が残つている。

「俺さ……」

愛香は省吾の言葉を遮るよつて、彼の頭を大きく胸に抱え込んで抱きしめた。

「初めてだから……ショウに触つて欲しかつた。この胸があるつことに……」

省吾は両腕を彼女の身体に絡めた。

まるで激流に身を投じたように、流れられる自分を止める事は出来なかつた。

思つた以上に愛香の身体は細くて、その纖細な肌の感触を両腕の全てで感じ、産毛がフツと逆立つた。

そのまま少し毛足の長いカーペットに愛香を押し倒す。

甘いピーチのような香りが彼女の上気した身体から香つて、省吾は脳の奥のほうでその芳しい香りを堪能する。

省吾は彼女の右胸に、そつと唇を這わせた。

この、彼女の一部が無くなつてしまつのかと思つて、それがどうにもたまらなく愛おしく感じて切なくなる。

愛香が吐息を漏らして身体を僅かにくねらせると、脳の下に微かにアバラが浮き上がつた。

彼がそれをそつと手でなぞると、彼女はフツと息をもりすよつて笑つた。

「ごめん、ちよつとくすぐつたい

肩にアゴを埋めるようにして省吾を見下ろす。

省吾はそんな彼女と視線を交わすと笑顔を返して、愛香の身体伝いに這い上がり目線の位置を並べた。

「じ、ごめん。続けて」

「いや……」の先はこれから出合つ誰かの為に取つて置けばいいさ」省吾は愛香の肩にそつと手を添える。

「でも……」

「お前なら、胸が無くたつていい男いぐらでも捕まえられるつて」「じゃあ、捕まえられなかつたら、ショウガ責任とつてくれる?」

「いや、それは……」

困惑する省吾に愛香が自分からキスをした。それは初めてではないが、彼女にとつて本氣で好きな相手とのファーストキスだつた。熱い吐息が一人の間に交わされると、一瞬心が通じたような気がした。

唇をそつと離した省吾は

「お前、寒くないのか？」

愛香はそう言われると急に自分の姿が恥ずかしくなって、起き上がる同時に慌ててワンピースを拾い上げて頭から被る。クシャクシヤになつた髪を手グシで一所懸命に直した。

省吾も起き上ると、後ろに着いた手にカサツと何かが触れて振り返る。それは最初に愛香が外した下着だった。

「ほら、忘れ物だよ」

彼は慌ててそれを拾うと、足を投げ出すように座った愛香の膝元にそつと放り込んだ。

彼女は両手で丸めるように下着を掴んで

「じゃあ、ちょっと着けるからあっち向いてて

「えっ？ だつて今」

「いいから

「わかつたよ」

省吾は少々不服そうに後ろを向いた。

今さつき自分に裸をさらした彼女が、どうしてそんなに恥ずかしがるのか、その複雑な心理は判らない。

カサカサと衣服が身体に擦れる音が聞こえる。

その音が消えて「もういいのか？」と訊こうとした時、省吾は愛香に後から抱きしめられた。

「ありがとう」

「あ、ああ」

素直に後を向いていた事に言つたのか、それとも彼女の最後の胸を抱きとめた事に言つたのか判らなかつた。

「手術は何時なんだ」

「早い方がいいからつて、3日後

「そつか……」

省吾は自分の首に回した愛香の腕に、そつと自分の手を添えると見舞いとかつて、行つてもいいのかな

「うん、ショウだけは入れてあげる」

彼女の腕に添えた省吾の手に、何度も熱い雫が落ちるのを感じたが、彼はわざとそれを田で確認しようとはしなかった。

愛香の肩が震えているのが判つたから。

翌日から再び学校を休んだ愛香は、担任の口から病氣療養の為と伝えられた。陽子も美紀も心配していたが、省吾は何も言わなかつた。

時が来れば、陽子や美紀には愛香自身が話すかもしないし、言わないかもしない。

裕也は「しばらく焼肉は無しだな」

そう言つて少々他人事のように笑つていたが、内心は心配している事が省吾には判つた。

窓の外を見つめる彼の笑つた視線が、何時に無く淋しそうだったから。

それでも彼女の事を話す気は無い。周囲の連中と同じく、何も知らない素振りで日常を過ごす。

省吾は、それが彼女に対するの礼儀でもあるような気がした。

## 【40】秋の陽差の下

省吾の日常は愛香のそれとは関係無しに、今までとなんら変わらない。

今頃手術なのか……省吾はちょっとびり冷たい朝の風を頬に感じながら駅のホームで空を見上げた。

乾いた喧騒の中で、頭上に広がる虚空だけは何事も無く優美に広がりを見せる。

省吾は視線を落として愛香の胸を感じた左手を見た。熱い温もりがその掌に蘇える。

……自分にしてやれる事はない。今は。

近くの踏み切りの音が響き渡ると、省吾は顔を上げて乗降位置へ歩み寄つた。同時にアナウンスが流れて電車が進入して来る。

扉が開いて澪の顔を見ると、心の中に暖かい火が灯る気がした。

しかし、その日は一人共口数の少ないまま、省吾は何時もの駅で降りる。

省吾は、愛香が南澤病院……つまり、澪の家の病院に入院し手術を受ける事を知っている。そして澪も、愛香が自分の病院へ入院した事や、今日彼女が手術をする事を知っていた。

ただ、省吾も澪もそれをお互いに言うべきか言わないべきか迷うあまり、つい口数が少なくなる。

おそらく知っているだろう。それは一人共感じていた。

しかし、その話題を一人で話していいのか、迷っていたのだ。それでも、お互いに彼女を思う不安が話題の提示を急き立てて、それを呑み込む事の繰り返しだった。

何かを言いたげに電車を降りる省吾の笑顔を、澪は同じ類の笑顔で見送った。

「澪ちゃん」

愛香は、早朝に病室を訪れた澪の姿に、ベッドで身体を起こした。

「通院の日?」

愛香はそう言つて笑う。

「つづん。あたしはほとんど病院へは来ないから」

澪も笑顔を投げかける。

「様子が気になつて……あ、ごめん。お兄ちゃんに訊いて……」

「そう」

「手術、頑張つてね」

「うん。でも、頑張るのはお兄さんでしょ」

執刀医は南澤涉。澪の兄だ。

「それもそうだね」

澪は思わず声を出して笑つた。

「元気そりでよかつた」

「ありがと」

愛香は澪を見つめて言つた。臨死と蘇生を繰り返す彼女を前に、澪の白い笑顔は相  
弱音は吐けないと思つた。どちらが幸福なのかなんて、今は考えら  
れない。

ただ、これから手術を目前に控えた愛香にも、澪の白い笑顔は相  
変わらず果敢なげに映つたのは確かだ。

澪はベッドサイドの小さな丸椅子にそつと腰掛ける。

「あたしの治療の事、知つてるんでしょ」

澪の言葉に、愛香はどう応えていいのか判らなかつた。ただ、何  
故澪がそんな事を知つているのかが、不思議だつた。

「どうしてそれを?」

澪は、窓の外に広がる朝の眩しさに染まる街並を眺めると

「死の淵をさ迷うとね、普段は見えないものが見えて、普通は聞こ  
えるはずの無い事が聞こえたりするの」

澪は外に向けた視線を愛香に向けて微笑む。

「いいよ。ショウちゃんに言つても。あたしの事」

「そんな事……どうしてあたしに言つの？」

「ショウちゃんが好きなんでしょ」

澪は何でも知っている。

尋常ではない治療を繰り返す彼女の言葉は、ひたすら信憑性に包まれて、愛香の心中へ入ってきた。

「言わないよ……ショウに隠すのが辛いなら、自分で言いなよ」

愛香の言葉に、澪はクスッと笑つて俯いた。

「そうなのよね。別に悪い」としてるわけでも無いのに、隠すのは辛いよね」

それは愛香の心に小さな針を刺したような、チクリとした微かな痛みをもたらした。

自分は省吾に身体を預けようとした。彼が澪と付き合っていると知りながら、彼が澪を好きだと知りながら、自分の哀れな姿を楯に省吾に抱かれようとしたのだ。

「澪ちゃん、あたし……」

「でもわ」

澪は、愛香の言葉を遮るように口を開いた。

「ウソも大事だよね。ていうかさ、それを口に出さない事で誰も傷つかないなら、それもいいのかなって」

彼女はそう言つて椅子から立ち上がると

「じゃあ、あたし行くね。お兄ちゃんは、アレでもお父さんも認める名医だから安心してね」

「うん。大丈夫、ウチのお父さんのお墨付きだもん」

愛香は、病室のドアを開ける澪に向つて微笑んだ。

それと入れ替わりに、看護師が入つて來た。



## 【4-1】罪と罰（前書き）

【中間あらすじ】血液の病気治療の為に禁断の治療を続ける澪と付き合つ省吾。その省吾を思い続ける愛香。

しかし、愛香を突然の病魔が襲つた。彼女の入院前に、省吾は愛香の思いを受け取る。

澪は愛香の病状を知つていた。彼女が入院したのは、自分の父親の病院ではなく、澪の父親が運営する病院だったのだ。

## 【4-1】罪と罰

庭木の木洩れ日が地面を照らすと、まだに光を浴びたスズメたちが小さく跳ね回る。

入院患者の誰かがこいつそり朝食の残飯の一部をそこに捨てるのを知つて、彼らは毎朝木洩れ日の中に入り込んでくる。

秋の陽差に白い病棟が聳え、窓には青空が映り込み、白い雲が流れる。

「どうや？ 具合」

術後、両親以外で初めて愛香の病室を訪れたのは、真琴だった。もちろん、彼女が何処の病院に入院したか知る者は少ないので、これから先も訪れる姿は限られるだろう。

「うん、少しだるいけど」

小さく笑う彼女に、真琴は大きな笑顔を返す。

「まあ、当たり前やな。それだけの手術だつたんやし」

愛香の手術は無事終わって、術後の経過も順調だった。

「真琴、学校は？」

「そんなもん、バツクレや。何時もの事やん」

真琴がそう言つて笑うと、愛香も小さく笑つて

「そうだつたね」

窓から入る午前中の淡い陽差は、揺らめくよつて愛香の白い頬を照らす。

真琴はそんな彼女の姿がいかにも弱々しく見えて、胸に何かが込み上げる。

「愛香はあれやな、マスカラなくつても睫毛長いんや。うらやましい。あたしなんか、マスカラ取つただけで『おまえ誰や』言われるで」

自分で意識して笑う事なんて、彼女の日常にはあまり無い事だった。

「今日は天気よくなつて外は暖かいから、はよつ散歩出れるよつたな  
るとええな」

真琴は喋り続ける。

愛香はそんな彼女の話を聞きながら、笑顔で相づちをうつ。  
何時も喋ると止まらない真琴の話が、全く苦にならなかつた。  
真琴はベッドサイドに置かれた小さな丸椅子に腰を下ろして、小  
さく息をつくと

「省吾には、会えたん？」

「うん……会えたよ」

「うー、うーめんな。余計な事して。ほんま、あたしらしくない事した  
わ」

真琴は苦笑する。

愛香は小さく首を振ると

「ううん。ありがとつ。ショウガ来てくれると思わなかつたから、  
嬉しかつた」

「やうか……そやつたら、あたしもおせつかいの甲斐があつたかな」  
そう言つて、真琴は首を小さくすくめて笑う。

「でも真琴。よく、省吾の携帯判つたね」

「そんなもん、家にかけて訊いたら判るやん」

「家に電話したの？」

「そや。お母さんとかよつとだけ、仲良くなつたわ」

「でも、省吾の番号は？」

学校の違う真琴が、省吾の省吾番号を知るはずもない。

「そうそう、大変やつたで。あの辺の住所は愛香に聞いとつたから、  
電話帳で片つ端から北原つて家に電話したわ」

「全部？」

愛香は思わず目を丸くした。

「でもな、あの辺に北原つて家は6軒しかなくて、3軒目にヒット

したで。あたし、くじ運いいからな」

真琴がそう言つてあつけらかんと笑うので、愛香もつられておか

しくなつた。

彼女はそんな愛香を見つめると

「でも、省吾には澪ひやんつて娘があるんだろ?」

「うん」

愛香の返事に、真琴は彼女の瞳を見続ける。

愛香は彼女の視線の意味を感じて、クスクスと吹き出すように笑つた。

「していないよ。あたしたち

「そ、そなん?」

「あたしは、して欲しかったのかもしれないけどね」

「ち、ちょっとくらいしてやつたらいいのにな。あいつも、意外とケチやな」

真琴らしく言葉だつた。

「そんな気軽に言わないでよ」

「そうやけど……」

「充分満足させてはもらつたから、いいよ」

愛香の穏やかな笑顔に真琴は怪訝な笑みを浮かべたが、彼との間に何か吹つ切れる出来事があつたのだと確信して、直ぐに安堵の笑みに変わつた。

「あいつも、罪なやつちやな」

……罪。罪深いのは誰なのだろうか。

省吾は彼なりに問題を抱えて、これからも苦悩するだろう。澪は何時まで彼に自分の事を隠し続けるのだろう。そして、省吾が受け止めてくれた気持ちをこれからどうすればいいのだろう。

愛香は真琴に小さな笑みを返して窓の外に視線を移すと、遠くの空に聳える高層ビル群を見つめた。



## 【42】3つの影

辛い事や嫌な事があつても、日常は何処までも続いてゆく。

愛香の姿を教室で見なくなつても、省吾と澪の日常はこれまで通りに流れるのだ。

お互に口数少ない日が続いたが、愛香の手術が上手くいったと聞いてからの二人は、表向きは今まで通りに過ぎじて、映画を観たり、買い物をしたり、公園をぶらついたりした。

省吾は愛香に気を取られて、澪の僅かな心の変化には気付いていなかつた。

愛香の存在が原因ではない。澪は予てから思う事があつて、省吾と過ごすうちにその気持ちが心を満たしていった。

それは希望めいた明るいものではない。

いや、彼女にとつては、ある意味希望に繋がる新しい世界への旅立ちを意味するのかもしれない。

\* \* \*

「おー、落ち着いてとにかくこっちへ来い」

省吾は僅かに足を踏み出して言った。

「こっち来るな。来たら飛び降りる」

……ふざけんなよ。てめえが落ちたつて俺には本来関係ないから、そんなの知った事じやねえんだよ。

「とにかく落ち着けって」

放課後、省吾と澪は東宝撮影所近くにある、大型ショッピングモールへ来ていた。

平日の夕方という事もあり、一階の食料品売り場以外は学生の徘徊がいるだけでフロア全体は意外と空いている。

二人は暇つぶしに屋上へ上がって、金網越しの風景を眺めた。

「学校の屋上からここが見えるんだ」

「へえ、あたしの学校からも見えるかな」

「どうだろう」

省吾は遠くに小さく白い校舎を見つける。

「あれ、ウチの学校かな」

「あれは小学校じゃない？ ショウくんの学校はたぶんその向こうに見えるやつだよ」

澪がさらに遠くを指差した。

けつときよく一人共イマイチ正確にはわからない。

屋上は誰もいなかつた。そう思っていた。

ちょうどそれ違いに一組のカップルが身体を寄せ合いながら屋内に入つて行つた所だ。見渡す限り、人影は見えなかつた。

しかし、少し離れた植木の並んだところで、不意にガサガサと音がして人の気配を感じた。

「向こうに誰かいるんだな」

「植木の影で何してんのかな」

「自殺とかじやん？」

省吾はまったく冗談のつもりだつた。

そんなヤツ間近で見たこともないし、まさかそんな場面に出会ひはずもないと思っていた。

しかし再びガシャガシャンと激しい音がして、振り返る。黒い学生服の人影が、転落防止の高いフェンスを乗り越えていたのだ。

「ショウくん、あれって……」

澪は思わず呆気にとられていた。

「おい、何やつてんだよ。危ねえぞ」

省吾は何かの冗談だと思って足早に近づいた。澪もその後を小走りに追う。一人のいた場所から20メートルも離れていなかつた。

「おい

省吾は再び声をかけたが、足元に何かを見つけて思わず足を止める。

揃えて脱いだスニーカーの上には携帯電話が置いてあつた。よく見ると、男は靴を履いていない。

「シラウくん、これって……」

澪もそれを見て一瞬息を飲む。

夕方の風が、屋上を吹き抜けてゆく。

「来るな」

フーンスの向こう側へ降りた男は、省吾と澪の姿に気付いて叫んだ。

「お、おまえ、どうする気だよ」

「ここから飛ぶよ」

「何でだよ」

「あなたには関係ないだろ」

省吾は澪を見つめた。

その通り俺たちは関係ないんだから、行くか。省吾はそう思ったが、澪は省吾を見つめた後、再びフーンスを越えた男を見る。そして、植木の間に置かれた靴と携帯を見下ろすと

「この携帯は、何か意味があるの?」

男に訊いた。

「その携帯に、俺をイジメた連中のリストが入ってる。それで、あいつも捕まる」

「そんなの判らないだろ?」

省吾が言つた。

「最近はイジメや恐喝が原因で自殺したら、罪に問われるじゃないか

か

「それは稀なケースだぞ。それに、直接お前を殺したわけじゃないんだし、未成年なんだから直ぐに出てくれるわ」

「う、う、う、う…うるさい」

男は泣きそうな顔で叫んだ。

平凡な黒髪が風で靡いている平凡な顔立ちは自分より幼く見えるが、おそらく彼も高校生だろうと省吾は思った。

……面倒なもん、見ちゃったなあ。

「どうする？」

省吾は澪に小さく耳打ちした。

「とにかく、止めさせよう」

「俺たちが？」

「だつて、他にどうするのよ」

澪はそう言って男の方を向くと

「あなた、名前は？」

彼は狭い足場で向きを変えるので手がイッパイといった感じだった。

「おい、名前くらい教えろよ」

省吾が再び訊く。

「及川。及川幹久」

及川は完全に身体を外側へ向けると、首だけを一人に向けて言った。金網をがつちりと掴んだ手は、明らかに震えている。

「及川君は、何年生？」

「うるさいな」

「少しくらいお前のこと教えるよ。俺たちは高一だ。そんなにお前と変わらないだろ？」

省吾はヤケクソで及川に話しかける。

「全然違うよ」

「な、何が違うんだよ」

「俺、彼女なんていたことないし、女と歩いた事だってないよ。チヤラチヤラしたあんたに、俺の気持ちは判らないよ

及川は身体を震わせて叫ぶ。

彼なりに主張はしたいのだろう、声が一人に届くように顔だけはこちらへ向けていた。

しかし、今からしようとしている行為の理由としては主張がずれていた。

「イジメが原因で死のうとしてる割には、俺たちの事羨んでるぞ」

省吾は再び澪に耳打ちした。

低くなつた西田に照らされた三人の影が、屋上に長く伸びていた。

## 【43】揺らぐ心

「お、及川君。あなただって、これから彼女くらいできるよ。今そこから飛んだら、それこそそれっきりなのよ」

澪は何とか及川の気持ちを落ち着かせようと、声をかける。

及川は何も応えなかつた。ただ、屋上の風が彼の学生服の背中をたなびかせている。

不安が過つたのか、彼はフェンスにピタリと背を当てた。西の空に夕陽が落ち始めると、空が緋色に輝き始めて辺りは暗くなつてきた。

「及川。お前、病気になつた事あるか？」

「どうしてそんな事訊くんだよ」

「お前、病氣で死にそうになつた事なんてないだろ。今までに、死にそつになつた事なんてないだろ？」

「そんなのないよ。普通無いのが当たり前だ」

話している間にも、どんどん周囲は暮色に変わつて、植木が黒い影の塊になつていた。

「病氣で生きる為に、身体の一部を切り離さないといけない人だつているんだぞ」

省吾の言葉が、愛香の事だと澪はすぐに気がついた。

「そ、そんなの俺に関係ない」

「お前、何でも人の事は関係なくて、羨ましいだけなのか？ 誰かを羨むくせに、誰かの苦悩は関係ないのか？」

「どうしてそんな事言つんだよ。俺だって本当は死にたくないんでないさ。でもしょうがないんだ。あいつらに思い知らせる為には、仕方ないんだ」

及川はそう言つて、身体の向いている外側に顔を向けた。

陽は落ちかけて、辺りは暗くなつていた。ちょうど街路灯の光が三人を照らしている。

「お前、友達いないだろ」

省吾は息をつくと、少し低い声で言った。

及川は何故かそれに反応して、再び一人を振り返る。

「お前、自分の事ばっかりだから、友達出来ないんだよ。だから、イジメの標的になるんだ。もっと他人に興味を持つよ。羨ましいとかじゃなくて、アイツは大変だとか、あの人は可哀想だとか、お前の周囲にお前より大変な人は本当にいないのか？　お前より苦悩している人はいないのか？」

省吾は言葉を発しながらフェンスに近づいていた。

「うるさい、そんな事はどうでもいいんだよ」

及川は省吾が目の前に来ていることに気付いていないのか、興奮してどうでもよくなつたのか、そのまま話し続けた。

「俺は疲れたんだ」

「そんなんで、そこから飛ぶ勇氣はあるのか？」

「勇気なんていらないよ。絶望感だけで自殺はできるんだ」

「じゃあ、どうしてそんなに震えてるんだ？」

「うるさい、うるさい、うるさい！」

そう叫ぶと、及川がフェンスを掴んでいた手を離す。が、省吾はフェンスの隙間から左手を出して、彼の制服を掴んだ。急いでもう片方の手も添える。

上下に分かれて張られた金網は、真ん中に手を通せるほどの隙間があいているのだ。

服をガツチリ掴むと、彼は少しも前に踏み出せなかつた。

及川は逆情したように

「離せええ」と叫んで、制服のボタンを外そつとしたが、今度は漆が手を差し出してズボンのウエストを掴む。

「お前、ズボンも脱いで飛び降りる根性あんのか？　最悪のカツコウだぞ？　滅茶苦茶格好悪い死に様だぞ」

省吾の言葉で及川は3つ目まで外した制服のボタンから手を放し、身体の力が抜けると、急に肩を震わして涙を流し始めた。

一度氣を落ち着かせれば、死ぬのが怖くなるのが人間だ。

「とにかく一回こっち来いよ。とりあえずコーヒーでも飲もうぜ。

死ぬのなんて、何時だってできるだろ」

省吾は彼の制服を掴んだまま言った。

「ね、そうしようよ、ね」

澪の言葉で及川はゆっくりと身体の向きを変えると、フェンスをよじ登つてこちらに降りてきた。

金網の隙間に慌てて突っ込んだ省吾の左手の甲が、浅く擦りむけて血が滲んでいた。

省吾が何気なく見た屋上の出入口には、警備員が駆けつける。

三人は気付かなかつたが、屋上に顔を出した誰かがその光景を見て、警備を呼んだらしい。

「あたし、自殺しようとする人つて、初めて見た」

駅まで歩く帰り道、暫くの沈黙の後澪が言った。

事情を警備に聞かれて少しの間拘束された後二人は解放されたが、及川は保護者を呼ばれている様子だった。

「俺だつて初めて見たさ」

「びっくりしたね。あんな元気なのに、死にたいんだね」

澪の言葉に省吾はどう応えていいのか判らない。それでも、何か言わなければいけないような気がした。

理由は、人それぞれって事だろ。ああいうのは心の問題だからな

……

省吾はそう言って、何となく澪の手を掴んだ。

冷たい手は、小さく握り返して来た。

\* \* \*

澪にとつての1週間は思いの外早くめぐつて来る。  
もつとゆっくり時間が流れればいいのこと、金曜の夜は何時も思う。

彼女は土曜日の朝起きるのが怖い。  
それでも省吾にはそんな気持ちを語られないよう、云ひずつと明るく過ぐしている。

「お兄ちゃん、あたし……」そのまま眠つたらダメなのかな」「診療ベッドに横たわつた澪は、機器の電源を入れる兄に向つて言った。

「何を言つてるんだ、澪」

「あたし、何だか疲れちゃつて……」

「生きたくても、生きられない人が五萬といいるんだぞ。生きるチャンスがあるなら、それを精一杯試みる義務があるだろ?」「義務……じゃあ、あたしは義務で生きてるんだ」

澪がそんな事を言うのは初めてだった。

澪はそんな澪の精神状態を察した。

「そうじゃない。努力する義務があるって事さ。生きられるうちはね」

「その義務は何時まで続けなくちゃいけないの……」

「どうしたんだ……省吾くんと喧嘩でもしたのか?」

澪は澪に優しく問い合わせた。

彼女は小さく首を横に振る。

「あたしは、ただ生きるだけで精一杯で、彼を満足させてあげているか判らない。でもショウちゃんはいつも優しくしてくれる」「

「好きな女に優しくするのは当たり前だな」「でも……」

澪は最近思う事があった。自分は本当に誰かと付き合ひの資格があるのだろうか。毎週土曜日は自宅療養で彼氏に会う事も出来ない。臨死と蘇生を繰り返す事で、魂が薄っぺらなものになっていく気さえする。

誰かを支えたり支えられたり、そんな対等な付き合いが出来るのだろうか……

自分と付き合って続ける限り、省吾はきっと幸せになれないのではないか。

しかし、澪は今日もそのまま意識が薄れて、1分20秒間の幻想へと旅立つ。

## 【44】甘酸っぱい微笑み

小波に追い立てられたマリンブルーの風は、白い建物にぶつかって弾け飛ぶ。

日曜日の午後、日中の風もだいぶ肌寒くなつてコートやブルゾンを着込む姿が当たり前になつた。

「ねえ、今度の連休何処に行きたいな」

ゆりかもめに乗つてお台場に来た省吾と澪は、比較的空いている船の科学館の白いカフェテラスで低い松林越しの海を眺める。

「連休つて、来週末の？」

澪は風にたなびいて頬にかかる髪の毛を、指でそつと払い除けて頷いた。

「でも、土曜日挟むだろ？」

「いいよ、別に」

「別につて……」

「少しくらい大丈夫よ」

省吾は戸惑いを隠せなかつた。今まで土曜日に出かけた事など無い。それは、彼女が土曜日に治療をする事の絶対的必要性を意味していると思つていた。

それなのに、澪の方から何処かへ行きたいなんて、何か不自然さを覚える。

「お泊りでさ、何処か行こう。そんなに遠くなくともショウちゃんと一緒に夜を過ごしてみたい」

風に吹かれながら低い太陽に照らされた澪の頬が白く反射して、省吾はそれに自分が照らされているような錯覚を感じた。

「澪がいいなら、俺はいいけど……でも他の曜日になら……」

「じゃあ、決まりだね。何処行こうか。帰りに紀伊国屋であるぶとかみよ」

澪の明るい笑みは、白く陰つて省吾の胸をくすぐる。何故そんな

思いになるのか判らなかつたが、きっと少しだけ澪の心が彼には見えたのかも知れない。

白く黒でしない砂丘を漂うよな、さ迷える彼女の心が……

\* \* \*

「どうしたの？ 浮かない顔して」

病室のベッドで愛香が微笑んだ。

省吾は彼女の見舞いに来た。予定は無かつたが、何となく足が自然にこの病院のこの病室へ向いた。

ニットキャップを被る彼女の笑顔にも、もう慣れた。

「まだ、暫くかかるのか？」

「うん、もう暫くね。経過は順調だつて。でも転移がないかまだ様子を見ないといけないし」

「て、転移？」

「ほら、脇の下とかリンパ腺が近いから転移もし易いらしくて」

「転移してたら、どうなるんだ……省吾には訊けなかつた。」

「そつか……」

省吾は無理に笑顔を作ると、窓の外に視線を向ける。

夕映えに浮かぶ街並が、黄昏色の陽炎のように霞んで見えた。

「どうしたの、今日は？」

愛香は省吾の横顔を覗き込むように聞いかけた。

二人はまるで、患者と見舞いが逆の立場のような表情だった。

「澪が、土曜日に出かけようつて言つんだ」

「治療は？」

愛香は土曜と聞いて直ぐにそつ返した。

「解らない……平気だつて……本人は」

「なら、平気なんじやないの？」

「そつなのかな……」「怖いの？」

省吾は愛香の言葉に振り返る。

「彼女が全てになるのが怖いんじゃないの？」「全て？」

「省吾は、いろんな楽しい事のひとつとして彼女と付き合つてゐるかもしれないけど、彼女はあなたと付き合つことが全てかもしないのよ」

愛香の言葉が、省吾の心に重く圧し掛かる。

今までそんな事は考えた事が無かつた。

彼女が自分に対してもんな気持ちのかは考えた事があつても、彼女自身が自分と付き合つ事をどう考えているかなんて思つても見ない。

……自分と付き合つことが澪の全て？

彼女の気持ちをそんな重いものには感じたことが無かつたし、普段の澪のはそんな素振りは全くと言つていいほどなかつたから。しかし、見た目が全てじゃない事ぐらい省吾にも判つてゐる。

「出かければいいじゃん。彼女が行きたいって言つんでしょう」

愛香はそう言つて、手元のみかんをひとつ剥くと、半分を省吾に渡した。

「何がが起つても、澪ちゃんは覚悟してゐんだわ」

「覚悟？」

愛香は、澪の事を全て話してしまおうか迷つていた。

しかし、自分の口から言つべきではないだろつと思つた。言つべき時が来たら、きっと彼女が自分で言つだらつ……

それは、真琴が愛香に対してもんな気持ちと一緒にだつた。

そんな口は近いのかもしない。

澪が全てを省吾に打ち明ける口は、そつ遠くない口に訪れるとい愛香は思つた。

そんな不安と困惑した気持ちを悟られなによし、彼に優しく微

笑んで、本当はあまり食べたくないみかんの欠片を口へ入れた。

## 【45】温泉宿

病院の出口で省吾は後ろから呼び止められた。  
もちろんここは南澤医院。呼び止めた声の主が、聞き覚えのある男性だと省吾はすぐに気づいた。

「あ、涉さん」

「よかつた、ちゅうとキミの姿を見かけて……神崎さんのお見舞いかい？」

「え、ええ」

「彼女は順調だから、安心して」「有難うござります……」

省吾はさう言つていいのか判らないまま、言葉を発した。

「ちゅうと時間あるかい？ コーヒーでもどう？」「

省吾は涉に促されるまま、自販機のあるロビーへ歩いた。涉は缶

コーヒーを一本買つと、ひとつを省吾に手渡す。

「喫茶店はもう終わつてゐるから、こんなので悪いけど」「いいえ、有難う御座います……」

省吾はそう言つてコーヒーを受け取る。

小ちなベンチに一人は腰掛けた。

「週末濶と出かけるつて？」

「いや、あの……」

「隠さなくていいよ。一応アイツの主治医として治療日の行動は把握しておかないと」

涉はそう言つて、穏やかに微笑む。

「どうなんでしょうか……？ 土曜を挟んで連れて歩いて大丈夫なんでしょうが？」

省吾は不安な表情を隠すこと出来なかつた。

それは、相手が濶の兄といつても、彼女の主治医だからだろう。涉は沈黙したまま静かにコーヒーを口にして、軽く息をつく。

「結論からいえば、NOだね」

彼はキツパリと言つた。いかにも責任のこもつた言い方で。

省吾は心の中で「やつぱり」と呟いた。

その声が聞こえたかのように、涉は続けた。

「今は週1の治療がギリギリなんだ。もう少ししたら、もつと間隔を詰める必要があるだろう……ただ、アイツが今の現状から抜け出したがつていてのも事実だ。無理も無い……もう5年も治療を続けている。

「澪は、いつたいどんな治療を受けているんですか？」

涉は再び沈黙した。

通路の奥で、エレベーターの動く音が静かに響いていた。

「週末に泊まる所が決まつたら、連絡くれるかい？」

彼は手に持つたコーヒーを飲み干すと

「それが、澪の秘密を教える条件だ」

困惑する省吾の耳には、ストレッチャーを押して歩く音が、通路の何処から聞こえていた。

その週末、省吾は澪と一緒に箱根から伊豆を回る旅行へ出かけた。

紅のトンネルを抜けると、木洩れ日から飛び出た光の喝采が待ち受ける広場に、小さな東屋あずまやがポツリと在った。

光に溶けた枯葉の匂いは、風に揺られながら再び森の中へ消える。茜色に染まった山間の景色は完全に紅葉まつただ中で、それを観に来た観光客で何處も混み合っている。

省吾と澪はその群れから離れるように小さな小道を抜けた。

東屋から見渡す木々の間から芦ノ湖が微かに見えて、何処かで小川の流れる音が聞こえていた。

落ち葉の絨毯を踏みしめて再び小さな小道を下ると、芦ノ湖半に降りる。

誰にも会わないような道を通つて二人は歩いた。落ち葉を踏む二人の足音と呼吸だけが、森の静寂に染み渡る。

省吾は澪の手をずっと握っていた。

彼女が何処かへ行つてしまわないよう」。

伊豆のバナナ園の近くにある風流な旅館に、省吾と澪の二人は泊まる事にしていた。

宿帳に記入する時、澪はさりげなく苗字に北原と書いた。

省吾はそれを見て、胸の中に熱い小石が注がれたような気持ちになる。

「なんだよ

小さく澪に耳打ちする。

「いいじゃん

澪はそう言つて悪戯な笑みを浮かべてボールペンを置くと、帳面をカウンターに戻す。

小奇麗な着物を着た受付係りの娘は、特にその帳面を眺めるでもなく閉じると

「夕方、お荷物が届いていますよ」

「ああ、後で部屋に」

省吾はそう言つてさりげなく笑みを返す。

「かしこまりました。それではお部屋にご案内いたします

そう言つて、受付の女性は案内係りの女中を呼んだ。

木々の生い茂る大きな敷地に小さな建物が幾つも散りばめられたその旅館は、受付が済むと一たん建物を出る。

「ねえ、何の荷物?」

外に出た時、澪が訊いた。

「ああ、面倒だから着替え送った」

省吾はさらりと言つて歩き出す。

じゃあ省吾のカバンには何が入っているのだろうと思いつながらも、澪もそれ以上訊きはしなかつた。

木立の中を少し歩いて

「ここが露天風呂の入り口になります」

女中がそう言つて歩みを緩めると、再び歩き出す。

少し行って黒い日本家屋の建物が在る。建物に入ると、その中に上下あわせて6つの部屋が在つた。

「いらっしゃです」

女中について暗い階段を上がる。

少し傾斜のキツイ板の間の階段と白熱灯で照らされたそこは、いかにも昭和の匂いがした。

階段を上りきつて再び「いらっしゃです」

女中がそう言つて戸を開けた部屋には『天女の間』と記されていた。

隣の部屋は『仙人の間』

省吾は何だか判らないが、隣の方がよかつたなと思った。

澪が天女のように空へ上がつて消えてしまいそうな気がして、胸の内に僅かな不安というか、嫌な予感が湧き出て來たから。

浴衣の場所などの説明をして、女中は部屋を出て行つた。

窓の外には、紅の木々と茜色の空が見えた。緋色に変わり始めた頭上にはもう星の輝きが見える。

「露天風呂つて、入つたことある?」

澪が窓から身を乗り出して、風呂の在る方角を見て言つた。

「いや、ないよ」

「混浴かな?」

「どうかな、そう言えば何も言つてなかつたから、別じゃない」

「なんだ、そうか。混浴とかつて、入つてみたかったな」

「でもさ、他の男連中にも見られるんだぜ」

省吾は窓に近づいて澪に並ぶと、一緒に外を眺めた。

「そりゃ、そりゃだね」

澪はそう言って笑うと「そしたらシラウカヤンビツするね。」

「どうするつて？」

「あたしを隠す？」

「隠すつて、何処にだよ」

「別に、何でもない」

澪は自分の中だけで話を終わらせると、部屋の中を歩き回る。

「じゃあ、ここで一緒に入ろうか」

澪が風呂場の入り口を開けて笑った。

大きなガラス張りの天井がついた小さな個室の温泉が各部屋に付いているのだ。

「いや……どうあるかな」

省吾は何時もより積極的な彼女にちょっと戸惑ながら、どう返していいのか判らず苦笑した。

## 【46】足跡

『この跡形は私が生き続ける限り、この胸に留めておけ。いつ見上げても、私の中にお前の跡形がはつきりと見えるはずだ』月はそう言って、優しい輝きを見せた……

ムーンストーンに刻まれた跡形は永遠だ。

月面に残された足跡は、何十年、何百年経っても消える事は無いのだという……

澪は原因不明の血液の病氣に侵されていた。血中成分濃度のバランスが異常になるのだ。

現代医療では打つ手は無かつた。

からうじでクスリを使って誤魔化す事しか出来ない。毒素ではないので透析をしても意味はない。本人の自覚症状はないが、倒れたら一気に昏睡状態に陥るだろう。

綱渡り的な生活を始めて半年、澪が中学一年生の夏の出来事だった。

彼女はムリを言つて連れて行つてもらった千葉の海で溺れる事故に会う。救助された時は一時的に心肺停止を起こしており、兄の涉が持つっていた携帯用の除細動器で危うく命を取りとめた。

しかし、それから澪の身体に異変が起つた。

心停止した翌日には血中成分の異常がほぼ消えたのだ。それからしばらく澪の身体は完全な正常状態を保つた。

しかし、2週間すると再び血中成分に異常が起き始めた。白血球も赤血球も異常に増え、その代わりに血小板の数が減る。増えすぎ

た白血球は善玉細胞を食べようとする。体内のバランスが瞬く間に取れなくなる。

仕方なく以前投与していた薬を使うが効き目が少なかつた。

このままでは澪が昏睡状態になる。

まだ医大を出たばかりだつた兄の渉は非常手段を取つた。確信はあつたが医院長である父親が許可を出すはずも無い。科学的検証による根拠が足りないので。

ある深夜、こつそりと病院の手術室へ澪を運んだ。

そして、電気ショックで心停止させると、再び蘇生処置を施す。一分以内に蘇生せれば問題ないだろう。

彼女は蘇えり、血中成分は再び安定した。

しかし、2週間もすると再び血液成分の異常が出始めた。

そしてまた、渉は澪を臨死させる。

デッドラインを超えた治療が、彼女にどんな影響を及ぼすのかは定かではない。

そのサイクルは次第に短くなつて、現状では一週間しか持たないのだ。

木の葉を揺らす秋風の音が、木々に木靈する。

サラサラと落ち葉を揺らして小波のような微かな音が夜の闇に響き渡り、まるでその音を妨げないように澪は息を殺すような官能の吐息を吐き続ける。

旧家のような黒い梁と柱で出来た部屋の内装でも、暖房設備は完璧だった。

二人は入浴の後、そのままの姿で時を過ごした。

夜も更け、星影にフクロウの囁きが聞こえる頃、省吾の腕に澪は頭を擡げる。

何処かウトウトして「る」よりも見えるが、省吾には彼女の微かな変化を読み取る事が出来た。

ほぼ確実に起ころる事を覚悟していたその症状は、渋に聞いて認識していた。

それがとうとう始まつたのだ。

自分にはそれを防ぐ事は出来ない。今の省吾には、澪を救う事は出来ないので。

「大丈夫か？」

「うん、何だか頭の奥の方で眠気が広がるの」

昏睡に落ちそくなつて「る」のだと、省吾は気づいていた。

それでも澪は幸せそうな笑みを浮かべていた。

うつろいだ彼女の瞳が閉じたのを見て、省吾は起き上がりつて澪を膝に抱えるように抱く。

すると、彼女は再び目を開けた。

とても弱く、その中に輝く光は今にも消え入りそうだ。

「澪？」

省吾の声に澪は反応して、声を出した。

「あたし、知つてたんだ。ショウウチヤンと出逢う事」

「えつ？ どういう事？」

「臨死を繰り返してこらつち、「あたし時々予知夢を見るの」

「予知夢？」

「そう……ショウウチヤンの姿ははつきり判らなかつたけど、あたしを助ける誰かが現れるのは知つてた」

「でも、俺は結局澪を救えない。助けられないよ」

澪は首を横に振ると「充分救つてくれたわ」

澪の瞳が薄つすらと陰りを見せた。

知らない人が見たら、ただ眠そうにウトウトして「る」ように見える。

しかし、そのうつつな仕草は、明らかに世界を隔てた眠りへの予兆なのだ。

それでも省吾は、自分が思いの外冷静でいる事に驚いていた。

来たるべき時が来る事は知っていた。しかし、これほど冷静に彼女を受け入れられるとは思つていなかつた。

自分に出来る事は、彼女の願いを叶えるだけ……省吾はそう割り切つていたのかもしだれない。

「俺も、知つてたよ。澪の治療の事」

「そう……」

澪は、省吾がそれを何時何処で、誰に聞いたかは訊かなかつた。思考力が低下しているのかもしだれない。

彼女は天井から吊るされた照明に視線を移す。

「人はこの世に生きた足跡を何処かに残したいと思うものなんだつて」

「足跡？」

「それが、仕事だつたり自分の子供だつたり……芸術だつたり……」

澪はひとつ息をついて省吾を真っ直ぐ見上げると

「あたしはショウちゃんの心に足跡を残したから、もういいよね」

「そんな……そんな事無い。ちつともよくないよ」

「あたしは中学の時に海で溺れて一度死んでるわ。いいえ、今まで何度も死んだかもう自分で判らない。誰かの心に足跡を刻めるなんて思わなかつた」

部屋の床の間に置かれた時計の刻む微かな音が、静寂の中に沁みるようにな響いていた。

「あたし、もう臨死にたくない。ゆっくり眠らせて」

澪はそう言つて、最後の力を振り絞るように顔を近づけて省吾にキスをした。それは触れるだけの柔らかな、甘い口づけ。

「ショウちゃんを追いかける女の子がいるわ。追いつけないけどずっと追いかけている娘がいるの。たまには振り返つてあげて」

澪はそう言つて省吾の腕に頭を着けた。

「あたしは、もういいから……」

彼の腕に頭を擡げると眠るように瞳を閉じて、澪は

「星が綺麗だね」

微笑みの中に、静かなプレスをひとつ。

省吾が振り返った窓の外には、満天の星が輝いて森を照らしていた。

『ありがとう…』省吾には確かに聞こえた。

しかし次の瞬間、彼女の呼吸はもう聞こえない。

星屑さえも息を潜める静寂の中で、省吾の心の中に消える事の無い彼女の足跡だけがくっきりと残っていた。

## 【46】足跡（後書き）

次回最終話予定です。

## 【最終話】フレス

「いいか、使い方は簡単だ。全てオートで検知してコンピュータが除細動をする。君はモニターの指示に従つて放電のスイッチに入るだけだ」

「こんな小さなもので、彼女の心臓は動きますか？」

「大丈夫だ。心臓が停まつたら、1分20秒以内に使え。4分を過ぎたら諦めろ」

「諦めるって……？」

「その時は仕方ない。アイツが望む通りになるだけだ」

……

省吾は渉に教えられた通り、旅館に届いた荷物の中から除細動機を取り出して、澪の胸に電極を当てた。

……諦めてたまるか。何度もボタンを押してやる。

一度目の放電で彼女は呼吸を取り戻した。

しかし自発呼吸はあるものの、昏睡状態は続いていた。自然に心停止した彼女の身体は、手遅れの一歩手前だったのだ。

省吾が携帯電話で渉に連絡すると、彼は既に近くまで来ていた。

敷地の落ち葉を巻き上げる勢いで、彼の白いアウディは旅館に滑り込んで来た。

直ぐに最寄の病院で処置を受けた澪は一命を取り留める。

しかし治療なんてほとんど必要なかつた。臨死したのだから、自然に血中濃度は正常値へ近づいて容態は回復する。

その後、自分の病院へ彼女は搬送された。

\* \* \*

暮秋ばしゅうの風が青い虚空を吹き荒み、凍えそうな心に染み渡る。

やたら大きなロビーには外国人も多くて、時折慌しく動く人波が喧騒の風を巻き起こすと、その度にこころがざわめいた。

大きな窓に映るボーイングの機影は、陽差を受けて反射光を白く放っている。

飛行場なんて初めてだつた。

省吾は雑踏から離れるようにロビーを出ると屋上に上がって、滑走路に移動を始めた大きな機体を眺める。

「澪をアメリカに連れて行く」

あの日、旅館に迎えに来た涉は、省吾に向つてそう言った。

「ミシガン州の湖の近くに脳の研究施設が在る。澪の病気は内臓じやない。脳に原因があるんだ。だから、そこで治療をさせる」「脳……ですか？」

「あそこなら、意識を保つたまま、臨死と同じ刺激を脳に与える事ができるらしい」

「直るんですか？」

省吾はそれを訊くのが怖かった。しかし、訊いておかなければいけないとthought。

「直して見せるさ」

涉は胸を張つてそう言った。

省吾は飛行機に搭乗する前の澪に会った。

今まで通りの清楚で穏やかな笑顔を彼女は省吾に見せた。

「じゃあ、行つてきます」

「ああ、行つて来いよ」

お互にさよならは言わなかつた。

しかし、「待つていて」とも「待つてるよ」とも言わなかつた。そんな事はお互い判らない。それは、二人共知つてゐる。

「縁があつたら、また会おうね」

澪は搭乗ゲートに向う直前に、明るくそう言つて笑つた。

初めて彼女を見たあの口のように、切なくも麗らかな笑みだつた。

「ああ、もちろん」

省吾は笑つて左手を上げると、彼女の後姿を見送つた。

風は真冬のように冷たく省吾の身体を吹き抜けた。

ダッフルコートの襟元を片手で掴んで肩をすくめる。

ボーリングの異常に大きな機体が助走を始めて車輪が滑走路を蹴ると、四基のジェットノズルの後方には陽炎が追いかけて背景を朧に揺らす。

轟音が轟いて、省吾の視線の先で機体はどんどん小さくなつていくと、身体に吹く冷たい風が益々冷涼に感じる。

省吾は空を仰ぎながら大きく息をついた。胸の奥に氷の空洞みたいなものを感じて、それを覆い隠す何かに少しだけ息が苦しくなる。彼は思わず「コートの襟元を両手できつく締めて、無理やり唾を飲み込んだ。

ふと背中に人の気配を感じて振り返ると、そこには愛香が立つている。

「行つちゃつたね」

「ああ。お前、身体の具合はいいのか?」

「うん、かなりいいよ」

彼女はオレンジとピンクのボーダー柄のニットキャップに、軽く手を当てる。

直射日光が彼女の頬を白く照らしていた。真っ赤なマコートは、久しぶりに見た彼女らしい姿だった。

「髪、けつこう伸びてきた？」

省吾は、ニットキャップの襟足から僅かに覗く黒い髪の毛を見て言った。

胸に視線を下げないように、意識を上に持つてこうしたのかもしない。

「うん、超ベリーショートってカンジ」

愛香は襟足を指で摩つて小さく笑みを浮かべると、直ぐに真顔になる。

「これでよかたの？」

「これが最良だろ。このまま今の治療を続けるのは酷だよ。向こうへ行けば、とりあえず心停止させずに、同じ信号を脳へ送る事ができるらしい」

「え？」

「身体への負担も無くなる」

「そうだね……」

愛香は、上空に浮かぶ微かな機影に視線を向けると、精一杯の明るさで

「また会えるといこね」

「どうかな……」

省吾は静かに笑みを浮かべると、手すりに身体を預ける。

愛香は、彼の言葉は聞こえない振りをした。その言葉の意味を訊き返してはいけないような気がした。

青い空がこんなに淋しく感じたのは一度目だった。

一度目は自分がオペをする朝。

あの時も、抜けるような青い空を恨めしく思つた。

意味も無く、こんな青い空がなんの役にたつのかと考えたりした。

白い雲に何の意味が在るだろ？と思つた。

でもきっと、この青い空も白い雲も、人が元気を取り戻す為には必要なのだと、今は少しだけ感じることが出来る。

「寒いだろ？ 下へ降りよつ」

省吾はそういうて、左手を差し出す。

愛香は彼の手に掴まると

「うわ、手が冷たい」

照れ隠しの言葉だった。

「愛香の方が冷たいよ」

「そ、そうかな……」

彼女は手のひらから指先までの全てを使って、省吾の皮膚の感触を確かめるように静かに握り返した。

省吾は彼女の手を掴んだまま、その手を自分のコートのポケットへ入れて歩き出す。

「俺がここにいるって、よく判つたな」

「フフ、あたしにも特殊な能力が在るのかもね」

「マジで？」

「ウソに決まつてゐじゃん。ロビーでショウが屋上へ行くのを見かけたんだよ」

冬の足音が聞こえそうな寒い日だつた。

乾いた風が吹き抜ける蒼穹そらに、一人の呼吸が静かに、ちよつぴり暖かい音を刻んでいた。



## 【最終話】プレス（後書き）

タイトルの【ブレス】は、登場人物達それぞれの生きる証を意味します。呼吸するという事は、生きている証という事で。

恋愛小説にも関わらず、何時も恋愛以外の何かに苦悩する姿を描いてしまいます。

今回はそれぞれの病状についてはあえて詳しく記載しませんでした。途中更新が不規則になつたにも関わらず最後まで読んでいただいた方、つまみ読みしていただいた方に大変感謝いたします。  
有難うございました。

tokujirou

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6253c/>

---

プレス【breath】

2010年10月8日13時04分発行